

人文会ニュース

創立 40 周年記念東京合同研修会特集号

2009. 5

人文会創立 40 周年記念東京合同研修会について

.....	代表幹事 鎌内宣行	1
特別講演 教養主義の没落と人文・社会科学	竹内 洋	3
パネルディスカッション 人文会の 40 年と人文書の可能性		17
ケーススタディ 人文書販売の現在と未来		39
パネルディスカッション 人文書の最前線		69
フリーディスカッション 人文書販売の未来をデザインする		93
東京合同研修会参加者アンケート.....		117

105

NTT出版

佐伯啓思

大転換

脱成長社会へ

文明の破綻としての経済危機
今、必要な「新たな社会」像とは

1680円(税込)

東京都品川区上大崎3-1-1 TEL03-5434-1010
<http://www.nttpub.co.jp>

山口啓二著作集 全五巻

第一巻 解説／荒野泰典
近世史研究への旅立ち

第二巻 解説／吉田伸之
幕藩制社会の成立

第三巻 解説／高埜利彦
幕藩制社会の構造

第四巻 解説／塚田 孝
地域からみる近世史——東松山の歴史から

第五巻 解説／森下 徹・町田 哲
時代に向き合って生きたる

〔各巻 1 万500円〕

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 1-1-3
TEL (03) 3203-4851 / FAX (03) 3203-4854
<http://www.azekurashobo.com/>

校倉書房

知ってますか?

国文学全般の情報を
毎日お届け!
笠間書院のblog
<http://kasamashoin.jp>
ぜひご覧ください!

徒然草文化圏の生成と展開
島内裕子 A5判 13,650円
徒然草の影響＝徒然草文化圏を巡る刺激的な試み。
徒然草をより深く広く理解するための方法論を提示。

江戸 唐話用例辞典
小田切文洋編著 B5判 15,750円
豊富な用例で、江戸～明治期の日本人の「唐話」(近世中国語)受容の全体像を初めて明らかにする。

笠間書院 東京都千代田区猿樂町 2-2-3
電話 03 (3295) 1331 (価格税込)
<http://kasamashoin.jp/>

岩波書店

軍部と民衆統合
——日清戦争から満州事変期まで——
A5判・定価4620円(税込)

由井正臣
第一次史料を駆使して、近代日本における軍部の政治勢力化の過程と国民組織化の動態を実証的に解明。

マキアヴェツリの生涯
ロベルト・リドルフィ／須藤祐孝訳・註解
人文主義と近代政治思想の源に立つ人物と思想の伝記。待望の全訳なる。A5判・定価18,900円(税込)

〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

人文会創立四〇周年記念東京合同研修会について

人文会代表幹事 鎌内 宣行

人文会は昨年十月三日と二四日の二日間、全国の人文会特約店の中から約一〇〇店舗の書店・大学生協担当者様においでいただき「人文書の可能性を探る」と題し「東京合同研修会」を開催いたしました。本号「人文会ニュース一〇五号」は特別号とし、研修会の内容を再録することにいたしました。

創立四〇周年の昨年は記念事業として『人文書のすすめⅣ』の刊行と「東京合同研修会」の開催を会活動の大きな柱として取り組んで参りました。『人文書のすすめⅣ』に関しましては五年ぶりの改訂となり、中でも中ジャンルの見直しをいたしました。基本図書を約六〇〇〇点に増やし、選書に当たっても従来通り書店現場の担当者様の協力を仰ぎました。また、各ジャンルを俯瞰した解説も新たに専門の先生方に依頼して執筆していただいております。『人文書のすすめⅣ』は今回非売品とさせていただきます。人文会特約店様、大学図書館様などに送らせていただきました。

「東京合同研修会」につきましては、従来こちらからそれぞれ地域を訪問して特約店様との研修をして参りましたが、前々から一度書店様をお呼びできないかと考えておりましたが、四〇周年という節目の年に実現することが出来ました。人文書の棚管理についてもPOS導入による单品管理、自動発注システムという店舗が大半を占める現在、担当者はアルバイトの管理やレジ業務、顧客対応などに追われ、本来の棚と向き合う仕事が減っているのが現状のようです。人文書の棚は常備品、いわゆるロングテールといわれる基本図書が中心ですが、時代に即した棚構成や展示方法、フェア

企画など棚担当者様のスキルが売上を左右するジャンルであり、人文会としても書店様との研修は大事な活動になっております。今回の「東京合同研修会」では二日間にわたりましたが、人文会会員社と書店棚担当者様との間で有益な時間を共有することが出来ました。

書籍販売額の減少が止まらない状況では何よりも現場の棚担当者様のスキルが益々重要になるのは必定です。会としてもこの研修を通じて人文書担当者としての自己検証と販売上のスキルアップのきっかけになればと考えておりました。終了後のアンケート等では好意的に評価をしていただきました。会としても一定の成果が上がったと総括しております。

一〇〇名の書店人が一堂に会すること。そこには必然と交流が生まれます。新人からベテランまで人文書担当者様同士の連帯感が自然発生的に生まれたようです。初日終了後のレセプションでは会の営業現場担当者も含め、書店と会員社が入り乱れ活発な議論の場になりました。人文書に対する思い入れや、販売上の工夫はもちろん、仕事上の悩みを含め厳しい状況を乗り越える契機となる場を提供出来たのではないかと期待を持ちました。その意味では私たちは書店同士を結びつける接着剤の役割も果たせたのではないかと感じております。

本誌をお読みいただき、当日の臨場感を少しでも感じ取っていただき、ご自分のお仕事に役立てていただければと思っております。と同時に人文会の活動にご理解とご支援、またご批判などいただければ幸いです。

最後になりましたが、この研修会に参加をいただいた皆様方にあらためて御礼を申し上げます。特に特別講演をいただいた竹内先生はじめ、パネラーの皆様方には今号への再録に関して快くご承諾いただいたことに感謝いたします。

特別講演

教養主義の没落と

人文・社会科学

竹内 洋
(関西大学文学部教授)

私が『教養主義の没落』を書いた時に、毎日新聞で鹿島茂さんが書評してくれたんですよ。その出だしは、
『そういえば自分の大学時代、一九七〇年くらいの時には、神田のパチンコ屋に岩波新書が景品としてあった。それも、景品のトップ、ベスト5ぐらいに入っていた』
というものでした。確かに当時の岩波新書は、学生街のパチンコ屋で景品になるほどのファッション性もあったし、またなんか読まなければいかんとかいう感じもあった。要するに学生というのは読書するものだったというのが非常に強かったのだと思います。

社会全体に、読書が格好いいという風潮があったと思います。例えば私なども、学生時代、私の学生時代は今と違うから下宿に女子学生が来るということは滅多にないのですが、たまの用事で来たりする時には、本棚を整理してなるべく前のほうに難しそうな本を置いて、怪しげな本は後ろのほうへ置くということをやったりしました(笑)。特にそういう意味では一番難しそうなのが人

文書ですから、そういうのを前に置くというようなことをしていたのです。

若い方は、あまり知らないと思いますが、一九七一年に群馬県で大久保清事件というのがあったのです。前橋で七、八人の女性に次々と声をかけて車に乗せて付近の山中で暴力振るって、最後には殺してしまうという連続殺人事件です。この大久保清の誘惑戦術というのが非常に教養主義的なんですよ。画家のようなベレー帽をかぶってルパシカみたいなを着て、埴谷雄高や柴田翔の『されどわれらが日々』や詩集などを持ち歩いていた。そして彼のノートには、なんとロシア文字が書いてある。そういうのが誘惑戦術になっていたのですよ。教養主義が犯罪の小道具としても使われていたということが、時代を感じさせると思うのです。

そのところが、教養主義というものが大衆化した時代だといえると思うのです。ちなみに教養主義という言葉を使いましたが、「教養主義」と「教養」は違う、両者は一応は区別しておいたほうがいいと思います。教養

など、一部の人たちのものだったのです。それが大衆化してくるのが、戦後だと思えます。戦後、旧制高校のほとんどが地方の国立大学になったわけですね。特に寮などは極めて旧制高校的だったですよ。旧制高校的なカルチャーが残っていたのです。このように、新制大学などに旧制高校的なものが非常に残っていたこともあって、戦後はそういう特権的な文化が大衆化して広がったのですね。

ところが、出版社の人が言うには、もう最近はどういう堅い本が地方の国立大学でほとんど売れないようなのです。それは旧制高校的な教養主義の遺産、文化の遺産がもうなくなったということだと思えます。

現在は、大学生は本を読まないといく言われるけども、ある段階までは本当に、私も自分で計算してみてもびっくりしましたけども、書籍のかなりは大学生が買っていたのです。だから大学生というのは、出版社、書店にとっては、大きな顧客であって、例えば三〇%から四〇%はもう大学生が買っていてですね、社会人が買う分量をはるかに圧倒していた時代っていうのが続くわけです。ですからその時代には、あの有名な丸山眞男さんが、日

本の文化というのはだいたい若者文化だ。例えば、読書もそうだし音楽もそうだけど、学生時代にそういうような難しいのを読んで、卒業して会社へ入ると浪花節とか講談本とかそういうものを読むと言っていましたけど、まさに実態もそういうのに近かったんだと思いますね。

教養主義の衰退

読書調査を見ると本当にすごいなあと思いますよね。一九七一年の大学生の一日平均読書時間は平均で一〇八分。ところが、現在はもう三〇分以下ですよ。さらに一ヶ月全く本を読まないっていう学生が三人に一人です。

私も大学のゼミで教えていて、なるべく人文書のしつかりした本をテキストにしたいのですが、もう二千円超えると学生は非常に嫌な顔します。だから新書を使うことが非常に多いんですね。大学のゼミですから、専門書を使いたいのですが、学生にとっては二千円がまあ限度なものです。だから二千円超えると、もうテキストとして非常に使用しにくいという状態になっています。

そしてね、こういうことが起こっていると思うんです。かつてと今の大学の読書時間や勉強時間を比べたら、

例えば京都大学と関西大学を比較すると、勉強時間や読書時間に、確かに差はあるんですよ。もう今から二〇年三〇年前から。だけどその時代は滅茶苦茶差があるわけではない。片方が二時間本読んだらもう片方は一時間半とかその程度だったんですよ。ところが、今は、大変大きな差があるのです。これはどういうことかということと、要するに大学が少ない時は、大学生という意識が強くトップ大学のほうにアイデンティファイしていくのではないかと思うのですね。それで多くなると、悪貨が良貨を駆逐するみたいに、優位模倣じゃなくて劣位模倣みたいになってしまふ。だから、いわゆるトップ大学と中堅大学のそういう文化的格差というのは、広まったような感じがいたします。

私は他の大学に行くと必ず学内の書籍売場に行きますが、本当に大学の文化度を表していますよね。一番ひどいところでは、教科書と漫画しか大学の生協にないんですよ。新書も置いてない。だから、私は大学経営者に言いたいのですが、経営者は見栄でも自分たちの大学の書

籍売場に難しい本をいっぱい置かないと、ああ、この大学のレベルってなんやあ、っていうことになるのですよ。それに本当は、大学はもうちょっとそういう書籍とかをサポートすれば、それをまた読むという人も出てくると思うんですよ。

多分皆さんも、現在の大学生は本読まなくて困るって思っているでしょうが、それは実態なのだけど、こう考えたらいんじゃないでしょうか。今の大学生は、全然昔の大学生ではないのですよ。高校生だと思ったらあまり問題は起きない。高校四年生とか、高校生の延長だと要するに大学に高校カルチャーが入ってきたのですよね。この間、ゼミの時間に、学生が突然質問をしたのです。「株の値下がりについて教えてください」と。金融危機で話題になっていたからですが、私の専門なんか関係ないのです。要するに先生は辞書代わり。自分で調べろよと思うのですが、高校生だと思ったら、そんなものかなあとも思うんです。

研究の変化と人文書

だから、実質的には今の人文書の顧客は、大学院生ではないかと思うんですね。院生の数は増えているのです。それと、大学の教師自体も、書き手でもあるけども人文書の消費者でもあるんですね。ところが、これらが上手くいてないんですよ。

私の時代は大学院に行ったら簡単に就職できたんですよ。なぜかというとツテ就職がほとんどだったからです。あまり研究業績があるわけでもないのに、滅茶苦茶人柄がいいか、雑用でもきちんとやるとか、そういう理由で採用されたりもしたのです。そういう時代は、だからやたら勉強して、専門の論文をたくさん書く必要ないんですよ。最小限書いたらいんですよ。そうすると、人文書などいろんな幅広い読書ができるわけですね。

ところが、皆さんご存じのように、今、高学歴ワーキングプアといわれる院生問題がある。要するにいつまでたっても職に就けない。

そういう状態になると、論文をたくさん書かなければ

ならない。だから今の大学院生は、ある意味では人文書、広い意味での教養の、本当は担い手のはずなのが、もう論文書いて業績作らなくてはならないから、自分のテーマの論文しか読まない。教養書や人文書を読んでいる余裕ないんですよ。そうすると幅広い教養みたいなのが身に付かないし、そういうものを知ろうとも思わない。私には哲学は関係ないんだなんて思っている人は多いはずですよ。

やっぱり幅広い教養と専門の関係というのは、三角錐みたいな感じですよ。専門だけやっていけば、そりゃあ効率いいけど、上まで行かないと思いますよね。倒れちゃうから。一方で、土台を、それが教養みたいなものだけど、広げていると、エネルギーは一定だとすると、それも上にあんまり行かないですよ。だからいろいろな院生を見ていると、教養ある子だけど論文がいまいちだなあと思うのがある。今度は何にも面白くもないような専門論文書いて、とにかく載ればいいという感じで、だけど何の教養もないっていうのもいる。昔は、割と大学院生は就職できたから、いろんな本読んでいたんですよ。

そういうことができにくい。そういうことが両立できる子は、本当にかなり優秀な子になるから、そうすると非常に少なくなるわけですよ。

それが、大学院生が本来は潜在的マーケットであるはずなのに、上手く乗っかってこない大きな理由だと思います。

それからもう一つは、今度は、大学教師側にも問題がある。人文・社会系から理系も含めて、現在の十七万人の専任大学教師は、人文書の偉大なるマーケットだと思うのですよね。

しかし、先の大学院生と同じ状況がある。昔は、業績とかあんまり言わないから、私の時代には論文なんかほとんど書かなかった人がいっぱいまして、書かないのを威張っていたような先生もいたのですね。そういう先生の中には、論文書かないのだけど、本はよく読んで、非常に物知りで、ちょうど漱石の『三四郎』に出てくる広田先生みたいな人が随分いたのですよ。だから、やら論文書かなくても良かったんだけど、今は無茶苦茶書くんですよ。書かないと、業績が少ないと指摘される。

そうすると、これまた大学院生と同じで、自分の専門からちよつと離れた本は、時間取るから読まないという状態なのです。

この、有象無象って言ったら怒られますが、十七万人みんなが本や論文を書かなくても私はいいと思うんですよ。今のままだと研究者としても困ること多いですよ。例えば、私が漱石の『坊っちゃん』について書くこと思ったとします。その先行研究を検索すると、無茶苦茶多く出るんですよ。そうするとタイトルだけ見て、これはくだらないってことはできないから、取り寄せて読んでみたら、本当に「すごい」のが多いわけ。昔はやっぱ自己規制がありましたよね。何でもかんでも書くというわけではないから比較的良かったのに、今はもう何でもかんでも書くから、タイトル見ても分からず大変なことになっていきます。

出版社の人も、今は持ち込み原稿がすごく多いと言いますよね。人文会の出版社だったらもう、断るほうが膨大な仕事になっていいるんじゃないかと思いますが、これも学位取らなきゃならない、教授になるには本がなきゃ

駄目だとか、そういうブレッシャーがものすごいあるわけです。そうするとこの類の本も、もちろん今日お集まりの出版社のそこから出ているような本にはそういうことではないんだけど、すごい状態であると思います。

そういうのも読者にまた悪い影響を与えるんじゃないかと思うんですよ。本なんか読んでも面白くないというふうに思われてしまう。私は京大にいた時、出版会の理事を二年ぐらいしていました、学位論文を読んで、「そりゃあ専門としては分かるんだけど……」という論文をいくつも見てきました。例えばある哲学者の脚注についての研究なんです。そりゃまあ学問としてそういうのがあってもいいけど、そういうものを本にしても多分普通の人は読まない。そういう本がもう量産されているんだと思いますよ。

実際、名古屋大学の出版会の理事をしていたある先生が言っているのは、さっき私は十七万人いるって言ったけど、だいたいその大学教師でも物書ける人は一%もないんだというわけです。その名古屋大学出版会も、いかに断るかが大きな仕事になってきていると言います。要するに英語で言う、「so what」っていうやつです。

よ。「それで？」っていうような感じの、そういうものがまたどんどん出ると、本そのものが面白くないみたいに思われるのではないのでしょうか。

本来、人文書の読み手である人が、どんどん書き手になってしまふ。ちょうどカラオケ現象みたいなものですよ。皆さん、カラオケに行かれる人もいると思うけど、あれ行ったらもう、だいたい人の歌聞いてないですよ。人が歌っている時はもう歌集で次の歌見えていて。今カラオケで起きていることは、今の学者とか院生に起こっていることであって、人の本は読まないけど自分の本は書きたいっていう現象は、これはどんどん悪循環を起こしていくのではないかと思うのです。

背伸びする大衆文化

人文書の黄金時代というのは、今とまたちよつと違う大衆社会というものが上手く作動したんだと思います。大衆という言葉は、元々仏教語で大勢のお坊さんっていう意味なのです。英語だったら mass だけれども、それを大正時代に大衆と訳したんです。その時の大衆って言

葉は、他の国とちよつとイメージが違ふと思うんですよ。ミドルクラスのような感じですよ。だから農民を大衆とは言わなかった。都会のサラリーマンみたいな人を大衆つて言つた。そうすると皆、大衆になりたいんですよ。大衆になるということは、要するに背伸びすること、群衆とは違うものである。優位模倣みたいな、向上心というのか、そういうようなものとセットになつていたのではないかと思うのですね。

それがさつき言つたように戦後日本社会で出てきたと思うのです。年配の方は名前ご存じだと思いますが、加藤秀俊さんつていう社会学者が、中間文化つていう名前を付けたんです。要するに本で言つたら、原書は読めないけど、それから専門書はちよつと抵抗あるけど、新書だつたら読んでみたい。新書つていうのは元々、日本の中間文化の厚みが段々増えてくる時に出てきたものですよ。ね。黄金時代というのはやつぱりこの中間文化、日本の背伸びする大衆文化みたいなこととマッチングして出てきたんだと思います。

そうするとですね、そういう大衆文化がある時から変

わつてきたんじゃないかなあと私は思います。例えば新書。昔だつたら新書は岩波新書、中公新書、それから講談社新書ぐらいでしたよ。それで、そりゃあもう今から見たら非常に高いレベルだつたと思いますよ。そういう高いレベルでも、岩波新書一冊書いたら家が建つとか、まあそれはどこまで本当だつたかどうか分からないけど、かなり読まれていた。

新書も元々はこのように中間文化的なものだつたわけですが、今の新書は口述筆記じゃないかと思うぐらい、速読の人だつたら三〇分あればもう分かつてしまうような本もあります。

だから、『学問の下流化』でも少しか書いたけど、『下流新書』と私は呼びたいですね。でも、そのひとい新書が売れるわけですよ。ということは大衆文化と非常に違つてきているんじゃないかと思うんです。だから私はネオ大衆社会とでも名付けたらいいと思うんです。今までの日本の背伸びする大衆文化と違ふようになったんじゃないかと思います。

その区切りが、だいたいあの新人類つていう世代から

ではないかと思ひます。新人類が生まれたのは、だいたい一九六〇年です。田中康夫の『なんとなく、クリスタル』が一九八〇年に出ているんだけど、あそこに出てくる女の子とか男の子はだいたい元祖新人類だと思います。そこに何という言葉があるかというと、男の子が、「僕は本なんか読まないけど、お馬鹿ではないんだ」って言うっている。つまりもう、そういうような状態なんです。本なんか読まなくなつていいんだっていうのが出てくるのがこの時代です。そこ辺りから非常に変わつてきています。

衆愚社会モデルと新階級社会モデル

これからの日本社会を考える時二つのモデルがあると思ひます。

一つは衆愚社会。ニーチェが言うには、大衆というのは高貴なものを全部引きずり下ろして、自分が分からなものはみんなくだらないって言うものだと。それから、自分が凡庸なことに何の恥じらいもなく、凡庸でどこが悪いんだという、そういうことをオルテガやニーチェ

が言っているけども、世界的にまっしぐらにそういう所へ走っているんじゃないかという氣もしないでもないですよ。

例えば、テレビのコメンテーターなど見てみると、全然政治と何にも関係ないような芸能人が、もちろん芸能人は芸能のことでは専門家だけど、社会問題や政治問題に關して一家言しゃべつて、それが専門家の発言以上にもっともらしいような状態になっているみたいです。こういう社会つて世界のなかで他にあるのだろうか、と思ひます。

それから私は大学に住んでいるけども、もちろん大学にそういういろんな人が、スポーツの人や芸能の人が来てしゃべつてもらつてもいいし、いろんなことあつてもいいんだと思うけど、そういう人がいきなり教授になるつていうのは、何なのかなあと思ふんですよね。世界にどこにそういう大学があるのか。つまり、大学教師の中にプロフェッショナルカルチャーというのが全くないということですよ。

昔丸山さんが、「文化人はどんな芸能人化して、芸能人がどんな文化人化する」ということを言っていた

けど、もうとことんそういう状態です。その土台にネオ大衆社会みたいなものがあって、これが衆愚社会という一つのモデルだと思います。

この衆愚社会になると人文系で生き延びるには、下流人文書を狙い目にする以外にないと思うんですね。

もう一つは、ヨーロッパ型の新階級社会モデルです。一億総中流化と丸反対ですよ。階級文化みたいなものがある、例えば貧しい人が皆、自分の文化に、まあ良く言えば誇りを持つ。例えば、昔の日本にはあったと思いますが、別にその人は偉いさんでも何でもなくても、「俺はお天道様に背を向けるようなことはやってねえんだ」という誇りを持てる、そういう職人文化みたいなものです。

それが、戦後は一億総中流化でみんな背伸びしましよ、うという社会になったのです。そういう社会になつてくると、ある意味では社会のエリートも全然ハッピーなわけではないですよ。今のエリートって無常極まるエリートで、安定性がなく、責任だけは大きい。

ただ最近、自分は自分でいいんだっていうそういう誇り、自足と誇りのあるですね、そういう階級文化みた

いなのはできる可能性もあると思うんですよ。実際、昔は勉強できない高校生は劣等感持ったりしたけど、今はあんまりないですよ。これはだから読み方によって、そういうヨーロッパ型の自足ある階級文化になりつつある。そうすると、高学歴の人は、絶えず大衆文化を気にしなくてもいい。だから、ある程度の水準の文化の質を維持できることになる。

このモデルだと人文書は上流化するでしょう。中間文化の時代に人文書が非常に売っていたというのは、中流人文書だったんだと思います。だからある程度クオリティの高い三社の新書がそうだった。

しかしこれからは、下流人文書でいくのか、それから上流人文書にいくのかっていう、極端に言うとそのどちらかでしょう。しかし、当面は、日本の大衆社会は、その二つのどちらかではなくて、ないまぜで進んでいくのではないかと、私は思います。

パブリック・サイエンスと人文社会科学の現在

この、サイエンスとしての人文社会科学を、誰のため

の何のための学問かと考えた時に、三つ挙げる必要があります。

まずはプロフェッショナル・サイエンス。これは一応学問が制度化されていて、学者を生産する、学会を中心としたような学問です。これはどの分野の学問でもあると思うんです。

二つ目がポリシー・サイエンス。例えば交通政策をどうするかというような時に役立つようなものです。最近では人文系でも、ポリシー・サイエンス化して生き延びようというのがありますよね。例えば、名前を聞いたことがあるかもしれないですけど、社会調査士という資格があるのでですね。あれも一種のポリシー・サイエンス化なのです。そういうテクニクを覚えて、将来企業へ行っても役立つようにすると、いうようなこと。最近の専門職大学院ではこういうところ狙ってるわけです。

だけど、結局、人文社会科学にとって忘れてならないのは、三つ目のパブリック・サイエンスです。

パブリック・サイエンスというのは、公論のための学問です。例えばクリティカル・サイエンスという場合もあります。かつてだったら、反体制的な学問は、ある意

味でのパブリック・サイエンスですよ。広い意味では、教養としての学問。要するに市民としてそういうことを知っている必要がある。つまり良質な公共圏をつくっていくってことなのだと思いますが、そういう意味では、人文社会科学の使命はパブリック・サイエンスとして社会の中の教養と関係していくことだと思います。

出版不況で人文書がなかなか売れないということはよく聞きますけども、ある意味ではですね、社会が成熟していったら、段々人文書のほうに来るのが普通な気がするんですよ。なぜかといいますと、貧しい時は人文書ではなくて実用書ですよ。トーマス・マンの『ブuddenbrook家の人びと』という作品があります。あれは法則みたいなもので、一代目は富、要するに金持ちになろうとするわけですよ。二代目は多分、政治家かなんかになっただけじゃないですか？ 権力ですよ。三番目が学者なんですよ。そして四番目が芸術家。

実際の芸術家の系譜を調べると、一挙に芸術家になる人は少ないですよ。学者の息子とか、お祖父さんがお金持ちだったっていうのが多いみたいです。だから芸術

家になるのには、四代ぐらいかかっているのではないかと思うんです。これは、一家系についても言えるけど、社会も、ブッデンブローク家の法則で言ったら、やっぱり教養というものは衣食が立てば立つほど、段々浸透してくるのではないかと思います。

だから私は、人文書がすたれるっていうことはないと思います。増えることはあっても、需要が減ることはない、と思います。

ただし、先ほど言いましたように、現在では書き手と読者の問題というのがあります。

読者の問題というのは、特に大学生なんです。大学生はまああんまり期待しないほうがいいんじゃないかと私は思っているのですが、ただ大阪のジュンク堂書店で福島さんと話していた時に、「今の大学生より、もうちょっと先になると期待できる」って彼が言ったのです。どうしてかって聴いたら、「朝の読書運動などをしている子供たちが、段々大学生になってきたら違いますよ」ということのようにです。そうかもしれないですよ。確かに、もう大学生になってから、本読めといっても無理ですよ。僕が京大で調査した時も、大学生で本読んでいる子は、

ほとんど高校で読んでます。高校で読まないけど大学で本読むっていう人は少ないですね。だからそういう意味では、そういう掘り起こしているのはいいんですけど、ないと思うので、やっぱり朝の読書運動などは非常に大切だと思います。

それから書き手のほうの責任ですけど、現代の人文書の書き方に問題があると思いますよ。専門書として書くのではなくて、パブリック・サイエンスとして書くのであれば、やっぱり書き方の工夫というものはあるんだろうと思います。皆さんの書店でも、佐藤優さんの本はよく売れているのではないかと思うんですが、私も彼と二回対談したのです。彼の本ね、やっぱり読ませるんですよ。『私のマルクス』でも書いていることは難しいんですよ。宇野弘蔵とかいっぱい出てきて。ところが何で面白いかというと、自分の体験が語られているのですよ。だから昔から読ませる人というのは、どこか難しいんだけど、なんか妙に分かりやすいところがあるんですよ。だいたい吉本隆明なんかもそうだったと思います。なんか妙に分かりやすいところもあると思うんです。

おわりに

皆さんは書店で実際に本に携わっていると思うんですけどもですね、私なんか書評も書いていますので結構書店にも行くのです。書店のセンスって、並べ方ですごく分かるんですよ。本の並べ方ってやっぱり書店の個性があるんですよ。ターミナルでほっというも売れるっていう書店は、本当に無茶苦茶な並べ方をしてる。一方、小さな、そんなスペースのないところでも、本当に上手な本の並べ方をしている店がありますね。本の好きな人というのは、書店のセンスがものすごく分かるんだと思います。だから、そういうことを努力されてる書店の人は、本の好きな人からみるとはやっぱり「あ、ここのいいな。センスええな。」と思われているに違いはないと思います。

ぜひ棚の並べ方に磨きをかけてください。読書好きの顧客には、「この店はあなどれない」と通じます。

第一部 パネルディスカッション

人文会の40年と

人文書の可能性

福嶋 聡（ジュンク堂書店大阪本店）

菊池明郎（筑摩書房）

橋元博樹（東京大学出版会）

司会 持谷寿夫（みすず書房）

持谷 人文会四〇年の歴史というのは文字どおり書店さんと出版社の交流の歴史です。書店側、出版社側双方の構成メンバーが変わっても、変わることにない交流をずっと行ってきたわけです。現在、書籍の売れ行きが不透明な時代が続いているわけですが、そういう中においても、またこの先未来に至るまで出版社と書店さんとの交流は変わらないで続いていくことは間違いないだろうと思います。また、出版社にとってはその先にある読者へのつながりというのも、これからも書店さんを経由して行われていくだろうというふうに思います。

そこでまずは、人文会会長の筑摩書房菊池社長から、人文会と書店さんとの交流の歴史を中心にお話していただきます。

人文会の歴史を振り返って

菊池 皆さんこんにちは。よろしくお願ひいたします。私が人文会に関わり始めたのが一九七九年ですから、ほぼ三〇年近く前です。そのときは、大先輩たちが人文会を切り盛りしておりまして、持谷さんの先輩で、みす

ず書房の当時の取締役営業部長の相田良雄さんが代表幹事を務めておられました。

そもそまなぜ私が人文会担当になったかといいますと、実は社内で志願したのです。「俺が担当をやる」と名乗りをあげました。相田さんが、岩波ブックサービスセンター社長の柴田信さん、工学書協会の会長だった須長文夫さんとの共著で『出版販売の実際』（エディタースクール）という本を出版されましたが、これを読みまして非常に感動したのです。三〇年前の時点で単品管理と単品分析を試みていました、これこそが出版販売のベースになるのだと思いました。新刊や常備で出荷したもののうち、何が売れているかということ把握しないで一体何ができるのかという考え方に共感しました。要するに、自分たちが配本している新刊や配置している常備が適正なのか。それを把握するためにはスリッパを回収して、各地の書店さんがどういう力を持っているのか、それを出版社ごとに把握することが必要である、という内容が書いてあったのです。私は「あ、これだな」と思いました。そこで、本を読んだだけでは物足りなくて、相田さんに弟子入りするつもりで人文会にお邪魔したのです。



(左から) 持谷氏 橋元氏 福嶋氏 菊池氏

それでそのいろいろなことを教わるところから始めましたが、人文会は非常に役に立ちました。

そういうことがありましたので、相田さんが代表幹事を退かれるときに、私まだ当時四一歳かそこで、代表幹事を引き受けることになりまして、一〇年間ほど務めました。

私たちが人文会で全国の書店さんを回り始めた時は、ちょうど人文会が発足してから一〇年ほど経った時だったのですが、当時の書店ではようやく人文書が棚を確保し始めたころです。そもそも、一九六八年に人文会を発足した頃は、人文書は文芸書の隣辺りにちんまり置かれている程度だったのです。私が行き始めた頃は、ちょうどその当時ナショナルチェーンである紀伊國屋書店さん、それから旭屋書店さん、それと丸善さんで、ようやく人文書が分類されて棚に定着している程度でした。それ以外の特約店さんの大部分が、出版社別の展示でした。しかし読者の立場に立つてみると、一人の著者の本を見つけても、他の出版社から出ている別の本は別の棚まで移動しなくてはならないのでやっぱり不便で不便でしょうがないわけですね。そこで、本を買ってもらうためには、

同一のジャンルの同一の著者のものをきちつとまとめて配置する、それから関連するものも並べる。この基本ができないで、どうして読者に人文書売り延ばすことができるんだということを、紀伊國屋書店の出版部の方から教えてもらいました。

つまりいかに分類をしてきちつと分かりやすい展示をすることが大事かということ、叩き込まれたのです。

特約店訪問というのは今でも行っているのですが、当時は三泊四日が標準のスタイルで、最初の三日間みっちり勉強します。書店さんにお邪魔して、話し合いをかなりやりました。三日間みっちり勉強して四日目は遊びでしたが、これも楽しかったですね。貧しい時代だったので、観光地に行けるとか、ゴルフをやる人はゴルフをする……まあそういう楽しい旅行だったのですけれども、その時も、我々が一番強く申し上げたのは、やはりきちんと人文書を分類して売ってみてくださいたいということです。それが最初のうちの、人文会のメインの仕事だったというふうに記憶しています。

その研修旅行は一〇年間で大体日本全国の主要な店を一巡できるのです。ただ、その研修旅行だけでは一書店

さんについて一時間ぐらいの話し合いしかできないのです。それでもつといい方法はないかなあつてことで考え出したのが、大きな書店さんのチェーンの人文書の担当の方々に集まっていたいて、東京周辺、例えば箱根辺りで一泊二日で行った研修会です。始めたのが二〇年ぐらい前ですが、まず三省堂書店さんから始めて、大学生協さんも含めて、主要なチェーン書店さんと一年に一回、一泊二日の研修を実施しました。人文書の担当者の方々に、全国のお店からお呼びするわけです。出版社側はレポーターを決めまして、棚や平台を見て、気がついたことをレポートするのです。書店さんの側からは、「配本を増やして欲しい」、あるいは「返品を取ってくれ」とか、そういう話をするわけです。場合によっては今日の、竹内先生のような大学の先生をお連れして講演していただく。夜は夜で懇親会をやるのですが、そこで、アルコールの力も借りて皆さんと大変親しくなりました。こういうことを十数年続けました。

そして、更には二〇周年のときに、『人文書のすずめ』の原型である『人文科学の現在』を刊行しました。いろいろ分類のことを議論しても、一回の話し合いでは

それで終わっちゃうわけですね。なんとか、より理解していただくことができないかということで、ジャンル別に基本図書をリストアップして、それから各分野の入門的なお話を、大学の先生たちに書いていただく。この本は書店さんでの評判が良かっただけでなく、図書館関係者や一般読者まで評価してくれました。今回は非売品ですが、最初から四冊目までは定価を付けて売ったのです。最初のものは版を二回か三回重ねるくらい評判になりました。書店さんからも喜ばれたので、毎年はできないけれども、五年に一回くらいそういうことやろうということになりました。

それから更に、もうちょつと書店訪問回数を増やそうということで、人文会メンバーが三人か四人ぐらいのグループで、特約店さんを中心に訪問しました。五、六月ごろに書店さん訪問を会員各社で、頑張つてやりました。「人文会ニュース」も、作るのは結構大変なのですけれども、年に三回ぐらい出そうじゃないかってことで、これも今に至るも続いています、一〇〇号を超えませんでした。

人文書は書店さんにとってもおそらく一番厄介な分野

だろうと思うのですが、本当にきちつと売するためには、そういう大変な作業が出版社側にとっても求められたのだと思います。そのための工夫が、今申し上げましたようなみっちりとする研修であり、『人文書のすすめ』を五年おきに出すということだと思います。そういうようなことの積み重ねの結果、どうにか人文書の販売は今日のレベルにまで、やつと辿り着いたのではないかなあと、いうふうに思っています。

この間も神戸に行ったときにジュンク堂書店さんにお邪魔したのですが、私自身、現場のことはあんまり分からなくなっているのですが、それでも主立った書店さんにお邪魔して人文書の棚に行くと、それぞれ個性はあるのですけれども、見て安心できる状態になりました。

昔は「なんだこれは？」と思うことが多かったですが、地方へ行くとほととさせてくれる店なんてほとんどなくてですね、がくつとくるのですね。それが、こういうやり取りを繰り返してきた結果、大丈夫だなんていう、そういう店が圧倒的に多くなりました。それぞれまた皆さん個性を出されています。今日お集まりの現場の担当者の方々が、やっぱり大変な努力を重ねてくださった結果、

いい棚ができたと思います。私も出版社側の言うことにも耳を傾けてくださった結果、厳しいながらもなんとかなる状態になってるんだなあと思っています。

実は「人文会ニュース」の一〇四号で、平安堂長野店の小峰さんが書かれていますのですけれども、人文ジャンルの新書のフェアを開催したらすごく成功したそうです。小峰さんがおっしゃっているのは、文庫や新書は出版社別の展示なのですが、そういう形で人文の入門書として、新書の展示をやったところ、読者も、この著者がこういう本を出しているということが一発で分かると評価してくれたとのこと。新書棚は出版社別ですからなかなか分かったのが、フェアを見て分かるようになったと言われたそうです。これなかなかいいお話だなあとあります。新書や文庫ですと、私どもの学芸文庫や講談社さんの学術文庫には、人文ジャンルの名著で、単行本は絶版になってるけれども、文庫でなら読めるというのがあるんですね。多くの書店さんで、人文書の入門書的にそういうものを平積みしたり棚に差ししたりしてくださっているようになりましたが、こういうふうに、人文書の読者の裾野を広げていくような工夫を続けていただ

けたらありがたいなと思います。

持谷 ありがとうございました。次は書店さんの側から、ジュンク堂書店さんの福嶋さんにお話していただきます。私が始めてお会いしたとき、福嶋さんは神戸のサンパル店というお店で働いておられて、そのサンパル店に行ったときの驚きというのは私の出版の営業活動の原点になったというぐらいの衝撃を受けたわけです。そこからいろいろなものが生まれていったのだろうというふうに思っています。福嶋さんには先ほど竹内先生がおっしゃられていたような、大学の今置かれている困難な状況と、それとそれが人文書の世界にどのような影響を与え、更にその中で明るい先行きを見るためには、という多岐に渡るお話しをしていただきたいと思います。では、福嶋さんお願いします。

人文書の現在と書店員の役割

福嶋 福嶋でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

今日いらつしやるのは、現場でバリバリやってらつし

やる方ばかりなんで、もちろん私は人文書の担当をしていましたけども、もう外れて12年ぐらい経ちます。だから今日は、皆さんを代表してということは思っておりません。もつともつとよくご存じの方がいらつしやると思いますし、若い人方にどんどん、迫られてる感じがしますので、どうぞよろしくお願いいたします。

まあ私が選ばれたのは、『希望の書店論』なんて本を書いていきますから、嘘でも景気のいい話をするんじゃないかと、というような期待もあつたんじゃないかと思ひますので、そういうことも含めて少しお話ししたいと思います。

先ほど竹内先生が、新人類が現れた時から少し変わってきたという話をされました。新人類とはちょうど時期が一致するんですけれども、大学の共通一次試験を経験したかどうか、そこでもかなり違うんじゃないかなあと思ひます。つまりマークシートで○×かを、あるいは数字を、選ぶ。要するに全ての問いに対して答えが一律に決まる。そういう勉強の仕方が主流になった。我々の頃は、例えば、高校の物理の試験で、波がいかに美しいかということを書いて先生に褒められたりしたこともあ

ります。そんなことは最近では絶対ありえないと思ひますので、そういう意味では、新人類の時代にあわせて、共通一次試験というのも大きく影響したんじゃないかなと思つたりしています。で、このあと橋元さんが、具体的なことをお話されると思ひますので、私としてはやはり語り部としてですね、書店にいた二七年間……書店の現場での変遷をお話したいと思ひます。

私は以前、『論座』で人文書というのはオルタナティブではないかというようなことを書きました。オルタナティブというのは、世界的なレベルでいいましたら、もう一つの世界、別の世界は可能だ、というような思ひですね。それを提示するのが人文書の大きな役割ではないのかという気がしています。これは言い換えましたら現実への違和感ですね。『論座』は残念ながら休刊となりましたけれども、私の論文以上にずっと衝撃的であつた、『丸山眞男』をひっぱたきたいが掲載されたのも『論座』でした。赤木さんという人が書かれた。つまり今の現実に対しての強い違和感を表明しているのですね。これはひょっとしたら人文書が担う役割であつて、そのことについては今そうだったわけではなくて、昔も今も全

然変わってないんじゃないかと、いうふうな気がしてお
ります。

特に、今もちろん経済的な問題も非常に不透明感があ
りますし、そういう時代ですから余計になんですけれど
も、そういう中で、なんとか明日を模索していく。その
ためにも人文書というのは、もっともつと元氣になん
きやいけないんじゃないかなあというふうに思ってい
ます。

竹内先生もおっしゃっていました新書の問題ですけど
も、今たくさん出ている新書を等しくみな教養新書と呼
ぶ言い方には、私も非常に違和感があります。同じ出版
社の中でも教養新書という名前にふさわしいものもあれ
ば、いやハウツー新書の代わりじゃないかと思うのもあ
ります。かつての新書っていうのは、カッパブックスだ
とかプレイブックスをはじめですね、非常に力がありま
した。例えば、ベストセラーズの江本の本や、『頭の体
操』シリーズの新作が出たら必ずベストセラーに入ると
いう時代がございました。今は見る影もありません。そ
れをハウツー新書と呼んだんですけれども、おそらくそ
れが後退していった。まあ一部それが文庫に流れた部分

もあるでしょうし、あるいはインターネットの情報で十
分だというふうな状況もあるのかもしれませんが。その代
わりに棚を埋めたのが、教養新書と呼ばれる一群ではな
いかと、思っております。そういうものでも、その中で
もある程度人文的なものもたくさんあって、菊池社長が
おっしゃったようにそれでフェアもできると思うんです
が、まあ値段的にいつてもそういうレベルのものしか大
学生は読まないということ。これは竹内先生がおっしゃ
ったとおりかなと思います。

司会の持谷さんに大学の問題をといて振られた
ので、ちょっと触れておこうと思います。業績主義とい
うのは、竹内先生がおっしゃるるように大学の構成員であ
る人たちもそうなんですけれども、大学そのものもまた
業績主義になってきています。ある大学からインターン
シップ制を引き受けてですね、そのあとでアンケートが
来しました。その中に、「今回のシンターンシップは産学
協同に役に立ったと思いますか」と、そういう設問があ
ったんですね。僕は空欄で出したか、いいえと書いたか
覚えてないんですけれども、そういう意識は全くなかつ
たんです。でも今の大学っていうのはそういう設問をせ

ざるを得ないというような状況になっているようでございます。

竹内先生が先ほどおっしゃいました『専門のための科学』、『政策のための科学』、『公論のための科学』。このうち『公論のための科学』、パブリック・サイエンスこそが書店、あるいは出版社のこれから生きる道じゃないか、レーゾン・デートルではないかというような意味合いで受け取りました。

『学問の下流化』でもパブリック・サイエンスの一つの例に出されていたのが『構造と力』（勁草書房）なんです。これは僕がサンパル店に入った頃に出たベストセラーでございまして、今でも単行本で残っている本です。これは一つの画期を成した本で、その後、特にフランスの現代思想の紹介が非常に活発になってきました。私自身、それを追いかけてながら勉強して、わからないながら書店業をやって来たというのが、本当のところなんですけれども。

今日は、これだけの多くの書店の方々が一堂に会するというのはおそらく画期的なことだと思んですが、本当にそれは僕としても快哉をあげたいことでございます。

というのは、書店というのは、いろんな色があつてはじめて読者に喜ばれるのだろうと思います。例えば『構造と力』の頃は、リプロ池袋店で今泉正光さんという方が現代思想を非常に上手に展開されていて、その頃、亡くなったリプロの小川社長が自著の中で「今泉棚」、あるいは「書齋型の本屋」というような言い方をされておりました。我々ジュンク堂は、ご承知のとおり、非常に背の高い本棚に差して並べるという「図書館型の本屋」です。どちらがいいかということじゃなくて、どっちもあることで、それぞれのいろんな需要を満たせるし、あるいは池袋にいらしたお客さんが両方訪れるところがいらないと思いました。ですからもちろんライバルとして、お互い切磋琢磨していくんですけれども、一方ではお互いの工夫を見ながら、時々「ああ、これは負けたな」というようなこともあつていいんじゃないかなというふうに思っていますので、今回、ライバル店同士の書店も一堂に集めたこのような人文会のご招待は非常に嬉しいもんだというふうに思いました。

『構造と力』が、私が仕事を始めた頃だとしたら、今の若い方々にとってそれに当たるのは、例えばネグリ・

ハートの『帝国』ではなかったかと思えます。やはり画期を成す本というのはあるものですので、その辺を追いながら棚を作っていく。言い換えますと、画期というのはその前の時代とは違うということですから、どんな棚も進化していく、変化していく。

ですから人文書の在り方も、オルタナティブを求めるということなのですが、我々書店の間もそういう画期をきちんと捉えてですね、またオルタナティブの棚、もっと別の棚があるんじゃないかというようなことを、日々切磋琢磨していく。それがこれからの生きる道じゃないかなあとというふうに思います。

それからもう一つ。私がよく話をするのが、図書館のことです。図書館と書店というのは、本と読者の出会いの場であるという意味では同じだと思うんですが、随分と性格に違いがあつて、僕は図書館と比較した場合、書店というのは実験場であり、ラボラトリーであると考えています。実験場というのはやっぱりこれと思った新しい著者や新しい本を、実際自分の判断で積んでみて、うまくいく場合もあるでしょうし、うまくいかない場合もある。だから実験なんです。図書館はそれができないん

です。図書館の選書というのは我々にとってみたら買い切り商品の仕入れと一緒に、そんなに冒険はできない。どうしてもそれまでに定評の高いものから入れていくということがあります。我々はずっと実験ができるんじゃないかと思えます。新しい著者が現れたときに、この人はひょっとしたら化けるかもしれないってことができるんじゃないか。そういうような特性が書店にはある。あるいは書店というのは、少しづつ読者からお金をいただいて、それが最終的には出版社に還流し、印税となつて書き手を支える。そういうようなプライドを持つてもいいんじゃないかなとそういうことを思います。

もう一つお話すると、それが書店のレーゾン・デールの大きな部分だと思うんですが、書店員の役割は何かということを考えてみたいと思います。これは昔ある先輩に「福嶋。お前はなあ、別に何もかも、あるいは何も知らんでもええんや。ただ、誰がそのことを知ってるかということだけを知っておけ」ということをよく言われました。私は人文会の方々にも大変お世話になりました。皆さん、今回の機会を利用していろんな引き出しを皆さんがお持ちになったらいいかなと思います。

それとあともう一つ、本のレーゾン・デートルなんです。これは、インターネットによって脅かされる、あるいは電子媒体によってかなり脅かされると言われた割には衰弱してない。これは今年、『週刊金曜日』で佐野眞一さんが、自分が『誰が「本」を殺すのか』で予言した中で一番当たらなかったことだとおっしゃってました。なぜ、衰弱していかないのか？ 一つは、紙の意外な有用性ですね。例えば、本を読むときには、書き込みをしろとか、線を引けとか言う方が多いんですけども、紙の場合、これが可能なんですね。そしてもう一つは、カノン、典拠です。要するにその字を簡単に書き換えたり、あるいは消したりできないがゆえに、一つの抛り所になる。そういう意味では紙の本は画面で見るインターネット上の情報とは随分違うものがあると思います。これは思考実験なんですけれども、来年裁判員制度が始まります。その時おそらくまあ、六法全書と小六法でも持つて行くでしょう。それがひよつとしてノートパソコンを持って、その画面を見ながら、法廷で話し合いが行われたらちよつとぞつとするものがあります。デジタルは簡単に書き換えも可能だし、そういう意味では紙の本の有

用性っていうのは、まだまだこれからもつと出てくるんじゃないかなというようにも思っております。結論的にいうとそのためには、カノン、典拠となるようなしつかりした本づくりを出版社の方にはお願いしたいし、その本の持っているブランドそのものが疑われるようになったら、それこそ出版界あるいは書店業界の危機ではないかというふうに思っております。

持谷 福嶋さん、どうもありがとうございます。次に、東京大学出版会の営業局販売部の橋元さんにお話していただきます。橋元さんには九〇年代以降の人文書の動向を、特に哲学思想を中心にまとめてみてくださいですので、そちらをお話していただきたいと思います。ではお願いします。

90年以降の人文書棚とその役割

橋元 東京大学出版会の橋元でございます。よろしくお願ひいたします。

私が出版業界に入りましたのは九一年です。九一年というのは、ポストモダンブームが終わってしまつて、思想

的な流行という意味ではもう何もない時代です。無風地帯のような状況です。それでもその後九五年あたりから徐々にカルチュラル・スタディーズという新しい潮流がでてきました。

私の今日の報告は、その九〇年代のカルチュラル・スタディーズの展開の中で、書店店頭でどのような棚作りやフェアが行われていたのかということを、記憶を紐解きながらまとめてみました。

今回この報告をするに当たって、人文書って何だろうっていうことを、改めて考えてみまして、よく書店さんや出版社の人と議論をしたりするのですが、いつも答えが出ない。定義がそもそもないわけですから答えは出ないんですけどね。ただ、僕は人文書には三つの要素があるのではないかなというふうに思いました。一つは、福島さんがおっしゃったオルタナティブということですね。そして二つ目が広がりという要素です。三つ目が、先ほど竹内先生がおっしゃったのですけども、公共圏、良質な公共圏づくり。この三つの役割があったかと思います。一つ目のオルタナティブに関しては福島さんがおっしゃってくださいましたので、まずは二つ目の「広がり」

という問題で、そのカルチュラル・スタディーズの日本での展開を考えてみたいと思います。

先ほど申しましたように、カルチュラル・スタディーズという言葉が、日本の出版業界に入って来たのが九六年、まずは岩波書店の『思想』の特集です。それから同じく九六年三月の青土社の『現代思想』の特集です。この頃、カルチュラル・スタディーズのフェアをやるうとしていくつかの出版社や書店さんが仕掛けを試みたのですが、実はほとんどうまくいかなかったのです。原因はまず「カルチュラル・スタディーズ」という言葉が、十分に店頭で浸透していなかった。つまり当時は雑誌の特集でしたので、書籍のご担当の方があんまりご存じなかったんですね。大型店で『思想』や『現代思想』を書籍の棚に置いていらっしゃる書店さんは、なんかこの号だけ次から次に売れていくので、雑誌なのに補充注文をしながら、「なんだろうこれは？」というような思いでいらっしゃったというふうに伺っております。

輸入思想は、まずは雑誌が特集で取り上ますが、書籍としてそれらを翻訳・紹介する、あるいは日本人の著者がそのテーマで書くという時には、当然時間がかかるわ

けですね。ですので、九六年ぐらいから九九年ぐらいまでの間はカルチュラル・スタディーズといってもなかなか書店店頭で認知されていない状態だったと思います。

それが劇的に変わっていくのが九九年、はじめてタイトルで『カルチュラル・スタディーズ』と付いた書籍が二点ほぼ同時期に刊行した頃です。一つがグレアム・ターナーの『カルチュラル・スタディーズ入門』（作品社）。もう一つが、花田達朗、吉見俊哉編、スチュアート・ホールなども書いておりましたけども『カルチュラル・スタディーズとの対話』（新曜社）です。このあたりからようやく核になる本が一つ二つ出てきました。また、それなりにその2点が売れたのです。そうすると書店さんでもカルチュラル・スタディーズフェアをやるうという機運になってきまして、いくつか関連書を集めていったりました。そのすぐ後に、二〇〇〇年代に入っていくともう次から次に、「カルチュラル・スタディーズ」と付けば何でも売れるような風潮になってきましたので、「カルチュラル・スタディーズと司馬遼太郎」など、そういうタイトルの雑誌も確かあったかなと思いました。これは私の単なる営業活動での記憶なので、他にもい

ろんな書店さんでおやりになっていたと思うのですが、私の知る限りで申し上げます。例えば、紀伊國屋書店新宿本店の三階にまだ人文書コーナーがある時期に、「批評の棚」というのをお作りになってたんです。明日来ていただく月曜社の小林さんが精力的に担当の方に情報提供をしていらっしました。必ずしも、カルチュラル・スタディーズの本だけではなくて、芸術や映画理論など批評性のあるものを一か所に集めて、魅力的な棚作りをすることで非常に売り上げを伸ばしていたようです。

同じ時期に、ジュンク堂書店池袋本店でもカルチュラル・スタディーズの棚というのを作りはじめました。私は、カルチュラル・スタディーズを日本の社会に定着させた功績の大きな部分はジュンク堂の池袋本店にあるのではないかと思ってるんですけど、芸術、映画、経済、政治、いろんなものをカルチュラル・スタディーズという枠の中に吸収した棚を作って、ついにはもう和書は置く本がないということで、洋書を集めはじめたのです。非常に研究者の中でも話題になっていった棚だったと思います。

もう一つは、芳林堂書店高田馬場店です。「酒井直樹

の選ぶカルチュラル・スタディーズ棚」というユニークな棚を作られておりました。当時、酒井直樹はまだ新進気鋭の思想家だったのです。書店さんと出版社と著者が協力して行う棚作りの原型みたいなものです。

実は、カルチュラル・スタディーズの本というのは既に七〇年代、六〇年代に日本でも翻訳はされておりました、ホガードの『読み書き能力の効用』（晶文社）や、最近また復刊されましたレイモンド・ウィリアムズの『文化と社会』（ミネルヴァ書房）など、いくつあったんです。それらが、それまでは社会学の情報のコーナーや哲学の言語学のコーナーなどに分散していたのですが、この、カルチュラル・スタディーズという棚を作ることによって、一か所に集めることができて、更にそこからいろんなものに派生していったのです。カルチュラル・スタディーズが、今、日本のアカデニズムの分類ではどういうふうに扱われているのか、私は知らないのですけれども、そういう学問的な、「イギリスのネオ・マルクス主義」だとか、「新左翼の文化研究」という枠組みを超えて、あらゆるものを吸い込みながら棚ができていったというのは非常に面白いと思います。こういう流

れというのは、福島さんが先ほどお話になりました、ポストモダンの時代に、リプロ池袋本店で、文化人類学や文学や科学や生物や化学などを一か所に集めてポストモダンという切り口で棚を作っていた流れとほとんどシンクロしてるのです。つまり書店店頭でのこういう広がりをもった棚の試みとして、八〇年代はポストモダンがあり、九〇年代はカルチュラル・スタディーズがあったのではないかなと思います。

人文書の一つの特性が「広がり」であるとしたら、この九〇年代のカルチュラル・スタディーズの展開というのは非常に典型的なものであったと思います。

そして、現在、人文書が売れないということの問題の一つは、広がりのあるこのようなジャンルが、存在しなくなってしまうことなのです。一つの原因は竹内先生が先ほどおっしゃったように、学問の専門化ということがいえると思うんです。確かに先生がおっしゃるように各分野で相当専門的な書籍の刊行が増えているような気がします。学者が自分の専門ジャンルのほうにばかり閉じこもってしまった。異なるジャンルの学者の間で通じるような共通の言語、それが「教養」ということな

のだと思いますが、そういうものが生産されていない、という状況が今の時代だと思っています。

そういう時代だからこそ私たちは書店や出版社が人文書を刊行する中で、社会的に何を担ってきたのかということを考えていかなければならないと思います。メディア研究の吉見俊哉さんが二〇〇〇年に非常に面白い文章をお書きになっておりました。「本のかわりに、何が文化的公共圏を支えるのか？」というタイトルです。吉見さんによれば、日本では書店や読者の存在、そして出版市場自体が公共的な空間を作ってきたのではないかというのです。この公共圏というのは、知識人と一般の人の間の中間的な層を形成することです。あるいは国家でもなくて市場でもない領域で、政治や経済や社会や文芸について議論する場という意味です。アメリカなどは、極端に言えば本を買うのは知識人だけだと言います。それに比べて日本の場合は、全国津々浦々に書店があつて、本が流通されることによって割と普通の人でもアカデミックなものに簡単にアクセスできる環境が整っていたのです。そういうなかで人文書が成立し、政治や文学や芸術を議論する空間ができたのです。

ただ、吉見さんがおっしゃっているのは、今はもうそういう空間がなくなっているというのです。それでは何が担って行くのかということなのですが、少し前から、インターネットの公共圏の可能性ということが盛んに言われます。

これは結論から言うと、私は多分インターネットの世界では、良質な、先ほど竹内先生がおっしゃったような良質な公共圏というのは作ることができていないだろうと思っております。無料の情報がネット空間にどれだけ豊富に存在してもそのコンテンツを見る限りでは残念ながら、現状では文化の質を上げることにはなっていないと思うわけです。やはり、出版社、書店、取次が本を流通させ、最終的に読者がお金を払って本を買う、その仕組みがあることで、出版社は読者に信頼される価値ある書籍を作ろうとしてきたのではないのでしょうか。そして書店は良いものを仕入れ、売ろうとしてきた。そういうふうにして、この市場での情報が今度は編集者に還元されて、次の企画が生産・流通されていくというサイクルが作られるのです。このようなコンテンツ流通の仕組みをインターネットで作ることができていないわけです。

ということとは、この状況の中では、書物の流通・販売に

かわる私たちが人文書を販売するということは、まだまだ大きな社会的な意味があることだと思います。

やや大げさな話になってしまいましたけども、そういうつもりで四〇年を越えて次の一〇年に向けていきたいと思いました。ご静聴ありがとうございます。

持谷 ありがとうございます。今日この場にいらっしゃるのは現場のご担当の方ばかりですので、実務的なことも踏まえたことをテーマとして少し三人でお話していただきたいと思います。先ほど菊池会長から、単品管理化されることによって仕事が進むようになったというお話がありました。福嶋さんのいらっしゃるジュンク堂さんは結構早い時期からPOSを導入されているわけですが、でも、そういうデータ化されたところでの仕事の在り方について議論していただきたいと思います。

菊池さん、POSデータを見て仕事をするということについて出版社の立場から、書店さんの仕事に対してそれをどういうふうに生かして行かれるということを、少しお話しただけならなというふうに思います。

販売データの生かし方について

菊池 書店さんからPOSデータを瞬時に送っていただいて、それを解析できるという今の状態は非常にありがたいことです。出版社としては、データによる前年の実績を踏まえることによって、新刊配本、重版、常備の配置などの精度が、ここ一〇年で相当上がってきたと思います。

そして、書店さんに対しては、同じ地域のライバル店に限らずかなり離れた地域の店でも、同じ商品が他の店でどういう売れ行きを示しているかを比べたい、という書店さんからの要望があったら（マル秘はマル秘なのですけれども）、じゃあそのデータを作ってあげましょうってことで持つていくのですね。すると結構商品構成上の穴が見えてくる。その穴がなぜあるのだろと確かめていくと、あちらの店ではずっと平積みで追いかけているのですが、こちらでは棚差しになってしまっていることが原因だったりするのです。今度はそのデータを見た上で、店の点検をやっていくと、いろいろなことが分かつ

てきます。だから、データの活用というのは、実際にリアルな部分とデータをつき合わせてやり取りをしていくことによって見えて来る部分が随分あって、そのことを丹念にやる書店さんは、伸びますね。

先日、別の会でなのですけども、丸善の小城社長をお呼びして講演をやっていたきました。そのときの話ですが、今年は上半期が出版業界全体で三・九%前年割れして売り上げが落ちているが、一つだけ小城社長が我慢できることがあるとおっしゃいました。「一番厳しい八月期でもオール丸善で前年度比一〇〇を超えている。まだ工夫の余地があるということだ。これはあらゆるジャンルでそうだ」というふうにおっしゃっていました。この話をお聞きした時に、非常にありがたい話だなあと思いました。つまり、データをどう分析して活用していくかということ、人文のジャンルもそうですけれどもいろいろとうまく使えるし、結果につながる、つけていくことができるのじゃないかっていうふうに思っています。

持谷 はい。当然、データを見てやるということは、要するに売れるものを見逃さないとか、若しくは動かない

ものを見るという、そういう検索性が非常に優れていることもあるし、ネットワークによっていろいろなものの存在が瞬時に分かるということでもあるわけです。

福岡さん、情報がデータ化されて、それを担当の書店さん方が使うときにどのような形で臨めばいいのかということも含めて、お話ししていただけますでしょうか。

福岡 はい。データに関してはですね、POSレジなんて影も形もなかった頃からいろいろと意見を述べておりました。もちろんスリップに触れて体で覚えるというのが僕らの最初の頃のことでした。今はもうデータを見ながらいろんな仕事をするという状況です。例えば、私どもの店でも、関西圏の担当者が集まって新刊の配本どうしようかという時に、前のこの著者の方はどこの店でいくつ売れた、いくつ売れたって、これは非常にすぐに分かるようになって、それがある程度、棚に反映されるということがあります。ただそのデータ重視っていうのはまあ実は半分で、最初の本に書いたんですけれども、重いデータ（＝思い出た）になってはいけないということを書いたんですが。まあ、見て売れた。良かったな。で終わっちゃいけないと。活用の問題ですね。

それとも一つは、これから出る本に関してはもちろん参考になる部分はあるんだけど、本当に新しいものについては、まずデータがないところから自分の勘というか、目利きでやってかなきゃいけないのです。先日行われた図書館大会でも、創元社の加藤部長がおっしゃったんですけれども、最近は営業の方が、データ作りばかりに時間を取られてしまっている。実際に本をパラパラとでも見て、これはこういう本ですから是非、というような営業がだんだん減ってきた。こういうデータなんでは是非お願いします、という数字だけで書店にやってくるようになった。ということなのです。我々もその数字だけ追いかけていって、それに沿って作つたらいってわけじゃなくて、やっぱり、もちろん就業中に読めるような悠長な職場ではありませんけども、なんとか時間をひねり出して本を読む。一冊本を読んだら見えてくることはたくさんあります。例えば、僕がよく覚えてるのは、『文学部唯野教授』なんですけれども、その解説部分を読んだだけで文芸評論の棚が非常に作りやすかったのです。ですからやっぱり、データを重視するのは半分、あるいは三分の一なのではないでしょうか。亡くなられた

筑摩書房の田中達治さんは非常にデータについて熱心に行ってこられた方です。ただ、田中さんの場合も、最初は倉庫の作業からだった。つまり現場で、現場の実態を知ってるからそのデータを使える、ということがあるのです。同様に本そのものについて触れてるからそのデータを使えるという部分もあると思います。ですからデータに関しては、私は非常に大事だと思うんですけれども、逆にそれに振り回されないようにしなきゃいけない部分もあるんじゃないかなというふうなことを日々実感しております。

持谷 はい。ありがとうございます。橋元さん、東大出版会の現場の営業担当という立場で、データをご利用されているわけですけども、そういう立場から、どのように見られておるかお話ください。

橋元 ここ四、五年、出版社のもとに、書店さんの販売データが集まって来るよう態勢が徐々に整っております。私どもでも、相当数の書店さんからのPOSデータをおいただいています。現在では東大出版会の売り上げの六〇%か七〇%ぐらいは、月次のデータで補足できてるよう

な状態です。ただ、POSデータというのは、もともと書目と書店名と販売月日が書かれている一行の生データなのです。それが、出版社のコンピュータに年間数十万行蓄積されていくわけです。だから今度は、それをどういうふうに読みこなしていくのかということのほうが問題になっています。まだまだ出版社は使いこなせていない部分が相当あると思うてゐんです。それはとてももったいないことだというふうに思います。

もう一つはネット書店の話なのですけれども、ネット書店の仕入れはある種の過去のデータにしたがつて、的確な数を発注しているという印象があります。ただ、新刊に関してはやっぱり時々仕入れを失敗していると思うんです。リアル書店と比較したネット書店の売り上げデータを见ているとずいぶん売り逃している新刊がたくさんあるんですね。だから、福嶋さんもおっしゃったようにデータに頼つてばかりではやっぱり仕入れはできないのです。ということは、書店の仕入れというのは決して完全にデジタル化されることのない書店員の重要な能力だと思っています。

書店人と出版人がどのように交流するか？

持谷 はい。当然と言つてしまえば当然なんです、データだけではないものをどうやって見て行くのか、ということが一番求められているのは間違いないだろうと思います。

ところで、福嶋さんにお聞きします。先ほどおっしゃった、知つてゐる人を知つてゐるかどうか、ということも大切だと思います。まあそういうようなことも含めて、福嶋さん流の出版社との付き合い方みたいなものを少し教えていただければ、ここにいらつしやる書店さんの参考になると思いますので、いかがでしょうか。

福嶋 ええと、そんな流派はないんですけれども。僕は多分周りの人がハラハラするほど出版社さんに対してはかなり本音で口をきいているんじゃないかなと思います。ある種のやっぱり切磋琢磨、なにくそというような気持ちです。京都の某書店のH氏という方が、版元さんの若い営業マンが来たら一回は泣かして帰すと言つてゐる。『キミ、そんなことも知らんのか』とかいう感じ

でやっていたらしい。今はそんなことないでしょうけども。別にいいめることが仕事じゃないんでしょうけども。僕の場合は、僕流と言うか、本音で付き合ってきたつもりだし、そのことによって逆に付き合いが深まったケースのほうが多いと思います。これは版元さんともそうだし、あるいは書店仲間ともそうなんです。あんまり儀礼的なことだけ、あるいは良い話ばかりするだけで終わると、まあろくなことがないなあというのは経験しています。

持谷 それはもう間違いないと思います。これから懇親会もありますので、そういう話ができればなというふうにも思っています。

では、菊池さんその辺の話も含めて、書店人と出版社がどのような関係をつくるべきなのか。菊池さんが思われていることがあたらちよつと教えていただきたいんですが。

菊池 今日お見えになつてるベテランの方のお一人に、名古屋市にあるちくさ正文館の古田さんがいらつしゃいます。私も何度か経験がありますが、名古屋地区にお邪魔すると、ちくさ正文館さんだけじゃなくて、三省堂書

店さん、丸善さん等々、その現場の人文書に詳しい人たちが飲み屋に集まってくれるのです。そこに出版社も数社が加わつて、お酒を飲みながら、本に関わる話を延々とするという飲み会を、博識の古田さん中心に開くのですね。私は、自社の担当者の上司として、たまに飛び入りでお邪魔していたのですが、その担当者は、そういう機会に恵まれてすぐく得したと思うのですね。やつぱり起点は本です。データというのはあくまでも仕事の精度を上げるため、効率良くするためにどう使うかつて話にすぎない。例えば新刊についてどの程度売れるかもそうだけでも、自分で本読むだけですと限界がきてしまうので、様々なこと知つてゐる人たちとそういう交流をしておくべきだと思います。まあ他の土地でも福岡さんのような方がいらつしゃるところではできるわけです。優秀な出版社の人間が出張に来たりした時には、地方の書店さんは「ちよつと忙しいけど、無理してこいつと話してみよう」と決断し、お茶を飲むだけでもいいと思います。單純に仕事の話の店頭でやり取りしているだけだと、損するんじゃないかなと思います。少々無理してでもいいから、夜とつつかまえちゃうとかですね、お昼一緒に行

くとか、なかなかそういうこと許してはいただけないお店もあるとは聞いていますけれども、滅多にない機会ですから、上司を騙してでもいいからそういう時間作って有益な情報交換、本にまつわるいろいろな話をするってことも大事なところというふうに思います。やっぱり今のよな時代だからこそ、できるだけそういうことを意識的にやったほうが、私はいいのかなって思ってます。

持谷 おそらく出版社と書店さんとの関わりというのは、そういうところが一番大きいのもかもしれないというよな気はします。時間もだいぶ来ておりますが、皆さんのほうから一言、補足で言っていたことがあれば。福岡 実は大阪のトークショーで、はてなを作られた伊藤さんという方に来ていただいて話していただいた時に、非常に印象的な言葉がありました。ネットで見てる時は気散じすると。本を読むというのは、一つのことについて集中して物考えるために読むんだ、というようなことをおっしゃってました。そのこともちょっと触れたかったなと思って補足しておきます。

橋元 先日、「人文会ニュース」のバックナンバーを読

んでいたのです。今手許に八一年のニュースがあるので、ここで書店さんや出版社や取次の方をお呼びしての座談会をやっているのです。そこで司会の方が、「今、人文書是最悪の環境である」ということをおっしゃっているんです。八一年の段階で「最悪の環境」とかと、私は読んでいてびっくりしたのですが、よくよく人文会ニュースのバックナンバーを読み返してみると、大体いつも、「今、人文書が売れない」ってことを言っているのですよね。「なぜだろう」と考えてたのですけど。この座談会では、取次さんと書店さんと出版社出が「なぜ売れないのか」「どうしたら売れるのか」ということについて激論を交わしているのです。本当に緊張感のある議論をやっております。単に「売れない」と嘆いているのではなく「思うように売れていない」ということに対して常に危機意識を持ちながら、時には激しい議論を交わしてきたのが、書店さんと人文会の交流の一面でもあったらろうと思います。そういう危機意識や緊張感の共有が仕事の工夫や新しい試みにもつながるのではないかと思います。

菊池 私も人文会ニュースの新しいほうをひっくり返し

て読んでたんですけれども、二年前の九八号で、ジュンク堂書店池袋本店の宇田さんが、四六判宣言のフェアをやってる時に、青土社さんから出てる『ビルゲイツの面接試験』を置いたらよく売れたと報告していたのです。普段他の売り場に、人文書の売り場じゃないところにおいていたのだけでも、これは意外な収穫だったとおっしゃってます。本の可能性というのはそういうところにもあるのですね。私のところだと、『思考の整理学』という昔出た文庫本を去年、盛岡のさわや書店さんの文庫担当の男性社員が気に入って、こういうPOPを書いたら売れるだろうと思って作ったら、あつという間に何百冊も売れたのです。それをきっかけに全国の書店さんに提案して、最終的に一年間で三〇万部、累計で五〇万部超えるような結果を叩き出しました。ですから不況だなんだと言っても、「あ、これは！」と思った可能性にやはりチャレンジすべきだろうと思います。人文書のジャンルでも、内容に共感したらそういうことができる。一軒の書店さんからそういうことを発信できるのです。書店の店頭ってやっぱりそういう意味では限りない可能性がまだまだ残っているというふうに思います。

持谷 はい。どうもありがとうございます。まあ第一部に関して、私のほうでまとめようと気はないんですが、私も長い間営業の仕事やっています、社内でも言っていることがあります。データは見ます。それこそさつき菊池さんがおっしゃっていただいたように、私のところの先代の営業部長は単品管理の元祖でしたから、そこが今何やってんだって言われりゃ、面目ないんですけど。私が、常に言っていることはただ一つ。

「本は気合いで」——。この気合いを皆さんと一緒に共有できたらなと思います。今日はどうもありがとうございます。

第二部 ケーススタディ

人文書販売の現在と未来

吉田敏恵（紀伊國屋書店新宿本店）

池田忠夫（大垣書店烏丸三条店）

市岡陽子（喜久屋書店倉敷店）

鈴木孝信（あゆみBOOKS専務取締役）

司会 鎌内宣行（春秋社）

録内 第二部 ケーススタディ「人文書販売の現在と未来」と題して現場で活躍されている四名の方に最近のお仕事や具体的な取り組みなどを報告してもらいたいと思います。

トップバッターは紀伊國屋書店新宿本店第五課、現在係長でいらっしゃいます吉田敏恵さんです。吉田さんは一九七八年生まれ、二〇〇一年紀伊國屋書店入社。教育書二年、歴史書二年半、係長昇進後、心理、哲学のフォローなどを歴任。現在第五課係長。書店歴八年目の方です。

吉田 皆様こんにちは。只今ご紹介をたまりました紀伊國屋書店新宿本店五階に勤務しております吉田と申します。よろしくお願いいたします。

私は入社八年目です。ずっと新宿本店五階の人文書売場で勤務しております。今回は、人文書売場で展開をしている「じんぶんや」というフェアと、店独自のオリジナルフェアを中心にご報告させていただきます。現在は三階の課長代理の和泉と、クアラルンプール店の係長をしております宮城というものがおりまして、当時、一緒

に四年前（二〇〇四年九月）になりますが、コンセプトとして「数々の埋もれた良書をその筋の専門家の推薦付きでお客様に提供できるようなコーナーを作ろう」という趣旨のもと、「じんぶんや」を立ち上げまして、彼らが異動してしまつて今は私が実質運営をしているような状況です。現在は第四四講を迎えております。詳しくはご紹介いただいたサイトをご覧ください。（<http://www.kinokuniya.co.jp/04f/do3/Tokyo/jinbunya/jinback.htm>）「じんぶんや」の選者の選定に関しては、たいていはこちらの好みによるものです。これまでお願いしてきた先生は、個人的にファンだった方も多く、直接やりとりをさせていただけるのは、まさに書店員冥利に尽きるもので、日常業務ではできない作業も多々出てきます。非常にこれが楽しいんですが、立ち上げ当初より軌道に乗せるまでは特に、業務外の作業が多くて、試行錯誤の連続で大変労力がかかったのも事実でした。ただ、今振り返るとそれらも全てよい経験で、特に私のように、飽きっぽい人間にとっては、このような約一ヶ月のサイクルで作業ができたからこそ、日々刺激的に業務に携わることができたんだと、今は非常に感謝しております。



(左から) 鎌内氏 吉田氏 池田氏 市岡氏 鈴木氏

「じんぶんや」を巡ってのエピソードを紹介します。
 具体的な雰囲気は伝わるのではないかと思います。

例えば三一講目、四方田大彦さんがお選びになっている回なんですけれども、『読むことのアニメのための五〇冊』というタイトルで「じんぶんや」用にオリジナルでエッセイを書き下ろしてくださって、そこにですね、「ここに選んでみせた五〇冊には何の法則も規則もない。だが確実にその五〇冊を貫いて私の精神の運動がある」といった主旨のくだりがありまして、それに伴って選書をしてくださり、それこそバルトやデリダなど硬派な書籍から、ロシア料理のレシピ本、火と土鍋で作れる料理本みたいなそういうものまで、縦横無尽にご選書くださったことが、大変私にとっては印象深く、それ以降の自分自身の企画の指針になるくらい印象に残っております。要するに軸さえ、自分の軸さえしっかりしていれば何でもできるのだというのが感想でした。また四方田さんだけでなく、選者の方は設定されたテーマを基に、人文にこだわらず本をたくさんお選びになる方が多く、回を重ねるごとにジャンルを横断するということについて個人的に面白さを感じるようになりました。視野もだん

だん広くなってきた、「じんぶんや」を依頼する方も人文に囚われることなく、建築やサブカルからアート、あと、国際政治の研究者など、多岐にわたるようになってきました。

また、この経験が、独自の企画にも反映されていくわけなんですけれども、「じんぶんや」とは別に自分で企画したオリジナルのフェアというのがある、ここで三点ほど、ちょっと紹介させていただこうと思います。

最初は、「メディア×デザイン×アート―変革への想像力―（人文科学）」のパラダイム転換を展望する」というフェアです（〇七年六月中旬―七月末開催）。新宿本店五階と南店六階にて共同開催したものです。ちょうどその年の七月の中旬に東大の安田講堂にて、「UMAT」これは「ユビキタス・メディア・アジアからのパラダイム創成」という国際シンポジウムがあり、その情報を聞いて、出席者などの書籍や関連書を平台に大きく開催する運びになったフェアです。タイトルは非常に壮大な切り口のフェアでしたけれども今振り返ると、当時、売り上げがちょっと低迷していたことで、私自身何とか売場の閉塞感に穴を開けたいと必死に考えていた時期に

重なり、このシンポジウムをきっかけに、既存の人文という縦割りのなジャンル区分というのを超えて新たなテーマの切り口をこちらから提案できたことが、いろんな方の協賛を得られることになりました。月曜社の小林さん、弊社の書評空間のブログの運営者、UMATの運営自体に関わっていた東大の院生、社内の営業部門の人間など、多くの人が協力をしてくださった結果、専門書フェアとしては大変好成績を収めることができました。

次に紹介するのは「現代アートと哲学」というオリジナルの企画です。（昨年一〇月末―一二月末開催）アートの雑誌『ART』というのがあるんですが、それが創刊四周年ということと、また森美術館が「六本木クロッシング：二〇〇七」、東京都現代美術館が「SPACE FOR YOUR FUTURE」という現代アートの展示会を開催するということをいいタイミングだと思い、日本の気鋭アーティストの作品集と人文書を織り交ぜ展開しました。このフェアにもやはり多くの人が協賛してくださいました。森美術館の方、また『ART』の編集長、広報部の方々です。展示会のパンフ、また割引券を配布しながら、お客様に、アートを人文書として、人文書を



紀伊國屋書店新宿本店

アートとして読んだらどうかという提案ですね、現代アートの作品集の横に哲学書や表象について論じたものなどを並べてアプローチしてみました。フェア期間中にちょうど東大出版会から田中純先生の『都市の詩学』が刊行されるという非常によいタイミングで、田中先生の選書で現代アートの哲学「都市の表象文化論」という「じんぶんや三六講」を絡めて開催することができました。こちら也非常に好評で売り上げもよい成績を残すことができました。この結果を受けてアートと人文というのは、客層が充分マッチするんじゃないかと。また加えて、やり方によっては人文書は他のジャンルによって裾野をさらに広げることができるのではないかと実感していました。

最後になりますが、これもジャンルを超える試みとして「私たちの社会に正義はあるのか」というフェアがございます（〇七年十二月）。当時、グローバルゼーションの議論に伴って注目を浴びつつあったリベラリズム、リベタリアニズム、コミュニタリズムなどの英米系の政治思想、こちらに注目をして、ロールズやノージックといった著者と共に、普段、政治学や経済学、法律、他の



紀伊屋書店新宿本店「じんぶんや」コーナー

分野に分散されて組み込まれてしまっている思想系の書籍を積極的に集めて展開しようといった試みでした。ただそれだけでは面白味に欠けるということで、それらをネグリ……ネグリ・ハートをはじめとする帝国論、また戦争論、国家論、抗力論などのヨーロッパ系の思想と組み合わせるといったことの試みをいたしました。こちらにも約一ヶ月間で二〇〇冊という売り上げを出して、非常に好成績を出しました。

最後に、現在開催中の「じんぶんや」四四講「熱き」時代の新宿、新宿の「いま」をご紹介します。資料の写真にも載っていますが、六〇年〜七〇年代の熱かった時代の新宿にスポットを当て、文化の発信地だった新宿と今の新宿、そして新宿のこれからを模索していくことを企画趣旨として、新宿本店の三、五、六階と南店の三、五、六階のメンバーと協力しながら両店で大きく開催中です。また、「じんぶんや特別版」として新宿ゆかりの文化人一五名の方にご寄稿いただいて、小冊子を限定で作成し配布中です。グッズや古本も置いて、それこそ何でもあり。非常に混沌としたフェアをメンバーと楽しみながら取り組んでいます。今年の一・二月末までの開催で

す。ぜひ、一度ご来店いただきたいなと思います。

以上、お客様に常にか新しい切り口を提案・情報発信する場として意識し、私自身が取り組んできたことについてご紹介をさせていただきます。ただ、こういった取り組みができますのも、繰り返し申し上げますが、既存棚の品揃えの充実と徹底した商品管理といった基本があつてこそだと思います。それらを肝に銘じつつ、

「じんぶんや」なり、また別のオリジナル企画なり、お客様に常に何かしら新しい情報を発信していけることが、我々紀伊國屋書店新宿本店人文書売場に勤務する者の心得であり、また喜びになるのではないかとこの認識を持ちながら、日々業務に臨んでいる毎日です。以上です。

鎌内 吉田様、ありがとうございます。この「じんぶんや」なんですけど、紀伊國屋書店新宿本店という日本一の書店ということでお客さんが非常に多いところで結果も出ているとは思いますが、皆さんにこういう試みを行う上でアドバイスがあれば御願ひします。

吉田 そうですね、ラインナップも全て公開中ですので、ご自由に全部使っていただきたいなあと思っております。「じんぶんや」のラインナップを使って工夫されて、さ

らにオリジナリテイのある企画をされるのも自由だと思いますし、それがただ、他のお店で売れるかどうかということについては、正直、私自身のほうからはしっかりした答えは言えません。試行錯誤の連続で、売り上げが伸びてきたのも最近です。継続出来たことが大きいと思います。皆さんのお店で蓄積されているノウハウとか色々あると思いますので、それらを上手く使つて企画を立てていただければ、お客様に訴えかけるものがあるんじゃないかと思います。ただ一つ言えることは、広報宣伝に力を入れてみたらどうでしょうか。本当にご来店されるお客様だけだと限定されてしまうので、そのフェアを認知させるつていうことにちよつと力を入れてみて、まだお店に來たことがない方にもお知らせしてみろつていうことに主眼をおいてやつてみれば、売り上げも期待ができるんじゃないかと、ちよつと思ひました。

鎌内 どうもありがとうございます。ジャンルを横断するフェア展開の報告は非常に刺激的でした。先程のシンポジウムで新書とか文庫ということもありました。ピル・ゲイツの話もありましたけれども、ジャンルを横断する展開。先程のシンポジウムに対する一つの答えが提



大垣書店烏丸三条店

出されたようにも思います。本当にありがとうございます。

お二人目は京都から来ていただきました、大垣書店烏丸三条店、池田忠夫さんです。私は彼との付き合いは、駿々堂時代ですね。池田さんは一九六八年、京都生まれ。学生時代に恵文社西大寺店でアルバイト。その後、一乗寺店へ異動、恵文社には四年半勤務されました。その後、駿々堂に中途採用で入社し、京宝店―桂店―神戸三宮店―大阪外商と異動され都合八年勤務。駿々堂倒産で丸善京都河原町店にアルバイトで五年半勤務。店の閉店により一時浪人生活をされましたが、二〇〇五年六月に大垣書店烏丸三条店へ、現在正社員として勤務されています。書店歴二二年のベテランです。池田さんよろしく願います。

池田 ご紹介にあずかりました、京都から参りました池田忠夫と申します。紆余曲折々々、気がつけばそうですね、人生の半分以上は書店、この業界にいるというような状況ですね。

先程紹介あったように、大垣書店。写真を見ていただいたように、こういうふうな、この横に大きなウインド



大垣書店烏丸三条店人文書棚

ウがあつて、京都のビジネス街の烏丸通りに面しておりまして、結構営業時間も長い時間やっています（平日九時半～二三時 日・祭日は二二時）。京都と言えば大きな書店さん、ジュンク堂書店さんなどがありますが、そんな中でも健闘しているのは、ひとえにこの長い営業時間のおかげかなあと。それと立地に恵まれたのかなあといい気はします。それでも、サイン会とかの問い合わせで場所を聞かれて感じることは、まだまだ認知度が足りないなあという気はいたします。

大垣書店烏丸三条店には二〇〇五年の六月に入りまして、人文書についてはそれまで全く棚がなかった状態でした、入社してすぐ棚を作り始めました。それが左の写真の形にしてあるんですけれども、これ、哲学思想かな？ 右側のほうが哲学が……哲学思想がダアツとあつて、一番奥で見えないですけども、一番端つこに自然科学があつて、二段だけあるという形です。左が心理と教育という棚になっています。こういう形を急遽作った状態でございます。ただビジネス街であるが故に、文芸書とビジネス書がやっぱりすぐく売れ行きがよくて、回転も速いわりに、人文書自体の動きが鈍かったわけです。そこで

私の経験から店の看板商品、ロングセラーを作ろうと。

例えば、駸々堂の時に先輩から教わったのが、これです。人文会の会員社の本ではないですが『自由からの逃走』（東京創元社）です。これが刊行されたのはかなり古いと思うんですけども、ちよつと奥付を見てみますと（昭和二十六年二月、四〇年新版）すごく古いですね。今からもうかれこれ四〇年近く前ですけども。これをずっと置いていた。なぜかと言うと、要するに京都にある当時の大学では、テキストになっていた。それが口コミで、「この店に行ったら置いてある」ということで、販売時期に偏りはありますが、一年間のトータル販売冊数を月平均で割るとものすごい数売るという状況がありました。当時、駸々堂の京宝店ではロングセラーで、絶対欠かさずに置けと言われてきました。それを結局この大垣書店でも、新しい店でも引き継ぐということ、それこそ新刊で、新しいものが入ったら入れ替えるというような、ビジネス書、文芸書はそういう傾向が多いですけども、それとは全く反対の形で、ロングセラーっていうのをしっかりと作っていくというふうに取り組んだものが何点かございます。

まずは、これも人文会会員社の本ではありませんが『仏像のひみつ』（朝日出版社）。当店に入荷したのが二〇〇六年の六月です。続編のほうが今年の四月ということ。続のほうはトータルで、まあ昨日までですかね、三一冊とまあまあですけども、問題は正編です。文藝春秋とかの書評などで取り上げたりもして、それもあつたんでしよう。当店のような小さな店でも、何と二八三冊売れております。二年五ヶ月ですか。平積みが続けたお陰とは思いますが、未だにメインの、話題書というか入ってすぐのコーナーのところで展開させていただいております。月だいたい二、三冊は売れております。京都は仏教書とか強いとかいうイメージがあつて、それもあるかもしれませんが、仏像の本ですけども、未だにロングセラーで売れ続けています。逆に売れ続けていると外せないというところもありますが一応、紹介させていただきます。

次に紹介するのは松岡正剛さんの本です。実は、個人的に多少こだわりがありました。松岡正剛さん。古いといえは古いですけど、工作舎時代の『遊』から存じていました。地元京都の出身の方でその頃から、気にはなっ

ていたんですけど、春秋社から出るということで、ちょっとこれはぜひ売りたいということで。全体的にもう結構かなり売れた商品とは聞いております。うちのデータでいきますと、未だにこれも平積みです。哲学書のコーナーのエンド台に唯一平積みができる場所で積ましていただきまして、『17歳のための世界と日本の見方』刊行から二年半。もうしぶとくしぶとく積み続けて、二六五冊販売しています。また、続編の『誰も知らない世界と日本のまちがい』ですが、これがまだ一年経ってないのかな？ 二〇〇七年二月ですんで…。そうですね、一〇ヶ月程ですね。ちょっと全体的な数字は分かりませんけれど、うちでは一四一冊というふうな売れ行きをしています。

個人的にはそういうふうにしぶとく売るということで売り上げを伸ばしています。大手さんがあるところ、その隙を狙ってうちはそういうふうな、ほとんど、個人的な趣味と実益重視で、自分の気に入ったものだけを積んでいるような状況です。でも結局しぶとくしつこく売ったお陰で、このような数字になっていると思います。『自由からの逃走』は現在も平積み中です。未だにこの

本だけですが、この店に異動しても月一、二冊は動いてますし、平積みはまだまだはずせません。そういうふうな状況で売っています。しつこく売っています。結局、前の店で受け継いだ、「ここに行けばあるだろう」というお客さんの口コミというのはやっぱりあると思います。その精神でやっているというところもありますし、あと、そういうロングセラーを一点でも多く作って、逆にその店の雰囲気というものを出せればと思っております。昔の経験を引き継いでいるままですけども、そういう形で報告させていただきました。以上です。

鎌内 池田さんありがとうございます。実体験から生まれたロングセラー作り、説得力のあるお話でした。例えば、送りつけて五冊入った本、七冊入った本。それをどう売るか？ 基本的に何冊売れば、ここで、基本的に五冊、七冊入った本が何冊売れば、そこでご自分で、「これはあと棚に戻して」みたいな、もちろん値段段とか内容はありますけども、その辺ってどういうふうな作業をなさっていますか？

池田 ええっと、迷うところですね、やはりそれは内容を見て全部は読めませんが、自分で気に入ったら積むとか。

そういう形でやります。結構初速が、まあ人文書に関して、過去の店の中で一番早かったんで、やはり。例えば一冊だけ入る本もかなりあります。そういう場合にはなかなか内容までは見られませんが、登録して棚で展示する形になりますが、それでもその日に売れてしまう商品もかなりあります。それで、また追加して今度は中身を見て、展開の仕方を棚にするか平積みしようとかは考えます。その中でやっぱり個人的な思い入れとかも多少入りますけども。

鎌内 その個人的な思い入れというのが棚作りのこだわりにも通じるわけですね。本当にありがとうございました。

三人目になります。喜久屋書店倉敷店、市岡陽子さん。市岡さんは「人文会ニュース」の一〇二号で『書店現場から』を書いていただいてから、人文会でもいろいろお世話になっております。一九七四年のお生まれです。一九九九年に喜久屋書店入社。阿倍野店で文庫・新書を二年半。その後やはり二年半児童書を担当、二〇〇四年二月倉敷店に異動、現在まで人文書を担当されています。今年七月に特約店訪問で私もお店を見させていただきま

した。来年で一〇年になるというお店で、実は倉敷のイオンさんの中に入っている店です。最近大型SC内に大型店がどんどん出店されていますが、そのはしりみたいなお店です。一〇年間人文書、まあ人文書はあとでいろいろしゃべってもらおうと思えますけども、ちょっと奥のほうにあつて、そんなに人文書のコーナーは広くないんですけれども、堅く確実に売り上げを伸ばしておられるお店です。それでは市岡さん、ご報告をよろしく願っています。

市岡 喜久屋書店の市岡と申します。よろしく願っています。

日頃書店業務の中で、人文担当者として心がけていることをまとめてみましたので、お聞きいただければと思います。

喜久屋書店倉敷店は、イオンモール倉敷の中にあります。倉敷駅からバスでは約六分。駐車場が四五〇台あり、車で来店されるお客様が多いです。商圈は東は岡山から西は福山くらいまで。北は県北の津山あたりからも来店されます。書店の広さは約四二〇坪。漫画館が約一五〇坪。合計五七〇坪のワンフロアです。営業時間が一



喜久屋書店倉敷店

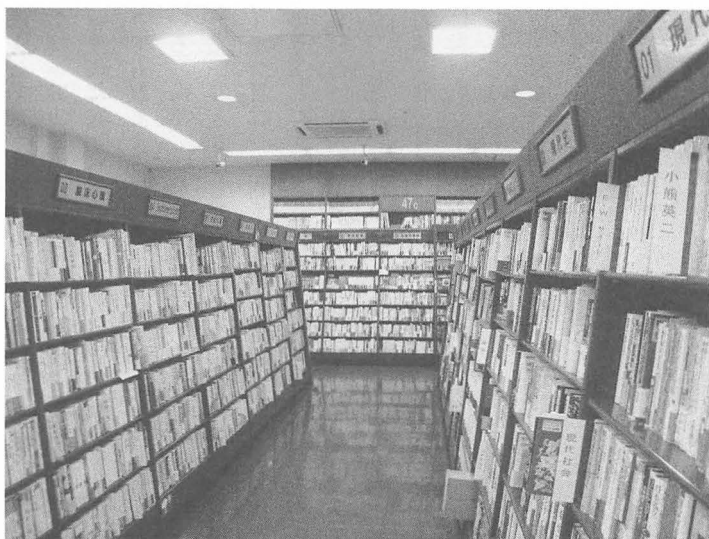
○時～二二時まで。年中無休です。社員七名を含め、全従業員三八名で店を動かしています。書店の一日の来客数は、平日で約一三〇〇～一五〇〇名。祝祭日ですと二六〇〇～二八〇〇名くらいになり、売り上げもそれに準ずる額になります。一ヶ月の売り上げは約一億円です。イオンモール倉敷が今年で九周年になり、私どもの倉敷店もイオン開店当初から入店しています。イオン全体で強い来客数を依然保っており、書店もその集客力に大変助けられていると思います。ショッピングセンター内の書店ですので、強いジャンルは児童書や実用書です。しかしながら人文書を始め、専門書にも力を入れたいという思いがずっとあり、今年になり、取次様の協力もあり、医学書を置くことができました。歯科やリハビリの医書、また以前から常設している看護・介護書が好調であり、インショップの書店において新しい挑戦になるのではと意気込んでいます。また、家族で来店され、医学書の需要に付随して、ご家族の分の購入にも繋がればいいなあと全ジャンルの活性化に期待しています。地方の土日中心の集客ということもあり、いわゆる世間で大きく売れている書籍については、大きく売れる土日にかけて商品

をいかに確保できるかにかかっています。お客様の滞留時間は長く、書店内にカフェも併設しています。じっくり選書していただけるように、これからも専門書コーナーの充実を図りたいと思っています。

人文書の棚は合計で三七六段。冊数は約一五〇〇冊です。私どものチェーン店のインショップ店の中でも人文書の棚数は多い方ではありません。ですので、限られた場所でピンポイントでアピールし、また売れている書籍の回りに二、三点お薦めしたいものを絡めるなど、平台、棚にしても並べ方に連動性を持たせ、お客様の視線が途切れないように心がけています。人文書に分類しているものでよく動いているものは、教育書、保育書、福祉書、精神世界、心理一般、歴史一般です。やはりガチガチの専門書よりは、どちらかというと軽い感じの入門書、読み物のほうが売りやすいです。トーハンさん分類で抽出した人文書の近月三ヶ月のベスト五是、学陽書房の『野口流授業の作法』、かんき出版の『手にとるように日本史がわかる本』、同じく『世界史がわかる本』、『心理学がわかる本』、日本標準『通知表所見の書き方＆文例集』、学陽書房『友達を傷つけない言葉の指導』で

した。また七、八月に行いました「四六判宣言」のフェアの売り上げトップ三では、青土社さんの『ビル・ゲイツの面接試験』が七冊。創元社さんの『プロカウンセラーの聞く技術』が六冊。みずす書房さんの『夜と霧』の新版が五冊という成績でした。

人文書の売場は店の一番奥にあります。座って読めるようにソファも置いてあり、入口の喧噪から一段落して落ち着いて選書ができるという利点もありますが、書店に來られた方が、皆、奥まで来ていただけない実情もあります。若いお客様が多いということもありますが、若い人にもっと人文書の売場まで来てもらえよう工夫を、書店としても考えなければならぬと感じています。出版社様にも、世代交代の波に乗れるような企画、ご本について考えていただければと感じています。ですので、棚の現住所が人文書であっても、売りたい、売れると思った本は、入口付近の一等地で展開します。店としては本当は奥まで見に入ってきてもらいたいのですが、目に付きやすい場所に並べるしか方法がないというのが現状です。そのような書店ですが、事前に一冊しか仕入れていない本もしっかり買っていただけのお客様も来てくだ



喜久屋書店倉敷店人文書棚

さっています。みず書房さんの『カロカイン』や『東京裁判』、未來社さんの『若き高杉一郎』、鹿島出版会『明治神宮戦後復興の軌跡』。いずれも発売後三日以内に売れており、急いで追加の注文をしました。棚に入れる時、この場所ですぐに取ってもらえるだろうかと思えながら入れたほうが、すぐに売れる喜び、面出ししなくてもしっかりと棚を見て買ってくれた人がいる書店員冥利に尽きます。このようなお客様を決して失望させないようにしなければならぬと、気が引き締まる一瞬でもあります。また定期購読として、東京大学出版会さんの『二〇世紀の論理学』や、みず書房さんのレヴィーストロースの『神話論理』を予約されていた、顔を知ったお客様もいます。私よりも先にこれらのシリーズの刊行を教えてください。期待に応えたいなと思います。私が一担当者として気をつけていることは四つあります。

まず一つ目は、季節感や時流にあった反応をしたいということです。以前児童書を担当していたこともあり、人文書にもう少し季節感を出したいと思っています。夏の戦争フェアなど、毎年少しずつ書目は変えているとは

いえ、毎年必ずフェアを行います。売り上げは取れるとは決して言えません。また各出版社様から、時事にあったフェアの案内が送られてきます。売れないかもしれないけれど取りあえずやってみようと、小さなフェアセツトでも取るようにしています。何か前来た時と変わっている、あるいは今はこういうものが流行っているという提案ができればと考えています。

二つ目は、既刊本も面出しする機会を多く持ちたいということです。これは店長の技を盗んでいるのですが、新刊台に新刊しか置かなければならないというのではなく、二冊。二作目が出たなら前作も。同著書の以前の良書も併売するなど、場所の関係上なかなかできないとは言いつくせずに、売れる既刊本は粘って面出しでアピールしています。山川出版社から出ている『山川詳説日本史図録』は、昨年一月の販売から四〇〇冊以上。二見書房の二〇〇二年発行の『論理パラドクス』という本は九月一ヶ月の実績で一二冊。以前は晶文社さんの『考える練習をしよう』が三ヶ月で三〇冊売れたことがあります。先程もお話にありました春秋社の松岡正剛さんの本も、今、現代史の棚に一ヶ所面出ししているだけですが、

毎月コンスタントに売れ続けています。人文会様を始め出版社様のご協力もあり、委託期間の過ぎた書籍も複数冊置き、そのあと返品を了承していただけることは、可能性を広げる上でとてもありがたいことです。常に売れる本を基本図書としてできる限りアピールしていくのも大切なのではないかなと思います。

三つ目は、問い合わせ、反応のあった書籍を売り捨てないということです。お客様より問い合わせがあり、残念ながら店に在庫がなかった本は、客注にならなくてもできる限り一冊入れるようにしています。そしてそのような書籍が売れていくことが、高い確率で起こるのです。例えば、麗澤大学出版会の『福田恒存評論集』の入荷が当初ありませんでしたが、お客様の問い合わせより入れるようになり、毎刊一冊ずつですが、売れてくるようになりました。インスクリプトの『民主主義への憎悪』も問い合わせにより置くようになった書籍であり、それ以後、新刊案内を出版社様よりFAXでもらうようお願いしています。小出版社様ともひとつずつ繋がりを作っていきたいと考えています。インショップの店では置いてないであろうと思われる本、人文書のような専門書や

堅い文庫などもそうです。そのような本が置いてあると分かるとリビーターが増えると確信しています。インシヨップの不特定多数のお客様の中にも人文書が好きな人がいます。たとえ買い切りの本であつても一冊仕入れ、仮にご家族で来店されたあと別の機会に來られた時見つけてもらえるように、お客様がついてくるようにしたいと考えています。また、当店では売り上げのランキングを毎週更新しています。大きく売れた商品も重要なのですが、面出しではなく棚に入れている本で一週間に二、三冊売れていく商品が重要だと考えています。二人、三人の人が買われたら、それ以上の売り上げが広がる可能性、需要があると感じています。二冊売れたら同じ数補充する。もしくはここで面出しして、新たなロングセラーを発掘できないかと考えたりしています。そのような小さな反応をないがしろにせず、売り捨てていけないようにしています。

最後に四つ目は、ジャンルごとの垣根を低くするということです。各ジャンルごとにフェアを展開する場所はあるのですが、店入り口すぐのメインの大きなフェア台は、各担当者話し合いや日常の会話からフェアのアイデ

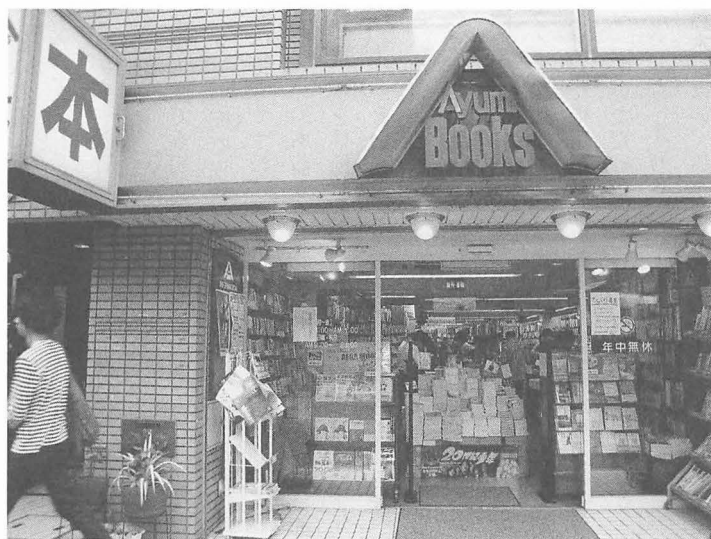
アを出していきます。現在、講談社の学術文庫や岩波文庫を中心に「外国人が見た日本」というオリジナルフェアをしています。ここに春秋社さんのブルーノ・タウトの復刊『ニッポン』『日本の家屋と生活』、小学館『トラントクの中の日本』、講談社の『犬と鬼』、祥伝社『外国人記者が見た戦前のシナと日本 上下』などを併売しています。文庫スペースに単行本を置くということは今まであまりやりませんでした。展開場所がよいということも手伝い、高額な文庫や既刊の単行本でも反応がありました。ジャンルについては、人文会様でも新ジャンルを作成されたり、目下議論されているところだと思います。先程の私の店で仕掛けている山川出版社の『詳説日本史図録』もトーハンさんの分類では人文書にはあがってこない書目です。山川出版社だと学参になるのかもしれないが、内容や価格を見ても学生だけではなく多くの方に手に取ってもらえる書籍であり、当店でも話題書、人文、学参と複数箇所で開催しています。ふさわしいところであればどこで売ってもいいというのは、展開場所やその周囲の本の選書に担当者の力量が問われるのではないかと思います。

人文書というくくりは幅が広く、他の専門書以上に展開場所に創意工夫できる書籍が多い、これが人文書の難しくも楽しいところなのだと思います。例えば、社会学というジャンルも幅広く難しいジャンルです。新書でも学術系の新書ではいわゆるジャンル分けすると、社会学に分類されるものがほとんどだと思います。新書の発行点数だけでも膨大な中で、四六判のものを売っていくというのは本当に大変だと感じています。新書の著者経歴紹介の欄に単行本の著作も紹介されていますが、新書を読んだあとに単行本の既刊本の購入に繋がるかといえ、なかなかそのようにはいきません。必要とされているジャンルだからこそ出版点数も多いのだと思いますが、新書の躍進の影に四六判の形で出版する意味を問われているような気がします。これから人文書、特に四六判の書籍をどのように売っていったらよいのか、今回の研修会でぜひ皆様にお聞きしたいと思いつてきました。

私は倉敷店の所属ですが、お隣の岡山市にも六月に九〇〇坪で、喜久屋書店岡山店が outlet しています。他店様の新規店もあり、過剰な outlet がオーバーストアと呼ばれているようです。来店される出版社様が、「大丈夫なの

ですか？」と心配顔で聞いてこられる方もいます。正直申しまして、私が地元出身者ではないので土地勘がないというのもあるのですが、一書店員からはピンと来ないというのが実情です。担当者として店の人文の棚を任されている、棚に触れるものとして、目の前の本に向かうことが私にできることだと考えています。目が回ると言う言葉がピッタリの忙しい日もあります。ありがたいことですが、どうしても目の前の仕事を片付けようと躍起になり、お客様の反応を見ようとしないことがあります。そのような時こそ、お客様に声を掛けてもらえる雰囲気を作っていかなければならないと思っています。本に対しても人に対しても、気持ちを向ける姿勢を持ち続けて仕事をしたいと思っています。以上です。ありがとうございます。

録内 ありがとうございます。いろいろ書名を出していただき、市岡さんの具体的な日常の取り組みが伝わってくる報告でした。また、新書と四六判の話がありましたが、本当にこれ、なかなか難しいっていうか、本当に、我々四六判やA5判しか出していない出版社と新書も出している出版社と、どうやって上手く、こう繋げ



あゆみ Books 早稲田店

ていくかっていうのは、非常にこれから課題になっていくんじゃないかなっていうふうに思っております。喜久屋さんに関しては草津と榎原に大きい店が一月に二店続けてオープンしますけれども、本当に大変だなと思っております。どうもありがとうございました。

最後になりますけれども。お待たせしました、あゆみBOOKS早稲田店店長の鈴木孝信さんです。鈴木さんは一九五二年のお生まれです。皆さんご存じの方いらっしゃると思いますけども、東京杉並の阿佐ヶ谷にある書原さんに一九八二年に入社されました。私も何回かお邪魔したこともあります。ちょうどその頃、八〇年代です。で、それこそ池袋のリプロさんの今泉棚がある頃ですね。ちょうどその頃に、書原さんっていうのは本当に独立店舗で、都内に何店舗かお持ちになっていて夜は遅くまで営業。あの棚を見るとみんなびっくりする、ごちゃごちゃした棚で。本当に書原さんっていうひとつのスタイルがありました。もちろん現在も続いています。そして一九八八年にあゆみBOOKS早稲田店に店長として入社されて現在は、専務取締役営業本部長という重責のかたわら早稲田店の店長としても現場に立たれてお

ります。

鈴木さんには私のほうから依頼してレジュメを作っていただきました（〇〇参照）。「身体について考える。声・呼吸・生命から」です。ここで皆さんに質問ですが、ここに手にしているのは誠信書房さんの本です。『音楽家なら誰でも知っておきたいからだのこと』。これ現在、人文書の棚で平積みをしている書店さんありますか？ないようです。多分、これは音楽書の棚に入っている書店さんもあるかもしれませんけれども。実は鈴木さんはこの本を早稲田店で約五〇〇冊販売しています。それはなぜかということをやっと鈴木さんにしゃべってもらいたいなと思っています。それとあゆみBOOKSさん、今、仙台に二店舗ありますけども、だいたい首都圏に固まってらっしゃって、そこでやっぱり人文書をすごく大事にしてらっしゃいます。営業本部長として各店へどんな指示をしていらっしゃるのかも、ちょっとしゃべっていただければいいかなと思っています。鈴木さん、よろしくお願いします。

鈴木 はい、鈴木です。よろしく願います。

なぜその『音楽家なら誰でも知っておきたいからだの

こと』を平積みしたかというような話になるんですが、その時にちょうど、声の発声法とかつていうものがたくさん出ていて、よく売れていたんですね。これは呼吸に関係があるのではないかと、山勘みたいなものですが。そこに図で示しますけれども、こういう流れの中で、じゃあ人文書で展開してみようかという形になったわけです。初動は音楽書のところでもよかったんですね。その初動のこともあって、じゃあ他に繋いでみようという形の中で、ただこれを単体売りしたとすればこの数字が出なかったのではないかと、いうふうに思っています。

先程の特別講演の竹内先生と、パネルディスカッションでの橋元さんの話を聞いていると、アカデミックな感じがしたんですが、私がやっているという売り方が、竹内先生の言うところの大衆社会の中でない交ぜになっていく人文書みたいな売り方じゃないのかという気も幾分はしていますし、下流人文書なのかなあという気も少しはしていますが、それはそれでいいんじゃないかと。結局のところお客さんが、好奇心、興味を持っているものを土台にして人文書売っていくというしか方法がな



あゆみ Books 早稲田店人文書コーナー

いのではないかと最近は思っています。

一応、フェアの説明をしますが、参考資料（章末参照）を見てもらうと分かりますように、人文書の版元さんの本っていうのはあまり含まれていません。リストを見ればお分かりの通りいわゆる一般書の版元さんの書籍ばかりです。その中に人文書の版元さんの本を、関連の本を一種類ずつという形になっています。その反対の場合も当然、現代思想とかっていう形になるとカルチユラル・スタディーズとかそういう形の中で、岩波さんのものか、実用書版元さんという、逆の流れの形もある。その辺が上手くバランスよくできれば、全然知らない入門、あるいは興味を初めて持ったような方も購入の動機になるんじゃないかというふうに思っています。意図的にそうしているわけですが、フェアテーマっていうのは「身体について考える」というふうに書いてありますけれども、これに関しては「身体と脳」でも何でもいいんです。基本的に言うところの総括的な大きさの意味が取れる名前ならどうでもいいんです。何でもかんでもぶちこめるという要素を持っていますから。あんまり小さくしてしまうと、やっぱりこの意味というか、品物に対し、

商品に対して制約を受けるという問題があるんで、できるだけそのテーマ名に関しては大きくしとくっていう形をとっています。そこにもうほとんど書いてあるので、「身体について考える」フェアをなんでやったかといえは、当然、その周辺の本が売れているということが一番の理由ですけれども、何といっても私自身が、好奇心でやりたいと、それが全てですね。

新刊の選択のポイントとも関係するんですけども、フェアも同じで、人文書っていうのはたくさん新刊っていうのが出ているんですね。文庫、新書も入れれば、人文系の文庫という形で入れちゃうと、相当な点数になっちゃいます。その中で新刊の平積みっていうことになると、一般性があって著者が著名で需要がありそうだとそうすると一ヶ月の中で、途端に何点かしかない世界になっちゃってしまうのが実情だと思うんですね。そりゃあ平積みじゃなくて面陳で試すというのは、かなりありますけれども、確信を持って、これが平だというような点数になっちゃいますと、月一〇点もないのではないかという気がしています。新刊の平積みの売れるポイントですけれども、ロングで売れるもの、かつ、その本が売れ筋の既

刊本と関連性が高く、販売面で強化できるものというところがあります。これはまあ本屋がビジネスであるということを考えるとこれはもう仕方がないという。またその本が、人文・社会・自然科学というんなジャンルに区切りがしやすく連鎖性を持っているものですね。そうすると人文書の担当者が楽になるんじゃないかと。いろいろ派生できるのでという考えも少しあります。それと著名な著者が多い分野っていうのも大事だろうと思っています。そういう意味で身体論は、内田樹、齋藤孝さん、斎藤環さんなど身体論、整体について書いている人が多いのでやりやすいという一面もあったと思います。結局のところ、一点一点をしつかり見て、どんな本なのか、どんな需要があるのか。一見すると新刊を分けてその場でだいたい判断していくわけですが、その書名と奥付、著者の紹介とそれだけではやっぱり分からないところもあります。読むのが一番いいのですが、でも一冊一冊読むことはできないんで、やはり常日頃の何か、その本がどういう本なんだろうという、常に、「その本がどんな本なの？ 端的に言えば」っていうところがないとやっぱり判断というものは難しいだろうと思います。

それでも、その日のうちに平積みを決定するか、面陳にするか、棚にするかという判断が必要なんです。やっぱり平日頃の商品知識みたいなものを『人文書のすすめ』（人文会発行）みたいなもので、ある程度やつぱり見ておくということが必要だろうとは思いますが。

だから一点一点大事にするっていうことなんですけれども、基本的に店長会議とか担当者会議とかの中で、僕がいつでも言うのはいつでも同じで、本屋に必要な資質っていうのは何だろうということになってしまうと、やつぱり知識はあったほうがいい。その上で、知識がないにせよ、好奇心が強い人。そしてその能力がある人。それをやつぱり一緒にして、じゃあこの本をどういう形で売るか、どういう本とくっつけて売るかという、やつぱり思考力が必要だろうと。その辺を口うるさく言ってるわけですけども。ですからその関連本ってものが、やつぱりその一冊の本がどこに飛び火するんだという部分が一番大事で、そこが見えてこないと単品売りになってしまうんですね。早稲田店っていうのは現代思想とか社会の本っていうのは、一点あたりでも非常によく売れるんですが、例えばそのアメリカのナシヨナリズムとかい

ろんな本が、あつという間にその三〇台、四〇台という形で売れていくわけですけれども、それは基本的にはやはり早稲田の学生が多いということに起因していると思いますけれども。だから他店の、チェーン店の一二店舗の中では、早稲田のようにやれと言ってもそれはできないわけです。

また、鎌内さんのほうから、早稲田店の小さな坪数の販売の仕方みたいなものを話してくれということなんです。当然、坪数がないといっても、今のところ人文書の棚は、哲学思想が一・五本。心理が一・五本。社会が三本。歴史が二本。文化人類学・民俗学が併せて一本ぐらいですね。社会の中には福祉と教育を含むということです。計ぎりぎり七本か八本、全体の冊数は二〇〇冊ですかね。今日、一緒に並んでいる他店の冊数から見ればもう微々たるものです。どうしても必要なのは一ヶ月あたりの量を売るという形になります。ですからその、これはというものは、何が何でも売り伸ばすっていう形になって、わりにしつこくいつまでもいつまでもやっていくっていうのが現状です。当然、絞り込みしないと入らないわけですから、平積み、面陳、棚共に。そうすると

日々の商品の絞り込みっていうのは、一番の作業になつてしまふんですね。それさえできればそれほど展開に無理はないんですが、でも絞り込みっていうのは非常に難しいですよ。当然、平積みするものが何点も出ているような状況であれば、でも上手い具合にそういうふうにはなつてないのではないかなと。そんなに平積み値している人文書はないのではないかなと、人文会には申し訳ないんですが。どっちかっていうと、実用書の版元さんが作るような、人文書の入門書のようなものが平積み化されていくというほうが、正しいように思います。そうは言つてもじゃあ早稲田店のように、一二、三坪の中で平積み、面陳、棚というものを絞り込んでいくには、やっぱり自店で何が強いかっていうものを人文書の中でも、人文・社会・自然科学の中でも何が強いかってことを把握してないと、絞りきれないっていう現状がやっぱりあるわけですね。ただ小さい店の場合はおさら、自店の中で何が強いかっていうことが分からないと、展開はちよつと難しいところがあります。

早稲田の場合で言うと、哲学・社会学が強いんですが、歴史が弱い。それは学生というようなこともあるのか、

僕の歴史の掘り下げ方が足りないのか。ただその哲学といつても、古代・中世哲学ではなくて、現代思想ということになって、復興以後の構造主義みたいなものを、ポストモダン的なものをドウルーズ、僕は分からないですけど。俗に新しいフランスの現代思想とかそういうものをですね。あとはイタリアの思想とか。いろいろな交ぜになつてくるような状況で、学生は新しい著者についていうことに關してはすぐに飛びつくんで、その辺は好調に売れるんですけども、絞り込みですね、一番は。それと自店の売れるものをはっきりと把握するということが重要になつてしまふ。社会といつても、福祉とか教育は全く弱く、教育は教育学部があるから強そうに見えるんですがそんなことは全くなくて。彼らは授業の中で教科書を使っているわけで、それ以上に何かをしようというようなところがあるかどうかちよつと分からないし、見えてこないんで。どっちかっていえばさっき言つていたカルチュラル・スタディーズとかナシヨナリズム、ジェンダーとか若者論とか現代思想とか。現代思想的なものはやっぱり彼らも関心があるんで、売れ行き好調ということになります。ですからそれぞれの一二店舗の自

店の売れ行きの動向をしつかり見て、そこに標準を合わせてやっていくという形になると思いますし、そういう形がうまく作動できれば、一二店舗の中での人文書っていうものはそれなりに売り伸ばすことができるんじゃないかというふうに思っています。

それと絶対的に欠かせない要素でいえば、これはという人文書の新刊は、わざとらしくでも一番前に積むことです。でないとその書店に人文書が扱っているように見えないという問題があるんですね、町の本屋なんです。早稲田店は早稲田大学の学生が多いんですけれども、他の店の場合はそういう要素があるんで、これは平積みしなくちゃならない本というものに関しては、一番目立つように置けという指示をしてるんですね。それと棚段数が少ないんで、よく棚を補充：手当てするということが問題になってきます。入ればなしになると、もうそれは、たいがいがりぴーとしているお客さんなんで、飽きられて全く売れないということにもなるし。だいたいよく店舗の中で、「うちは人文書はやっぱ全然売れません」という店舗はあるんですけれども、これに関しては全く信用してないです。要するに本当にそこまでつかえひ

つかえ平積みをやり、面陳をやり、自分なりに試行錯誤して棚を維持しての話ならそれは了解事項としますけれども、全く何もしてない、たいしたこともしないで、平積みだけ取り替えて売れないということに関しては、納得もしないし理解もできないので継続させるという形にわりと強制的になっていきます。

それともう一つがその書籍でナシヨナリズムみたいなものが出たら、新書、文庫もそこに連動させるということとです。そういうものを集めさせて、一緒にやれるだけのスペースがあれば一番いいんですけれども、それだけのスペースがないんで、文庫なら文庫のところでナシヨナリズム集めなさいっていう形の中でやっています。そのほうが全体的に、店全体としては、人文書の扱いが多いような錯覚を起こしてくれないかという幻想ですね。でも多少幻想でも役に立っているんじゃないかという気がします。

本当に日々、やっぱりじゃあどうやって品揃えをするんだっていう話、店長会議などであるわけですが、それでも日常の新聞広告、出版社の新聞広告等を利用してやったらいいのではないかっていう話をしています。一番いい

のは、今日の朝日新聞の広告で鈴木孝夫さんの『新・武器としてのことば』が載っていました。この本に關しても、言語・論理学・心理・コミュニケーションなどみたいなふうに繋げていくことができて、底辺も広いし、文庫も多く出ているということもある。で、こういうものはフェアまで大きくしなくてもミニフェア的にはできるんじゃないか。それと今日のその同じ朝日新聞の広告にあった、毎日コミュニケーションズの『考具』『アイデアの作り方』『アイデアマップ』、これも本来はビジネス書のほうのくくりになると思うんですけども、それを、ビジネス書はビジネス書でやればいいし、人文書のくくりのほうでやれないかっていう、そういう発想をしてみたらどうだろうかというふうには店長に仕向けるわけですけども。ただ目に付いたものの中で自分たちがいつも何か手段、売れ筋というものを頭の中に氣にかけているんだったら、そういうアイデアっていうものはやっぱり次から次へ出てくるのではないか。それとただ、無理矢理な品揃えっていうのはできないわけですから、無理矢理な品揃えすればそれは必ず売れないわけですから、やっぱり売れている点と点を繋いで線にして面にす

るといふような形の中で、徴候のあるものでやつてくれるという話をしています。

それとやっぱり先程出てたデータの話ですけども。当然營業を預かっている責任者としては、データというのは当然重視するんですね。例えば、月を三回に分けて一〇日と二〇日と月末時点でチェーン店全体のPOSレジのデータのベスト五〇〇を出します、私が出します。その中で全店が選り出して、全店が平積みとして、なくてはならないもの。つまり無理のない平積みであるという判断したものに関して、チェックをして、それぞれの担当者は嫌がるんですが、店長も嫌がっているようですけれども、例えば早稲田店なら早稲田店、人文書に關して二三点落としか、五反田店、文庫何点落としかっていう形の中で、そういう利用の仕方をしてはいます。なぜかと言うとやっぱり、どこでも売れているもののはどこでも売れている要素ってものは共通項としてあるわけですから、それをただ一店舗だけがポツンと欠本しているっていうのは、これはおかしいわけで。それに対してじゃあデータを見ると、やった形跡がないと。どう入ってきて、これに対してじゃあどこに積んだというような

ことになるわけですが、わりとこの辺はしつこくやっちゃうんで、そうするともう、あるべきじゃないところにおまえ積んでんじゃないのというような話になったり。また人文書の担当といつても、だいたいがうちの場合だと掛け持ちなんです。人文書だけの担当なんてこれは存在しない。だいたい店長が人文書やっているんで、店長は文芸・人文・ビジネス・芸術書。この辺までは店長の分野になってしまってます。これがなんかちょっと悪いほうに出ているんですね。売れている順序で言えば人文書は必ずしも売れ筋にならないんで、平積みをする時に優先順位が文芸書になったり、ビジネス書の自己啓発になったりするんで、どうしてもあとに回されるというか、展開の仕方の中で不利をこうもっているという問題はあるんですけど。ただデータに関してはかなり正確に、チェーン店全体の一二店舗の数字を、最終的には一ヶ月出してその中で売り損じに関しては翌月に持ち越すなどという形になっています。翌月に要するにそれをどうしても平積みしたくないというような、いつてみれば管理って言われればそれまでですけども、理由を述べると。やっぱりPOSレジってものも入れて

多額のお金をかけてそれでやっている以上、その効率を会社が求めることは仕方がないのではないかと。ただしその効率といったところで、平積みや面陳を全て売れるものに揃えていくってことは困難ですから、そこに人文書なら人文書担当者の工夫の余地が残っていると思うんです。要するに一〇〇%の事例、じゃあ売れてるものを揃えられるかっていうと、そりゃあ五割で揃えられるのがせいぜいだろうし、そうすると五割もの自由采配裁量つてものがでてくるわけですから、そこは自分たちが、基本的にはその売れ筋を軸として自分が面白いと思うものを、そしてそれがお客さんと共感できるものをもってこれというような動きになってくれると思います。

鎌内 鈴木さん、すみません、そろそろ時間になってしまいました。現場サイドに立った非常に刺激的な報告でした。また、各店への指示等の話も皆様方にとつても参考になったのではないかと思います。このケーススタディの締めくくりになったのではないのでしょうか。本当にありがとうございます。

『身体について考える（声・呼吸・生命から）』

少し前に、今現在も続いていると認識していますが、声のトレーニング・音楽療法・呼吸法・整体・身体論。自然治療法が売れ筋であったという状況がありました。

そのだいたい以前にも工作舎から「遊」という雑誌なども出て、精神世界・ニューサイエンス・宗教ブームがあり、今も細くなったり、広くなったりしつつも幾筋の流れが形を変え継続している実感を持っていました。そんな背景もあって、誠信書房の『音楽家ならだれでも知っておきたい「からだ」のこと』を音楽書のコーナーだけでなく関連本を集めて人文書のくくりとしてやってみようかと判断しました。

簡単な図をつくってみました。

声のトレーニング「売れてる理由として二方向あるのではないか？」

声をよくしたい。きれいな発声をした い。（カラオケ・自分の声に自信が持 てない等々）	声の発声が呼吸に身体に精神に何がし かの影響を与えている。
--	----------------------------------



呼吸を通して健康への関心



整体・身体法への興味



アロマテラピー・マクロビオテック・
オーガニック・ヨガ・東洋医学・武
道・古武術・呼吸法・丹田・整体等々
への興味



精神及び宗教・社会問題「心理・脳・
生命・仏教・精神世界・環境・エコロ
ジー等々への興味」

「意識としては私もお客さんも混沌と
しているが意味としては個々に漠然と
ひとつのくくりになっているのではな
いか？」



必然スローライフ・ライフスタイルという生活の部分につながっていくのでは？
一点一点の本をつないでより多くの人が関心をもてるよう、実用書・一般書・人
文書の区別なく展開する事を心がけました。



参考資料

〈声〉

声がよくなる本 米山文明 主婦と生活社

声に出して読みたい日本語 斉藤孝 草思社

あなたの魅力を演出するちょっとしたヒント 鴻上尚史 講談社

〈呼吸法〉

呼吸入門 齊藤孝 角川書店
能に学ぶ和の呼吸法 安田登 祥伝社
和の身体作法 安田登 祥伝社

〈武術・身体法・整体〉

古の武術を知れば動きがカラダが変える MCプレス
古武道で毎日がラクラク 甲野善紀・萩野アンナ 祥伝社
身体を通して時代を読む 甲野善紀・内田樹 バジリコ
自然体の作り方 齊藤孝 太郎次郎社
身体知 内田樹・三砂ちづる バジリコ
身体づかひの意識論 高岡英夫 青春出版社
身体意識を鍛える 高岡英夫 青春出版社
響きあう脳と身体 甲野善紀 バジリコ
身体の言い分 内田樹 毎日新聞社
ちぐはぐな身体 鷺田清一 筑摩書房
整体入門 野口晴哉 筑摩書房

〈身体・脳・生命〉

孤独であるためのレッスン 諸富祥彦 日本放送出版協会
人生に意味はあるのか 諸富祥彦 講談社現代新書
脳と妄想 茂木健一郎 新潮社
海馬 池谷裕二 朝日出版社・新潮文庫
進化しすぎた脳 池谷裕二 講談社現代新書
遺伝子が明かす脳と心のからくり 石浦章一 羊土社
海・呼吸・古代形象 三木成人 うぶすな書院
胎児の世界 三木成人 中公新書
内臓のはたらきと子どものころ 三木成夫 築地書館
人間生命の誕生 三木成人 築地書館

〈スローライフ〉

スロージズビューティフル 辻信一 平凡社
生きているだけでなぜ悪い 中島義道 ビジネス社

〈アロマセラピー・ヨガ〉

アロマセラピーバイブル 塩谷紹子 成美堂出版社
ヨガのうちエクササイズ 綿本影 高橋書店
Y o g a ではじめる瞑想入門 綿本影 新星出版社
はじめてのマクロビオテック 長沢千佐子 成美堂出版社
東洋医学・漢方・ツボ マガジンハウス

以上おわかりのように、人文書の出版社の本が少ない事に気づかれると思います。良く売れる一般性のある書籍を核として人文書の出版社の関連書売っていく形になっています。思想・哲学の場合などは核が人文書の出版社の書籍で、親しみやすいように一般書の出版社のものが関連書の場合もあります。

関連書の例

〈心理〉

ユング心理学と仏教 河合隼雄 岩波書店
アレクサンダーテクニク Wバーロウ 誠信書房
アレクサンダーテクニクの学び方 B・コナブル他 星和書房
セルフコントロール（正統） 池見西次郎 創元社
こころが晴れるノート 大野裕 創元社
トランスパーソナル心理療法入門 諸富祥彦 日本評論社
プロカウンセラーの聞く技術 東山紘久 創元社
アサーション・トレーニング 平木典子 金子書房
マインドコントロールとは何か 西田公昭 紀伊國屋書店

〈仏教〉

宗教なんかこわくない 橋本治 筑摩書房
呼吸のくろう 辻隻明 春秋社
白隠の丹田呼吸 村木弘昌 春秋社
万病を癒す丹田呼吸法 村木弘昌 春秋社
ほっとする禅語クロ 渡曾正純 二玄社
坐禅のすすめ 山田無文 禅文化研究所

〈精神世界〉

野口体操からだに貞く 野口三千三 春秋社
ビーヒアナウ ラム・ダス 平河出版社
なまけ者さとり方 Tゴラス 地湧社

〈環境問題〉

地球を救うかんたんな50の方法 アースワークグループ 講談社
メス化する自然 デボラ・キャドベリー 集英社
エコロジー アンナ・ブラムウェル 河出書房新社
エコロジーショップの働きかた 新井由巳 自然食通信社
農を守って水を守る 柴崎達雄 築地書館
スローライフ・スローフード 大谷ゆみ子 メタブレーン
住まいとステータス 松原小夜子 海青社
木洩れ日の庭で 中谷耿一郎 TOTO出版
森の生活 ソロー 岩波書店
田舎暮らしの周辺の本等々
『関連本はたくさんの中から選択ができるので売れ行きの動向を見ながら随時
変えることになります』

第三部 パネルディスカッション

人文書の最前線

小林 浩（月曜社取締役）

飯野勝己（平凡社編集部）

磯 知七美（筑摩書房編集部）

山田秀樹（東京大学出版会編集部）

司会 吉武 創（勁草書房）

吉武 第三部の司会をする勁草書房の吉武です。よろしくお願いたします。今回のセッションが本作りと本の棚作り、販売をする現場との、コミュニケーションが取れる場になれば、と思います。

事前のアンケートで多くの方が役立つ情報源として名前を挙げられていた、「ウラゲツブログ」を主宰されている月曜社取締役の小林さんに、ゲストスピーカーとして口火を切っていただきたいと思います。よろしくお願いたします。

小林 月曜社の小林と申します。よろしくお願いたします。僕の場合、編集者として人文書を本格的に作り始めたのは月曜社を二〇〇〇年一二月に共同設立してからです。皆さんのご参考になるような情報を僕が持っていると考えれば、月曜社以前からたずさわっている営業の現場で、人文書の最前線というのは何だろうと考えてきた、その体験談かなと思います。販売の現場で最前線を表現するのも、編集という行為であると僕は考えます。編集は本屋さんでも実際に行われています。すなわち棚の編集です。一応レジュメを用意しまして、ここに書きましたことは、主に営業の実地で色々とやってきたことや、販売

の現場でやってきて自分自身の糧になったという、そういう体験のお話です。

僕が最初に営業マンとしてスタートしたのは、未來社の時でして、今日会場にお越しの西谷社長に拾っていただきました。一九九三年一月一日から正社員として採用されて営業をやり始めて、私もともとは本屋さんが大好きなものですから、本屋さんに行くのが全然苦じゃないんです。プライベートでもよく本屋さんを利用しますし、本屋さんに立ち寄ると、どうしても本を買ってしまうタイプです。営業マンの仕事というのは、平積みの注文を取ってきて一人前になる感じもありますが、書店員さんとの付き合いの中で僕が一番勉強になったのは、書店員さんが苦心してらっしゃるのは売れ筋の商品の確保だけではなくて、棚づくりである、と学んだことです。棚編集が非常に重要だと確信したのは九〇年代前半だと思います。リブロ池袋店の、いわゆる今泉棚と呼ばれていたあの棚に学生時代から影響を受けてきました。当時のリブロの池袋店は、現在の地下一階の趣味実用書コーナーにいきなり人文書がありまして、隣の雑誌売場は外国文学でした。児童書・文芸書に現在なっている場所は芸術



(左から) 吉武氏 小林氏 磯氏 飯野氏 山田氏

書売場です。芸術書とオール・ヴィヴァン。オール・ヴィヴァンからは現代音楽の先鋭的なノイズめいた音楽が怪しく聞こえてきて、そのフロアには当時、服装が自由だったものですから、色々な服装、個性的な服装をなさっている書店員さんたちがいました。当時のリプロ池袋店については、田口久美子さんが『書店風雲録』で書いていらっしますから、詳しくはそちらをご覧ください。

営業の仕事の話をしている気付くのは次のようなことです。編集者が一生懸命作った本は、製本された段階でモノとしては一応完成するけれども、それは本の誕生の一段階に過ぎない、と。製本された本は、今度は市場という本の海の中に投げ出されます。本の海の中に投げ出された時に、一冊一冊の本は、他の本とのつながりの中で生きたり死んだりする。僕は、編集というのは二度行われると思っています。一回目は本を作るための編集。二回目は書棚の中で生きたり死んだり、生まれ変わったりする、そういう次元での編集があると思っています。さらに言えば、編集とはその二つだけじゃなくて、色々なレベルがあるのではないかということを、今回レジュメに書いてみました。著者の方が行う編集というものもある

りますし、読み手が行う読者レベルでの編集というものもあると思います。分かつこと、分別すること、結合すること、結ぶことを、単純に言って編集の大きな機能だとすると、本を作るだけが編集ではなく、棚作りも編集です。そういう考えのもとに、書店員さんと一緒に色々、フェアをしかけてきました。それらの一端が九〇年代前半のリプロ池袋店での「天使」フェアであり、九〇年代後半の紀伊國屋書店チェーンでの「カルチュラル・スタディーズ」フェアでした。カルチュラル・スタディーズは、当時まだ関連書が少なく、雑誌で特集されたぐらいのタイミンでやったので、苦労しました。二一世紀に入りましてから、〇〇年代前半に、三省堂書店本店の人文書売場で、人文社会系の洋書のフェアをやりました。洋書取次のUPSさんが協力してくださって、和書のフロアで洋書売ったのです。結構売れました。最近では「中野幹隆という未来」というフェアを手伝って、これはジュンク堂書店の新宿店、池袋店、京都BAL店を巡回しました。中野幹隆さんは、哲学書房の社主で、その前にお勤めだったのが朝日出版社です。思想誌の「エビステマー」をやっていたらって、さらにその前が

青土社「現代思想」の創刊編集長、その前は竹内書店で「バイディア」という雑誌をやつてらっしゃいました。その前が、今は存在しないですけど「日本読書新聞」です。

こうしたフェアのほかにも、新規に棚を作るお手伝いもやりまして、九〇年代後半には紀伊國屋書店新宿本店で、人文文庫棚というのを作りました。人文系の文庫を、文庫売場までわざわざお客様に移動していただいて買ってもらうのではなく、人文書の単行本のフロアで人文系の文庫を買えないかと。お客様にとってそのほうが便利だろうと。売場でのメンテナンズや仕入での仕分けが面倒ではありましたが。あるいはジュンク堂書店池袋本店で人文洋書棚を、同新宿店で反戦平和棚というのを作りました。この二つは、今日いらつしゃっているジュンク堂書店の澤樹伸也さんのお手伝いをしたものです。人文洋書棚については、和書ではやりつくしたから次は洋書しかフロンティアがないと、澤樹さんが仰るのです。そこで、まず英米語の洋書を取り入れ、池袋店がリニューアルされ二〇〇坪になる時に、本格的に大きく展開されました。その後、フランス語やドイツ語の本とかも入

れまして、その時もお手伝いしました。反戦平和棚は、ここ数十年人文書の新しい棚分類が新設されるということがなかなかなかったものですから、ちょうど新宿店がリニューアルする時にぶつけて、お客様がハツとするような棚が作れないだろうかということで、反戦平和棚という非常にメッセージ性が強い企画を立てました。普通はそういうメッセージ性の強いものは敬遠するものだと思うのですけれども、あえて澤樹さんはそういうものを採用されたわけです。反戦平和棚のことは最近、朝日新聞にも取り上げられたりして、良かったなと思います。

棚編集というのは、僕だけが言っていることではなくて、以前から意識的に言ってらっしゃった方の中には、たとえば、往来堂書店、b k l、楽天ブックスを経て、現在はファザリングジャパンの代表になっていらっしゃいます安藤哲也さんがいます。安藤さんは「文脈棚」という言い方をされますね。そのほかにも、直接的な書棚論ではないけれども、田口久美子さんの『書店風雲録』では、リプロでの本の売り方というのが紹介されているし、今日ご出席のジュンク堂書店の福嶋聡さんが、『劇場としての書店』という本を書かれています。劇場

書店論というのは、棚編集論と親和的であるという気がします。

最後に、時間が迫りましたので全部は言いきれませんが、先日「情熱大陸」というテレビ番組で、幅允孝さんという方が紹介されていましたね。以前は青山ブックセンター六本木店にいらっしゃって、その後、マガジンハウスの編集者だった石川次郎さんがやっていらっしゃる編集プロダクションのJ-Iに入られて、ツタヤ東京六本木をプロデュースされました。ツタヤ東京六本木をプロデュースされたので、次々に選書の仕事を頼まれているという、そういう方です。選書業あるいは「ブックコーディネーター」という職業は、本屋ではない場所に本棚を作る仕事で、生活のあらゆる場所に本を、という考え方が基本です。レジュメに書いた、安岡洋一さん、江口宏志さん、幅さん、内山晋太郎さんという四名は、それぞれ基本的に業界の外で活躍されている方たちです。業界の外の人が、業界の外の人と組んで、本屋じゃない場所に本棚を作ったり、新しいタイプの本屋さんを作るということをやってらっしゃいます。この業界のしがらみとは全然関係のない場所で色々な試行錯誤をしてらっ

しゃっていて、僕は彼らの活動に大いに注目しています。彼らがプロデュースしている本屋や本棚は色々あります。たとえば、美術館の中のショップであったり、銀行や旅館の中に図書室を作ったり、花屋さんやアパレルショップの中に本棚を作ったりしている。ブックカフェというのは業界内でも見ますけれど、彼らはさらに進んでいきます。それが非常に面白いなと思っていて、皆さんのお仕事のヒントになるかもしれないと想像しています。

このほかレジューメでは、「イタリア現代思想」「アメリカ現代思想」「ゼロ年代」などについて書きましたので、ご参考になれば幸いです。

吉武 続いては、昨日の講演やディスカッションなどで、新書というキーワードが多く出てきたと思うんですが、筑摩書房新書編集長の磯さんお願いします。

磯 おはようございます。筑摩書房の磯と申します。よろしく願います。

人文書の中に新書が入るのかと考えると、最近の新書の棚をご覧になるとおわかりかと思いますが、「人文書の最前線」というよりは、ほとんど最果て、極北という感じがどうしてもしてしまいます。

先日、フリーランスの編集者、長く大手版元さんで書籍編集をされていたのですが、その方と話をしていたら、最近、買う新書といえば、大阪出張の片道で読めるぐらいのものだ、って言うんですね。東京から大阪二時間半ぐらいで読める……それはちょっと微妙だなと思ったのですが、さらに続けて、お弁当を食べる時間と軽く昼寝をする時間も確保したい、とおっしゃる。っていうことは正味二時間で読めるものということになりますが、ちくま新書は全滅です。よほどの速読家でない限り、ちよつと二時間で読めるものはないと思います。まあ、その場は笑って終わりましたが、案外これが、新書を取り巻いている現実かなあと、ちよつと寒い気持ちになりました。

ちくま新書の創刊は、一九九四年九月で、ちよつと一五年目に入ったところですよ。ご存じの方も多いと思いますが、当時は岩波新書、講談社現代新書、中公新書、いわゆる御三家が新書の九割で、ちくま新書はそこに後発として入りました。それから数年経って、九八年に文春新書が創刊、翌九九年に平凡社新書、集英社新書、二〇〇〇年に角川ワンテーマ21、二〇〇一年に光文社、二〇

○三年に新潮社と、各社がどんな新書に参入してきました。

この間に何が起きたかと申しますと、雑誌編集者が新書を作るようになった、ということが言えると思います。このことは意外に大きなことではないかと思っています。一口に編集者と言っても、雑誌と書籍では別の職種と言えるくらい仕事のあり方が違います。まずフットワーク、アンテナの立て方、それからテーマの絞り込み方法などが違いますし、一つのテーマでの射程距離も全然違うと思います。書籍編集者は、割とじっくり本と向き合う傾向があつて、一般的にジャーナ的なテーマはあまり得意ではありません。いっぽう雑誌編集者は、フットワークが軽く今日のテーマに敏感に反応する訓練ができています。端的なのが新潮新書で、創刊当時八名で立ち上げられたそうなんです、そのうちの六人が雑誌編集者だったそうです。創刊当時の編集長も現在の編集長も、雑誌に長く携わつてこられた方です。他の雑誌を抱える版元さんでも、新書編集部には雑誌経験者が多いようです。すると、新書がどうしても高速化していきますね。すぐ読めるもの、すぐわかるもの、すぐに役立つもの、

という傾向が強くなってきました。

かくして、「大阪片道弁当昼寝付き」という読者のニーズと、雑誌の特集テーマを決めるように新書一冊分のテーマを決めるという、編集者側、作り手側の姿勢やセリがびつたり合った。それが新書の流れを変えたと思います。そしてここ二、三年、その傾向が加速度的になつてるように思います。

そういう中で私どもは今、八人で毎月五点、年に二度六冊出す月がありますので年間六二冊を作っています。ちなみに全員、雑誌経験がほとんどありません。書籍畑でやってきました。

昨日のディスカッションは全部拝聴できなかったのですが、人文書の棚と、新書あるいは文庫をジョイントしていこうというお話が出ていたと伺いました。私ども作り手からしても、それは非常にありがたいことだと感じております。と言いますのも、先ほど申し上げましたように、雑誌的な新書が増えれば、初速で売れないものはどうしても返品になってしまいます。ちくま新書は一日発売なのですが、以前は翌月の新刊が出るまでは平台に置いてくださっていたものが、他社新書が二〇前後に

出ると、平台は満杯、結果的に一ヶ月もたず、月後半には返ってきてしまう。初速がよくないと販売チャンスが少ない、つまり地味なものは埋もれてしまうのです。しばしば出版の二極化という言い方がなされますが、売れるものだけが売れて、売れないものはほとんど売れなくなるという傾向が非常に強くなってきています。数年前までは、「ちくま新書は棚で既刊が売れていますよ」と言ってくださる書店さんが何軒もあり、非常にありがたく感じていたんですけれども、この二年ぐらい、それに頼れなくなってきた、という印象が強いです。

かつては新書は、ワンメイクのユニフォームで整然と並んでいましたが、やはり初速で読者をつかめないためだということで、「目立たせる戦略」が目につくようになりました。度肝を抜くタイトルや、派手で奇抜な帯などです。そうすると逆に、もう新書の棚のどこを見てもいいか分からない、ほしい本になかなか到達できないという現実が起きているように思います。目的がはっきりしていて、たとえばあるテーマの入門書的なものがほしいという人たちは、じゃあどこへ行けば必要な本に出会えるか。新書の棚で探せなくても、それぞれのジャン

ルの棚にもし新書が入っていれば、手ごろな入門書として手に取っていただけるのではないかと考えています。

すこし話が戻りますが、ちくま新書の既刊の話をちょっと申し上げたいと思います。ちくま新書足掛け一五年で、通算約七五〇アイテムが出ています。稼働点数は四五〇から五〇〇の間ぐらいでしょうか。それを累積部数でランキングしてみました。

五〇位の中に、創刊から五年以内の九〇年代に刊行され、かつ直近の一年以内に増刷しているものが十数点あります。ちくま新書は創刊当時、哲学思想系の新書を標榜しており、意識的に作っていた『〇〇入門』というラインが何冊もあります。例えば『ニーチェ入門』（竹田青嗣）、『ワイトゲンシュタイン入門』（永井均）、『カント入門』（石川文康）、『フリーコー入門』（中山元）などですね。これらはいまだに一〇刷、一三刷と版を重ねています。他にも、『日本人はなぜ無宗教なのか』（阿満利麿）、『教養としての大学受験国語』（石原千秋）、『パラサイトシングルの時代』（山田昌弘）、『考える』ための小論文（西研・森下育彦）、『生命観を問いなおす』（森岡正博）、『子どもたちはなぜキレるのか』（齋藤孝）、

『新・建築入門』（隈研吾）。このあたりのものは、いわば定番として、ちくま新書の屋台骨になっています。

おそらくこういったアイテムが、人文書の棚とジョイントしていく鍵になるかと思っています。

三省堂神田本店さんに「新書ガールズ」というユニットがあるのをご存じでしょうか。昨年、新書を各フロア、各売り場で展開しようという試みをしてくださいました。比較的新しいものを扱っていただいたんですが、やはり入門書的な位置づけのものがよく売れました。この結果は心強いものでした。新書の棚だけではなくて、他に広がっていく可能性、要素を持っている新書があると思います。

同時に、まずは手ごろな新書をきっかけにして、さらに専門性の高い書籍に手を伸ばしていただけるような、人文書の「入り口」になる新書が必ず各社にあると思います。新書はとにかく点数が多いので目配りしにくいかとは思いますが、おそらく各社の営業担当の方にご相談されると、たちどころにリストを作ってくれるんじゃないかと思っています。

新書が洪水になっている中で、私どもも切実に手に取

ってくださる人に届けたいという思いがあるんですね。ですので新書の棚だけではなくて、可能性があるならばどんどん広げていただきたいと思っています。当然新書だけではなく、文庫の中にもあると思います。講談社学術文庫や平凡社ライブラリーなど、弊社にもちくま学芸文庫がありますが、人文書と親和性の高いペーパーバックは随分あるのではないかと思います。

最後に今後のことをちよつと申し上げたいと思います。昨日お配りした資料の中に、竹内洋先生の『社会学の名著30』が入っていたと思います。この『名著30』はシリーズ化しているのですが、最初はブックガイドのようなものは新書では地味じゃないかなと思っておりました。でも、最初に刊行した『歴史学の名著30』（山内昌之）、『政治学の名著30』（佐々木毅）ともどもおかげ様で好調で、いずれも増刷しています。あるいは『高校生のための評論文キーワード100』（中山元）というものがあります。これはタイトル通り学参的な位置づけで出たのですが、意外に大学生協をはじめ一般書店さんでも売れていまして、刊行から三年で五万部近いかと思っています。この本は一見開きでひとつのキーワードの解説をしてい

く形になっています。今、特に若い人たちは、人文書と言つてもちよつと敷居が高いと思うんですね。小説は読んでも、論理的な文章を読むのは別の頭なので、訓練ができないとなかなか読みにくい。あるいは専門用語で蹟くというようなことがあります。それでこうしたキーワード解説が歓迎されたのではないかと思います。ブックガイドやキーワード的なのは、新書の中でもさらに敷居の低い入門書として可能性があるかなと思つています。さらに、敷居を下げることに同時に、新書と専門書の隙間を埋める、例えば選書的な単行本群にも、今後は需要があるのではないかと思つています。

吉武 ありがとうございます。続きましては、平凡社の飯野さんにお願ひいたします。飯野さんは編集のお仕事のかたわら、大学で講義もされていきます。今日は現在の学生と人文書についてお聞きできればと思います。

飯野 私は編集者としてはずっと平凡社新書の仕事をしてきましたので、その面からの話題は磯さんといふかぶつてしまいます。そこで、土曜日に東洋大学で非常勤講師をしていますので、人文書にかんして学生たちにアンケートを取ってみました。今日はそれをもとにお話しさせ

ていただこうと思います。

これはたまたまその日の授業に出てきた二四人の学生にアンケートしただけなので、統計的な意味とか、そういうのは全然ありません。ただし、結果をみてみると、今の大学生というものの非常に平均的なありようが、ここからイメージできるんじゃないかなと思つています。私が普段接している感じからもそう思います。

最初の設問は、「あなたは人文書という言葉を知っていますか？」というのですが、これは結構ショッキングな結果で、「知っている」というのはたったの一人です。「聞いたことがある程度」というのでも、八名。普通の人にとっては、人文書という言葉はやっぱり業専門用語なんだなあと改めて思いました。こういう認識も結構大事なんじゃないかと思ひます。それから、「人文書を出している出版社で思ひ浮かぶところを挙げてくださーい」という設問で、これは案の定回答なしがほとんどだったんですけれども、筑摩書房がめでたく二名。それから幻冬舎、新潮社、岩波書店といったところ。というわけで、目の前に平凡社の人間がいるというのに、残念ながら平凡社が出てこない（笑）。私が平凡社で働いてい

るっていうことは、最初に自己紹介してるんですけれど……。最後に、「あなたは人文書を何冊持っていますか」。これはご覧のように〇冊が圧倒的なんです。ただ、これも認識の違いで、たぶん何冊かは持っているはずなんです。私が授業しているのは社会学部のメディア・コミュニケーション学科ですから、いわゆるメディア論とかマスコミ学みたいなものはいろいろ習っていますし、そのテキストや参考書、そういったものは読んでいるはず。実際、文章を書かせるとそういう本の話題が出てきたりもします。ただ、それが人文書だという認識がないんですね。実際全然持っていないんじゃないかと、この本が人文書だという意識を持っていない。

というわけで、ここからある程度、今の学生あるいは若い人たちの実態を読み取れるのではないかと思います。そこでつい言いたくなるのが、やっぱり最近の若い者は本を読まない、という決まり文句です。難しいものは余計に読まないとか、あるいはモノを考えなくなっているんだっていう世代論的な悪口をつい言いたくなってしまうんですけれども、これはちょっと違うんじゃないか。というのも、実際に生の学生たちと接していると、現在

の学生たちが総体として知性が劣っているとか、意欲が減退しているとかそういうことはないんですね。たとえば、文章を書いてもらうとなかなかセンスがあったり知性を感じさせるようなものを多くの人が持っています。それから趣味やサークル、学校の授業などにおけるいろいろな表現活動みたいなことですね。たとえば、小説を書いたり写真を撮ったり、バンドやアカペラで音楽活動をしたり、それからメディア学科ですから、テレビ番組を見せてもらうと、NHKスペシャルとまではいかなければ、でも、地方制作のドキュメンタリーぐらいじゃないかっていうのを一人で企画して取材・撮影・編集して作ってしまうような人もいます。そういう表現活動みたいなところにはすごく能動的に向かうんですね。その意欲とか知性というのは、センスも含めてなかなかのものがあるなあというふうに私は思っています。

ただ、その知性が本を読むというところに向かわなくなっているんですね。今の学生は見て思うのは、かつてと違って、「知的な背伸び」をほとんどしなくなってきたということです。少なくとも、学術的なものとか、本を読

むとか、そういうところに關しては、ものすごくつましくなっています。私はものを知りませんとか、あまり自信がありませんというようなことを言うし、実際そう思っているし、かつそれでいいと思っている。ある意味で非常に素直で率直なんです、知的に格好つけるっていうことがあります。いわゆる教養的な部分でものを知らないっていうことを、あまり恥ずかしがらないんですね。そういう傾向があると思います。

知的な背伸びをする、そういうメンタリティーが文化としてないと、難しい本なんてなかなか読まないわけですね。私もそうですけれども、難しい哲学書とか、思想書とか、今読んだってよくわからないものが沢山あります。学生の時はなおさらですね。でも、かつては難しい本を読むことが非常に格好良いことであり、価値があることだった。だから、わけがわからなくてもけっこう一生懸命読んでいたわけですね。それが、たぶん八〇年代のニューアカぐらいで終わって、九〇年に入るとなんかくるっと転換して、人文的教養の在り方っていうものが変わってしまった。教養パラダイムから情報パラダイムへ九〇年代初めぐらいに変わった、というようなことが

よく言われますが、そのような転換がどこで起こった。このアンケートを取って、なるほど、たしかにそういうことはあるかも、と改めて実感しました。しかし、それが現実なら、まずはそういうところから我々が、企画とか編集とか、あるいは書店さんならどう棚を作ってどう本を売っていくか、そういった活動を考えていく必要があるのではないかなと思います。

そういう認識を持った上で、どういうふうにものを考えていけばいいのか。まず少なくとも、今の学生や若年層にとつて、形としての人文書という枠組みは、ほぼなくなってきたいるんじゃないかなと思います。学生と接していて、それは非常に実感できます。私は別にテキストにもとづくような授業をしているわけではないんですけど、この子たちに三〇〇〇円も四〇〇〇円もするようなでっかい本はとも買わせられないよな、というのは本当に実感として持ってしまいます。こういう純粹無垢な人たちに、そんなに高い本を買わせられない、なんか悪い（笑）、という感じです。でも人文書を根本から考えてみたら、別に形が決まったものではないと思うんですね。ハードカバーで、ある程度分厚くて、文字も

ぎっちり詰まっっていて、安くて二〇〇円台、普通は三〇〇円以上という、それが形としては人文書の現実にはなっているかもしれないけれども、本質はそういうことではないと思うんですね。やはり人文書的に読まれ、使われるものこそが人文書だと思うんです。つまり、形態としての人文書というよりも機能としての人文書。読書という行為、あるいは勉強するとか議論のネタにするとかいった具体的な行為の構造の中で、そういった動的なプロセスの中で、ある一定の役割を果たすものが、人文書ではないかなと思います。

ということで考えると、今の現実では、少なくとも学生たちにとっての人文書というのは、これはもうはっきり新書や文庫です。あるいはNHKブックスとか、そういった薄手の本ですね。もちろん重くて硬い本も大事ですけれども、そういうのはなかなか読まれない。しかし、繰り返し言えばこれは学生のリテラシーが下がっているというふうに考えるのではなくて、リテラシー自体のあり方が変わっているんだととらえるべきです。あるいは人文とか教養といったものの位置づけそのものが社会の中で変わっている。そのことを認識したうえで、どう人文書

を提示していくか。単純に安くて薄いものを出せばいいということでもないと思いますが、我々が企画編集するレベルでも考えなくていけないし、書店さんで売りたいだくうえでも考えていかなきゃいけないということが一つ。もう一つは形態としては人文書ではなくても、機能としては十分に人文書だっているものを我々も企画し、作っていく。そして書店店頭でのプレゼンテーションをお互いに提案しながら模索していくというのが、現実から始まる生産的な考え方じゃないかなと思います。吉武 ありがとうございます。最後になりますが、東京大学出版会、第一編集部長の山田さん、お願いいたします。

山田 はじめまして。東京大学出版会の山田と申します。今日、壇上に並んでいらっしゃる方の出版社と比較しての我が社の特徴は、名前の通り、学術書を出している出版社ということでした。人文書というよりは学術書をメインにしています。さらに、私自身は法律を中心とした社会科学の本を作っていますので、人文書という点からしますと外野席にいる立場でして、いまこういう本を手掛けているとか、こんなテーマが流行りそうだとかは言

えないのですが、人文書を読むことは好きですので、いわば人文書のファンとして、人文書の世界がどう見えているのかというのを申し上げつつ、考えていることをご紹介していきたいと思っています。

人文書に関して私がずっと不思議に思っていることですが、この人文書というカテゴリーが、ある種日本独特なものじゃないかなという気がしております。例えば、昨日の紀伊國屋書店新宿本店の吉田さんが、じんぶんやというコーナーを紹介してくださいましたけれども、これを見ていますと、いろいろなテーマが入っている。人文書、英語で言えばヒューマニティーですが、この分野で括られるものとしては、普通、哲学・思想や文学あたりになるんですが、たとえば昨日の「じんぶんや」のフェアを見ていますと、人文とは言いまして、平和について考えるなど、いわゆる社会科学系のものがほとんど入っています。この人文書、あるいは人によっては教養書というふうに呼ばれる方もいるかもしれませんがけれども、この一つの枠の中にいろいろなものを入れ込んできた。この空間は他にあるのかなあというのが、素朴な疑問です。他と申しますのは、例えば日本以外のどこ

かであるのかなあというのが、常々、疑問に思っているところです。人文書というカテゴリーで、ジャンルの違う本がひとつの平台に並べられているということは、なかなかないんじゃないかと。しかも諸外国は、ものすごく安いペーパーバック版みたいなのと、専門書・学術書みたいなものが、価格もかなりはつきり分かれていて、専門書のようなものは七〇〇〜八〇〇円、一万円ぐらいはざらですし、安いものはペーパーバックで一〇〇〇円ぐらいで買えるようになっていて、中身もはつきり区別されているような印象があるのですが、日本の人文書と言われているものは価格的にはなかなか中間のあたりに位置しているわけですし、中身についても専門的な内容を分かりやすく伝える中間的な存在であるわけです。読者対象として、一般読者っていうのはなかなか捉えどころがないんですが、大学生あるいはプラスアルファの、いわゆる教養を身につけたいと思っている人に対して訴えかけている。そういう意味では、非常に中間的と言いますか、これは非常に特殊な入れ物じゃないかな、というふうに考えています。

しかも書店では、その人文書に何とか注目してもらえ

るよう、あるいは多分野の本を手を持ってもらえるよう、昨日の東大出版会の橋元さんの話ではないですが、横に広がりを持たせるようなかたちでディスプレイされてきた。このあたりもなかなかユニークな取り組みだったと思います。違う分野の本を領域横断的に組み合わせることで読者に幅広い関心を持ってもらおうとする、こういった取り組みを、今まで書店さんはされてきたと思います。先ほど小林さんからお話がありましたリプロ池袋店。ここはある種の輝きを放っていました。私も、ここに行けば何か面白いことがあるんじゃないかと、店に行くときは胸が弾みました。たとえばコンサートがはじまる前のような、あるいは野球を観に行くときの球場に入る前のような感覚ですね。何かがあるんじゃないかとわくわくするような空間。この雰囲気のリプロ池袋店は持っていたと思いますし、私なんかもリプロさんにだいぶ育てていただいたと思います。この職業に就いているのは、やっぱりそういう経験があったからだと思うときがあります。私はよく書店に行きますが、書店に行ってわくわくする雰囲気はどうやって味あわせていただけるかっていうのは、常に期待しつつ楽しみにしています。

いまして、先ほど申し上げました紀伊國屋書店のじんぶんやさんですね。新宿にプライベートで行ったときも、必ず五階まで上がって行って、いま何が行われているのか、どういう本が並べられているのかをチェックして、ああこういう本がこういうつながりで置かれているんだなということ、たびたび教えていただいています。あるいは私の好きな本屋と言いますと、神田神保町にある東京堂書店です。ここは立花隆さんが最真にいらつしやることもありまして、二階には立花さんのコーナーがあります。東京堂書店さんを見ますと、スペースはそれほど広くありませんので、二階や三階は、普通にジャンルごとに区分けして、他の書店と同じようなディスプレイがされていますが、一階がややちょっと不思議と言いますか、新刊をメインに置いてらつしやるんですけれども、なんでこの本とこの本が並んでいるんだろうと言いますか、なんでそれほど大きくないスペースの中に、この本とこの本を置いているんだろうと、不思議に思うときがあります。しかもなかには、新刊と言いますが、刊行からかなり経っても、そのまま置いてある本もある。これはなぜなのか、意図があつてのことなのか、

あるいはたまたまそうなっているだけなのか、分かりませんけれども、どんな棚を見せてくれるんだろうかと期待してお邪魔しています。棚を見ているうちに、つい買い買ってしまうこともありますね。目的買いで、この本がほしいという時は、それを置いてある本屋であればどこでもいいので、一番アクセスしやすい書店に行くんですけど、趣味としての読書もさることながら、やっぱりこういう職業をやっていると、仕事のヒントになる、あるいは意外な発見っていうものも、どこか欲しいと思います。そうなると、やっぱりついわくわくさせられるような書店なんか足を運んでいます。

さきほど申し上げましたように、東大出版会は、刊行点数としても学術書が一番のメインになりまして、その次は教科書、最後に人文書あるいは教養書という順にきますけれども、なかなか教養書が伸びていかない。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、東大出版会では、UP選書というクリーム色の選書を出していましたが、いま新刊は出していません。なぜかと申し上げますと、やはり選書である以上、一〇〇〇円台程度の、安い定価をつけないと読者は買ってくれないだろう、た

だ安い定価をつけるとなると、初刷の部数はそれなりの、たとえば五〇〇〇部など大きな数が必要になる、しかしそれだけの部数はなかなか売れないし、逆に言えば大部数が売れる商品をなかなか作れない。選書のたぐいの場合、やはり定価が先にありきという発想になりがちです。で、安い定価をはじき出せる部数を、すなわち大量の部数を作る。そうすると在庫が積み重なって、結局なかなか思うように回転していかなくなったようです。これはうちの編集体制の問題もあると思いますが、今まで同じように作っていて五〇〇〇部売っていたものが、ある時から売れなくなったというのは、やはり読者の変化というものも大きいのではないかな、というふうに思います。

そのなかで私がどういうことを考えているかということになりますけれども、ひとつテキストというものがあります。これは東大出版会の柱でして、毎年一万部以上出るものもあれば、一〇〇〇部、二〇〇〇部のものもある。一〇〇〇部、二〇〇〇部という数をどう見るかですけれども、これなかなか馬鹿にできない数字です。順調に版を重ねているものもあります。先ほど、筑摩の磯さ

んから、新書の中でも『何とか入門』のような入門的なものは、足は遅いけれどもロングセラーとして、筑摩新書の基盤を支えていらつしやるというお話がありました。あるいは昨日お配りいただきました竹内洋先生の、『社会学の名著30』のような、体裁は新書のかたちを取っていますけれども、中身は半分テキストというか、要するに、全体を俯瞰すると言いますか、全体をざっくり捉えるかたちでオーバービューできる概説のようなものとも言えます。こういうものをどうやって開発していけるかということが大きな課題になっていると思います。たとえば、私が編集したわけではありませんが、東大出版会で『日本美術の歴史』という本を出させていただきました。これは非常によく売れています。この本について、たまたま知人から感想を聞く機会があったんですけど、一つ一つの美術、たとえば伊藤若冲でもいいですし、尾形光琳でもいいですけど、そういう一つ一つの美術のトピックについては教養書や新聞・雑誌などで知っていたが、果たして全体がどうなっているのかなということ、ある時知りたいと思ったそうです。ちよつとは知識を持つている方が、全体の流れがどうなっているのかそ

れを知りたいと思った時に、それが分かりやすく、しかも面白く書かれている概説書は、非常にためになると思っています。この本もテキストとしてカテゴリー化できるのですが、同時に、朝日新聞の『論座』の人文書読書アンケートに挙げられていたことが示すように、ある種の人文書ではないかと思えます。同じような例が、昨年私が作りました、『法思想史講義』という本です。これは一見ガチガチの教科書で、A5判の上下巻でそれぞれ三五〇頁と四〇〇頁と厚いですし、本体価格も三六〇〇円と三八〇〇円と高いです。もともとテキストのつもりで早稲田大学の先生に執筆していただいたのですが、実際の読者は多岐にわたりました、テキストの採用はたかだか一〇〇とかそれぐらいなんです。ところがこれは刊行から一年経ちましたけど、初刷の三〇〇〇部がほぼなくなろうとしています。これだけ高額の商品をなぜ買ってくれるのか、たとえば東京国際ブックフェアの反応によりますと、一般の方が買ってくださった。会場で一〇冊ぐらい売れたそうなんですけれども、必ずしも読者はもともと想定していた大学生に限らない、教養を求めている一般の人たちなのです。そういう人たちが、ある時に、

全体を知りたいと思った時に、こういう内容がありますよ、こういうコンテンツがありますよというかたちで提供したいと考えておりますし、教科書と人文書というカテゴリーの境界を少しずつなくしていきたいと考えています。もちろんそのためにやらなければいけないことは、いくつもあります。さきほどの『日本美術の歴史』のように、内容的に分かりやすく、読んで面白いものにすることはもちろんですが、たとえば教科書と言いますとなんかやばったい装丁で、読者の手に取ってもらえるのを拒んでるとは言いませんけれども、閉ざしてしまっているようなものを、ちょっと雰囲気を変えてみるなどの工夫により、違和感なく受け入れられるようにも思います。人文書とテキストの共存関係を作ることににより、地に足のついたかたちでの教養というのを提供できると考えています。そのためにやらなければいけないことはいろいろありますけれども、私としてはそういう方向性も模索してみたいと思っています。

最後に、今後の人文書を考える際のヒントを、今回のイベントのなかでいただきましたので少しお話ししたいと思います。昨日、竹内洋先生に、講演のあと一階ロビ

ーでご挨拶させていただきました。その際、先生に「これからの教養を考える時のヒントになるものはありますか」と質問をさせてもらいました。というのは、竹内先生が今年の八月一七日の朝日新聞で、教養についてお書きになっていましたが、そのなかで、いままでのような「読書量を誇る「りけらかし」系の旧制高校生的教養主義は、これからの教養のモデルにはなりにくいだろう」というくだりがあつたものですから、逆にどういう教養がありうるんですかということをお伺いさせていただいたんです。先生は、「自分の言葉で考えて語っているかです。たとえば阿部謹也さん。なぜあれほど影響力を持ったのでしょうか。それはやはり、自分の頭で考え、自分の言葉で語っているからです」というようなことを言われました。これからの教養というのは、横のものを縦にしたとか、あるいは難しい学説や最新の理論を自身のなかで消化せずにそのまま書いてみた、ということではだめだということだと思います。自分自身の目で見て、感じて、考えたこと、そこから発せられる言葉が新しい教養として読者に届くと思いますし、そういうかたちで自分の言葉から発せられた本こそが、新しい教養と

して流通していくんじゃないかと思ひます。私自身は、教養書や人文書を作る機会はほとんどありませんが、先ほど申し上げましたような私たちの、全体をオーバービユーするような作品を作っていくときにも、やはりこのことは肝に銘じて、分かりやすく読者に提供していきたいと考えております。

吉武 今日の話が店に本が届いて、本を棚に入れる時、平台に並べる時のヒントになったり、つながりが生まれることができれば、またそのきっかけになれば、今回のパネルディスカッションは良かったと思ひます。最後に、今日お越しいただいたパネラーの方にお礼を申し上げて、第三部を終わりにしたいと思ひます。ありがとうございます。

◆人文会 40 周年記念東京合同研修会「人文書の可能性を探る」第 2 日目第 3 部：報告「人文書の最前線」

◎編集＝〈分かつ／結ぶ〉わざの 5 つの舞台。人・本・棚・街・国・星

1) 本をつくることばかりが編集なのではない。棚づくりも編集である。

* 選書協力 (1) ブックフェア

- 90 年代前半：「天使」フェア@リプロ池袋店（現池袋本店）
- 90 年代後半：「カルチュラル・スタディーズ」フェア@紀伊國屋書店チェーン
- 00 年代前半：「人文社会系洋書」フェア@三省堂書店神田本店（現神保町本店）
- 00 年代後半：「中野幹隆という未来」フェア@ジュンク堂書店新宿店、池袋店、京都 BAL 店

* 選書協力 (2) 新規棚

- 90 年代後半：「人文文庫棚」@紀伊國屋書店新宿本店
- 00 年代前半：「人文洋書棚」@ジュンク堂書店池袋本店
- 00 年代後半：「反戦平和棚」@ジュンク堂書店新宿店

* 書店の未来像を想像する→「エコ書店論」

* 棚編集の系譜 (1) 今泉棚～劇場書店論～棚編集@アンテツ

- 80 年代～90 年代前半：小川道明『棚の思想』90 年、影書房/田口久美子『書店風雲録』03 年、本の雑誌社。
- 90 年代後半～00 年代：福岡聡『劇場としての書店』02 年、新評論/『希望の書店論』07 年、人文書院。
- 01 年：『本屋はサイコー!』安藤哲也（往来堂書店、bk1、楽天ブックス）、新潮社 OH! 文庫。

* 棚編集の系譜 (2) ジュンク堂～書原～「編集者」魂

- 06 年 9 月『書店繁盛記』田口久美子（ジュンク堂書店）著、ポプラ社。
- 07 年 3 月『書店ほど楽しい商売はない』上村卓夫（書原）著、日本エディタースクール出版部。
- 06 年 8 月『きょう、反比例』竹井正和（怪書房～リトルモア～フォイル）著、FOIL。

2) 本を通じて本の外を編集する。街づくりは編集である。

* ブック・コーディネーター：本屋ではない場所に本棚をつくる。生活のあらゆる場所に本を。

- 安西洋一（1967-）：メックス/ハックネット（ビジュアル洋書専門店、代官山）<http://www.hacknet.tv/>
- 江口宏志（1972-）：ユトレヒト（予約制書店と洋新刊古書、中目黒）<http://www.utrecht.jp/>
- 幅允孝（1976-）：パッハ <http://www.bach-inc.com>
- 内沼晋太郎（1980-）：numabooks <http://numabooks.com/>

05 年『本屋さんの仕事（太閤レクチャーブック 005）』平凡社。

* 交流の場をつくる。駅前開発に抵抗する。

気流舎（対抗文化専門カフェ古書店、下北沢）<http://www.kiryuusha.com/>

04 年『本屋さんになる!』メタローグ

05 年『ブックカフェものがたり』幻戯書房

* 店の思想

松岡正剛「店々抄」、「遊」78 年 10 月号所収、工作舎。「21 世紀は店が問われる世紀となろう」。

3) 地域貢献ばかりが編集ではない。文化を編むことは国づくりの基礎だ。

4) 国どうしもまた繋がっている。星のもとに文化を編み直しつづけよう。

5) 文化を編み直すこと、それは自分自身が変わること。

- * 表現者として、あるいは読み手として
- * 生きることと働くことをよろこびで結び直す

「本の真の実質は、思想にある。書店が売るのは、情報であり、靈感であり、人とかかわりあいである。本を売るとは、永久に伝わる一連の波紋を起こすことである。最初の波は本を読んだ人に伝わる。読者は本の内容を楽しんだり、利用したりする。ついで波は、真面目な議論や愉快な話として、ほかの人々に伝わっていく。本の真の実質は、読者に対する人生上の影響にあるのである。／書店は、書棚に魔法を満たすことも、嵐を吹かせることもできる。歴史小説は、読者を真実の探検に送りこみ、読書による体験をあたえる。旅行書は、実際にそこへ行く以上に場所の感覚を盛りこんでいる。詩は深いものの見方と洞察を人にあたえる。書店人は、人々を日々の抑圧から解放し、楽しみ、希望、知識を人々に贈るのである。書店人が、特別の人間でなくてはならぬ」（ロバート・D・ヘイル「書店人とは?」、『書籍販売の手引——アメリカ書店界のバイブル』(米国書店組合連合会編、豊島宗七訳) 所収、日貿出版社、1982 年、xix 頁)。

◆哲学：philosophy …… philia（愛）+sophia（知）。古代ギリシアから西洋現代に至る。

◆思想：thought …… 考え、思考、思索。

細分化され体系化された近代以後の「哲学」の枠組みをはみ出るもの。

※70年代以降顕著になった呼称「現代思想」。月刊誌「現代思想」創刊は1973年。

実存主義：（生没年、分野、初訳単独著単行本（刊行年は西暦）、最新刊）

ハイデガー（1889-1976）哲学。「形而上学とは何ぞや」30年、理想社出版部／『アリストテレスの現象学的解釈』08年、平凡社）

ヤスパーズ（1883-1969）哲学。「現代の哲学的考察」46年、三笠書房／『シェリング』06年、行人社）

マルセル（1889-1973）哲学。「存在と所有」57年、理想社／『マルセルにおける人間の研究』80年、明星大学出版部）

サルトル（1905-1980）哲学。「水いらず・壁」46年、世界文学社／『家の馬鹿息子（3）』06年、人文書院）

構造主義：

レヴィ＝ストロース（1908年生まれ。文化人類学。「構造人類学」72年、みすず書房／『神話論理』06年～、みすず書房）

アルチュセール（1918-1990）政治思想・社会思想。「醜悪のマルクス」68年、人文書院／『再生産について』05年、平凡社）

ラカン（1901-1981）精神分析。「エクリ」全3巻、72-81年、弘文堂／『セミナール』87年～、岩波書店）

ロラン・バルト（1915-1980）文学研究・文芸批評。「零度の文学」65年、現代思潮社／『著作集』03年～、みすず書房）

ポスト構造主義：

フーコー（1926-1984）文化史・思想史。「狂気と文化」69年、合同出版／『講義集成』02年～、筑摩書房）

ドゥルーズ（1925-1995）哲学。「マゾッホとサド」73年、晶文社／『シネマ1』08年、法政大学出版局）

ガタリ（1930-1992）反精神分析。「分子革命」88年、法政大学出版局／『カフカの夢分析』08年、水声社）

デリダ（1930-2004）哲学。「声と現象」70年、理想社／『シニエボンジュ』08年、法政大学出版局）

雑誌特集：84年まで（誌名、刊行年、特掲名、編集者名、創刊・終刊年）

『バイディア』72年春号「（思想史）を超えて——ミシェル・フーコー——中野幹隆（1943-2007）68-73年

『現代思想』75年3月「デリダ——現代フランスの思想」三浦雅士（1946-）73年～

『エビステメー』77年10月臨時増刊号「リゾーム」ドゥルーズ＝ガタリ著・中野編集長。75-79年

『現代思想』78年6月号「ミシェル・フーコー」三浦編集長

『現代思想』81年8月号「記号論の展開」三浦編集長

『現代思想』82年3月臨時増刊号「デリダ読本」豊崎光一・清水康雄編集

『現代思想』82年12月号「ドゥルーズ」清水編集長

『理想』83年1月号・2月号「記号論」座談会：田島節夫×川本茂雄×久米博×今村仁司（1942-2007）27年～

『思想』84年4月号「構造主義を超えて」（デリダ、フーコー、ほか）21年～

『理想』84年8月号「フランスの哲学」座談会：浅田彰×谷川渥×篠原真明

『現代思想』84年10月臨時増刊号「ドゥルーズ＝ガタリ」清水編集長（歌田明弘1958-）

『現代思想』84年10月号「フーコーは語る」

『理想』84年11月号「デリダ」

『別冊宝島』84年12月「わかりたいあなたのための現代思想・入門」小阪修平（1947-2007）ほか

単行本：80年代「ニューアカデミズム」とポストモダン論

『フーコー・ドゥルーズ・デリダ』78年2月、朝日出版社。運実重彦（1936-）

『パッツをはいたサル』81年4月、光文社。栗本慎一郎（1941-）

『隠喩としての建築』83年3月、講談社。柄谷行人（1941-）

『構造とカー——記号論を超えて』83年9月、勁草書房。浅田彰（1957-）

『チベットのモーツァルト』84年6月、せりか書房。中沢新一（1950-）

『ポストモダンの条件』ジャン＝フランソワ・リオタール（1924-1998）著、原著79年、訳書86年、岩波風土の薔薇（水声社）。『ハーバーマスとリオタール』マンフレート・フランク（1945-）著、原著87年、訳書90年、三元社。

『ポスト・モダニズムの建築言語』チャールズ・ジェンクス（1939-）著、原著77年、訳書78年、エー・アンド・ユー。

『ポストモダン叢書』朝日出版社。全22巻：84年7月デュラス『死の病い・アガタ』～89年7月ビート『シンクロニシティ』

『「知」の欺瞞』ソーカル（1955-）+ブリクモン（1952-）著、00年、岩波書店。

※ 著者二名は、「ヌーヴォー・フィロゾフ（新哲学派）」の首領ベルナル＝アンリ・レヴィ（1948-）や、アラン・ルノー（1948-）、

リュック・フェリー（1951-）らと同世代。この世代は先行世代への大膽な批判を特徴とする。

◆批評：criticism …… kritikos（ギリシア語）：判別・判断・見分け。

従来は文学研究、文学理論、比較文学、文芸批評、評論一般……と文芸書売場にあった。

デリダの脱構築がアメリカの文学理論に応用される。認知は80年代後半～

→『脱構築と批評』（米國、未訳、79年）：イェール学派「四天王」+デリダ。

→ボル・ド・マン（1919-1983）、J・ヒリス＝ミラー（1928-）、ジェフリー・ハートマン（1929-）、ハロルド・ブルーム（1930-）。

→『現代思想』85年8月号「ディコンストラクション」、「文学部唯野教授」（筒井康隆、90年、岩波書店）

カルチュラル・スタディーズ（文化研究）、ポストコロニアル・スタディーズ。認知90年代後半～

→米國：エドワード・サイード（1935-2003）、ガヤトリ・スピヴァク（1942-）、ホミ・バーバ（1949-）、レイ・チョウ（1957-）、等。

→英國：レイモンド・ウィリアムズ（1921-1988）、ステュアート・ホール（1932-）、イェグルトン（1943-）、ゲルロイ（1956-）、等。

◆「空白の 90 年代」「失われた十年」「バブル崩壊以後」「平成不況」に何があったか。

1986 年 12 月 - 1991 年 2 月バブル景気

1991 年 4 月：季刊「批評空間」創刊、編集委員：浅田彰＋柄谷行人

1992 年 4 月：季刊「InterCommunication」創刊、編集委員：浅田彰＋伊藤俊治＋武邑光裕＋彦坂裕

1994 年 4 月-96 年 7 月：東大出版会教科書「知の三部作」、編者：小林康夫＋船曳建夫

1996 年～：「カルチュラル・スタディーズ」の積極的輸入

雑誌：

『思想』96 年 1 月号「カルチュラル・スタディーズ」

『現代思想』96 年 3 月号「カルチュラル・スタディーズ」

『実践カルチュラル・スタディーズ』ホールほか、00 年 2 月、大修館書店

『状況』99 年 5 月号「文化における階級闘争——カルチュラル・スタディーズの現在」

『言語』00 年 3 月号「カルチュラル・スタディーズとは何か」

単行本

『カルチュラル・スタディーズ入門——理論と英国での発展』ターナー、99 年 5 月、作品社

『カルチュラル・スタディーズとの対話』99 年 5 月、新曜社

『実践カルチュラル・スタディーズ』ホールほか、00 年 2 月、大修館書店

『カルチュラル・スタディーズ入門』上野俊哉 (62-) ＋毛利嘉孝 (63-)、00 年 9 月、ちくま新書

『カルチュラル・スタディーズ』吉見俊哉 (57-)、00 年 9 月、岩波書店

『カルチュラル・スタディーズ』吉見俊哉：編、01 年 4 月、講談社選書メチエ

『カルチュラル・スタディーズへの招待』本橋哲也 (55-)、02 年 2 月、大修館書店

『実践カルチュラル・スタディーズ』上野俊哉 (62-) ＋毛利嘉孝 (63-)、02 年 5 月、ちくま新書

◆2001 年以後、「911 以後」、「ゼロ年代」へ（仮説、整理中）

◎戦後日本の思想輸入情況の大雑把な俯瞰（思想と文化の輸入はしたが、人材は集めなかった）

戦前から 50 年代：ドイツ実存哲学、フランス実存主義。

60 年代から 70 年代：フランス構造主義、ポスト構造主義、欧米批評理論。

80 年代から 90 年代前半：ニューアカデミズム、ポストモダニズム、記号論、(ニュー・サイエンス)。

90 年代後半～：カルチュラル・スタディーズ、ポストコロニアル研究、ナショナリズム研究。

00 年代前半～：アメリカ現代政治思想、イタリア現代思想、ゼロ年代の書き手たち（1970 年代以後生まれ）。

アメリカ現代政治思想（英米語で著述する、影響力の強い思想家を含む。初訳単独著単行本／最新刊（改訂版や文庫化は除く））

★キーパーソン（主に反グローバリゼーション、反ネオリベリズム）

ハンナ・アーレント（1906-1975）政治哲学。『革命について』88 年、合同出版／『政治の約束』08 年、筑摩書房）

ジョン・ロールズ（1921-2002）政治哲学。『正義論』79 年、紀伊國屋書店／『万民の法』06 年、岩波書店）

スーザン・ストレンジ（1923-1998）国際政治経済学（英国）。『カジノ資本主義』88 年、岩波書店／『マッド・マネー』99 年、岩波）

ジグムント・パウマン（1925-）社会学（ポーランド／英国）。『社会学の考え方』93 年、HBJ 出版局／『新しい貧困』08 年、青土社）

ノーム・チョムスキー（1928-）言語学。『文法の構造』63 年、研究社出版／『チョムスキー、アメリカを叱る』08 年、NTT 出版）

I・ウォーラーズテイン（1930-）社会学。『大学闘争の戦略と戦術』69 年、日本評論社／『ヨーロッパの普遍主義』08 年、明石書店）

スーザン・ソントガ（1933-2004）作家。『ハノイで考えたこと』69 年、晶文社／『良心の領界』04 年、NTT 出版）

アマルティア・セン（1933-）経済学。『不平等の経済理論』77 年、日本経済新聞社／『議論好きなインド人』08 年、明石書店）

スーザン・ジョージ（1934-）政治学。『なぜ世界の半分が飢えるのか』80 年、朝日新聞社／『アメリカは、～』08 年、作品社）

デヴィッド・ハーヴェイ（1935-）地理学。『地理学基礎論』79 年、古今書院／『ネオリベリズムとは何か』07 年、青土社）

マイク・デイヴィス（1946-）社会批評。『要塞都市 LA』01、08 年、青土社／『自動車爆弾の歴史』07 年、河出書房新社）

スラヴォイ・ジジェク（1949-）哲学・精神分析。『斜めから見る』95 年、青土社／『ロベスピエール／毛沢東』08 年、河出文庫）

フランシス・フクヤマ（1952-）政治学。『歴史の終わり』92 年、三笠書房／『アメリカの終わり』06 年、講談社）

ヴァンダナ・シヴァ（1952-）環境運動。『生きる歓び』94 年、築地書館／『アース・デモクラシー』07 年、明石書店）

ジェンダース・バトラ（1956-）ジェンダー理論。『ジェンダー・トラブル』99 年、青土社／『ロベスピエール／毛沢東』08 年、月曜社）

マイケル・ハート（1960-）政治思想。ネグリとの共著：『ディオニュソスの労働』『（帝国）』『マルチニョス』）

アンゲルディ・ロイ（1961-）作家（インド）。『小さきものたちの神』98 年、DHC／『誇りと抵抗』04 年、集英社新書）

ナオミ・クライン（1970-）ジャーナリスト（カナダ）。『ブランドなんか、いらない』01 年、はまの出版）

★入門書（リベリズム、リベタリアニズム、コミュニタリアニズム）

『集中講義！アメリカ現代思想』仲正昌樹（1963-）著、08 年 9 月、NHK ブックス。

『追跡・アメリカの思想家たち』会田弘経（1951-）著、08 年 9 月、新潮選書。

イタリア現代思想（政治、哲学、美学を横断）

★キーパーソン（人名、生年、初版単独著単行本/最新刊）

マリオ・トロントディ（1931-）単独著未訳

ウンベルト・エーコ（1932-）『記号論』全 2 巻、80 年、岩波書店／『セレンディピティ』08 年、而立書房。

アントニオ・ネグリ（1933-）『構成的権力』99 年、松籟社／『未来派左翼』全 2 巻、08 年、NIKK ックス。

ジャンニ・ヴァッティモ（1936-）単独著未訳

マリオ・ベルニオーラ（1941-）『エニグマ』99 年、ありな書房。

ジョルジョ・アガンベン（1942-）『スタンツェ』98 年、ありな書房／『例外状態』07 年、未來社。

マッシモ・カッチャーリ（1944-）『必要なる天使』02 年、人文書院。

BIFO：フランコ・ベラルディ（1949-）単独著未訳

ロベルト・エスポジト（1950-）『政治の理論と歴史の理論』86 年、芸芸出版。

クリスチャン・マラッツィ（1951-）単独著未訳

パオロ・ヴィルノ（1952-）『マルチュエールの文法』04 年、月曜社／『ポストフォーディズムの資本主義』08 年、人文書院。

マウツィオ・ラツツアラート（1955-）『出来事のポリティクス』08 年、洛北出版。

★入門書

『イタリア現代思想への招待』岡田温司（1954-）著、08 年 6 月、講談社選書メチエ。

ゼロ年代（先行世代の激進的人物→20 年代：吉本隆明、30 年代：養老孟司、40 年代：柄谷行人、50 年代：浅田彰、60 年代：榎田和也）

★キーパーソン（人名、生年、デビュー作単行本）

荻野稔人（1970-）『国家とは何か』05 年、以文社。

浅尾大輔（1970-）雑誌「ロスジェネ」08 年 6 月～、かもがわ出版（発売）。

紙屋高雪（1970-）『オタクコミュニスト超絶マンガ評論』07 年 11 月、築地書館。

村浦由美子（1970-）『オタク女子研究 腐女子思想大系』06 年 3 月、原書房。

外山恒一（1970-）『ぼくの高校退学宣言』89 年、徳間書店。

小川てつオ（1970-）『このようなやり方で 300 年の人生を生きていく』05 年 8 月、キョートット出版。

東浩紀（1971-）『存在論的、郵便的』98 年、新潮社。

北田暁大（1971-）『広告の誕生』00 年、岩波書店。

森川嘉一郎（1971-）『趣都の誕生』03 年、幻冬舎。

前田埜（1971-）『小説の設計図』08 年 3 月、青土社。

西山雄二（1971-）『異議申し立てとしての文学』07 年 9 月、御茶の水書房。

廣瀬純（1971-）『美味しい料理の哲学』05 年、河出書房新社。

山本貴光（1971-）『心臓問題』04 年、吉川浩満（1972-）との共著、朝日出版社。

矢部史郎（1971-）『無産大衆神髄』01 年、山の手縁（1970-）との共著、河出書房新社。

星間賢（1971-）『ローカル・ミュージック』05 年、インスクリプト。

森直人（1971-）『シネマ・ガレージ』06 年 9 月、フィルムアート社。

保刈実（1971-2004）『ラディカル・オーラル・ヒストリー』04 年、御茶の水書房。

大谷能生（1972-）『貧しい音楽』07 年 10 月、月曜社。

加藤政洋（1972-）『大阪のスラムと盛り場』02 年、創元社。

城繁幸（1973-）『内側から見た富士通「成果主義」の崩壊』04 年、光文社。

栗田陸子（1973-）雑誌「フリーターズ・フリー」07 年 6 月～、人文書院（発売）。

速水健朗（1973-）『タイアップの歌謡史』07 年 1 月、新書 y（洋泉社）。

松本哉（1974-）『貧乏人の逆襲』08 年 6 月、筑摩書房。

田中和生（1974-）『江藤淳』01 年、慶應義塾大学出版会。

大谷雄裕（1974-）『法解釈の言語哲学』06 年 11 月、勁草書房。

平野啓一郎（1975-）『日蝕』98 年、新潮社。

雨宮処凛（1975-）『生き地獄天国』00 年、太田出版。

中島岳志（1975-）『ヒンドゥー・ナショナリズム』02 年、中公新書ラクレ。

杉田俊介（1975-）『フリーターにとって「自由」とは何か』05 年、人文書院。

赤木智弘（1975-）『若者を見殺しにする国』07 年 11 月、双風舎。

小林美希（1975-）『ルポ 正社員になりたい』07 年 5 月、影書房。

鈴木謙介（1976-）『暴走するインターネット』02 年 9 月、イーストプレス。

大澤信亮（1976-）『「ジャパニメーション」はなぜ敗れるか』05 年、大塚英志（1958-）との共著、角川 one テーマ 21。

増山題奈（1976-）『桃色ゲリラ』06 年、社会批評社。

川田龍平（1976-）『龍平の現在』96 年、三省堂。

阿部真大（1976-）『搾取される若者たち』06 年 10 月、集英社新書。

白井聡（1977-）『未完のレーニン』07 年 5 月、講談社選書メチエ。

貴戸理恵（1978-）『不登校は終わらない』04 年、新曜社。

宇野常寛（1978-）『ゼロ年代の想像力』、08 年 7 月、早川書房。

荻上チキ（1981-）『ウェブ炎上』07 年 10 月、ちくま新書。

安藤肇（1982-）『統治と功利』07 年 5 月刊、勁草書房。

後藤和智（1984-）『「若者論」を疑え!』08 年 4 月、宝島社新書。

★関連書

『アキハバラ発：〈00 年代〉への問い』大澤真幸ほか著、08 年 9 月、岩波書店。

『文化系トークラジオ life』鈴木謙介ほか著、07 年 11 月、本の雑誌社。

第四部 フリーディスカッション

人文書販売の未来を

デザインする

司会 華園 斉（創元社）

田崎洋幸（みすず書房）

華園 それでは第四部のフリーディスカッション「人文書販売の未来をデザインする」を始めます。司会は創元社の華園とみず書房の田崎です。どうぞよろしく願いいたします。

まず第四部の趣旨をご説明いたします。皆様事前にアンケートをお配りいたしましたて、ご回答いただきました。第三部まで色々な議論がございましたが、では実際に販売のテクニカルなところ、たとえばこの本をどうやって売るのが、どう返品するのか、どう選んでいくのか、といったことをお聞きになりたいのではないかと思うのです。もう一つは今、書店さんの同じ社内で、人文書の話をする、あるいは受け継ぐ、販売の話をするというところが、なかなかできにくくなっていて、いろいろお話をうかがうと、人文書を担当しているのですがまだ年数も浅いしよくわかりませんとおっしゃられる。会社やあるいは同僚から何のフォローも受けることができないという状況をたくさん聞いておりまして、これについて、この場で書店の垣根を越えて、若手の方から、あるいは経験の浅い方から疑問を出していただき、それをベテランの方、あるいは若手の方でも結構ですが、それに対し

て応える、というようなことで進めたいと思います。

というわけですので、司会というふうに名前はついておりますけれども、ただの進行でございますので、この会を作り上げるのは、皆様方でございます。ご了承をよろしく願います。

まずは、昨日のこと、あるいはさきほど（第三部）のことについて、ご意見がある方がいらっしやいましたら、どうぞ挙手をしていただきましてご発言ください。どんなか？ はいジュンク堂書店の福嶋さん。

福嶋聡 だいたい一人目に質問するというのは皆さん遠慮してやりづらいみたいなので、よく引き受けているのですが、あの、ぼくはね、せっかく月曜社の小林さんが来ているんで、第三部でのさっきの話を続きをもっと聞きたいと思うんですね。特にあの方の、イタリア現代思想を含め、あるいは日本人のキーパーソン、僕も親しくしている萱野稔人さんの名前がレジュメに出てくるのですが、今新しい人がたくさん出てきて、僕自身も今とつても読んでいて難しい、『権力と抵抗』というのを読んでいるんですが、これはバリバールの弟子である佐藤嘉幸さんが書いているんですが、小林さん、今、現代思



第四部の会場風景

想、フランス語、あるいはイタリア、あるいはアメリカを含めて、一番注目している、この人は実はブレイクするんだよ、というような人がいたら、ぜひ教えてほしい、そんな話をもう少し聞きたいなと思うのですが。

小林浩 レジユメで「ゼロ年代」「イタリア現代思想」「アメリカ現代政治思想」を取り上げていますが、それではまず、ゼロ年代の書き手たちについてお話しします。ゼロ年代の書き手というのは、一九七〇年以降の生まれで、二〇〇〇年以降にデビューした人たちのことです。象徴的な人物には、東浩紀さんですか、北田暁大さんなどがいます。ここ一〇年ほどでデビューした若手の本をきちんと棚で扱えれば、今後の論壇を担う世代を育てる場所が作れるわけです。僕が一番注目しているのは誰かというと、松本哉さんです。七四年生まれで、『貧乏人の逆襲』（筑摩書房）がデビュー作です。これがすごく面白い本なんです。教養がどうこうというハードルの高さはないです。今の生きづらい世の中をどう楽しくしてやろうかと、色々な活動に挑戦されていて、その挑戦が、従来の社会運動の知的系譜とは違うかたちで、図らずも反グローバリゼーションや反貧困の実践に繋がっ

ています。第二作目『素人の乱』（河出書房新社）もすでに刊行されていて、近々、第三作も出ますよね（『さよなら下流社会』ポプラ社）。三匹目のどじょうなんですけれども、それでもたぶんおいしいと思います。本当に面白いですから。デビュー作『貧乏人の逆襲』は、彼が法政大学で「貧乏くささを守る会」の活動をやっていう時代から、一人で放浪生活をして、しまいに高円寺で「素人の乱」というリサイクルショップを立ち上げるところまでを回想しています。半生記ですね。第二作『素人の乱』は、松本さんがショップの仲間たちと対談した本です。裏舞台も見える内容で、同じ著者の本ではありませんけれど、話が全くかぶっているというほどでもなくて、二冊とも買ったほうがむしろ面白いです。

人文書販売の現在のキーポイントとしては、まずゼロ年代の書き手を大事にすることだろうと思います。書店員さんでも書き手と同世代の方がいると思いますし、版元の編集者にも同世代がいますね。そこでたとえば、七〇年代生まれの編集者がつくっている本と、七〇年代生まれの書き手の書いた本と、それらの編集者や書き手が影響を受けた本などを全部集めてフェアをしたら面白い

と思います。編集者という切り口でフェアをやると案外受けるようです。近年、哲学書房の中野幹隆さんの追悼フェアを企画しましたが、ジュンク堂書店新宿店では大成功をおさめました。

日本の著者についてはゼロ年代を押さえておくことをお奨めしますが、海外はどうか。「アメリカ現代政治思想」と、「イタリア現代思想」が、今仕掛けるにはいいネタだろうと思います。と言いますのも、先月、仲正昌樹さんの『集中講義！アメリカ現代思想』（NHKブックス）と、会田弘継さんの『追跡・アメリカの思想家たち』（新潮選書）の二冊が出まして、二つともよくできています。巻末に年表とか参考文献とか有益な情報があつて、棚作りにはもってこいです。僕自身が薦めたいキーパーソンはレジュメに列記しましたが、上記二冊で挙げられているリベラル系の人物より、もっと政治的にラディカルな人たちです。チョムスキー、スーザン・ジョージ、ナオミ・クライン、等々。

イタリア現代思想については、岡田溫司さんが、『イタリア現代思想への招待』（講談社選書メチエ）という非常に見通しのいい本を書いていらっやいます。レジ

ユメに書いたキーパーソンの中には、未訳の人もありますけれども、おそらく今後翻訳されるだろうと思います。イタリア語ができる人文系の学者さんは少なく、なかなか本が出ないというのが実情でした。それでも、アガンベンのような注目の思想家の本が初めて訳されたのは、九八年でもう一〇年前の話ですから、この一〇年間のあいだで読者が増えてきたとすれば、イタリア現代思想を学んでみたいという若い人が増えていてもおかしくない。イタリア現代思想の面白さは、端的に一言で言いますと、歴史的な厚みがあるということです。考察対象にアプローチする際、古代ギリシアから西洋現代に至る歴史的背景への目配りがしっかりしています。そうした時間軸の深さに加え、空間軸にも広さがあります。地域を横断して、ヨーロッパ全体から色々な文化的系譜を引つ張ってくるんですね。カッチャーリが好例です。ヨーロッパのいいところ取り、それがイタリア現代思想の魅力だと思います。ドゥルーズ／ガタリやフーコーなどのフランス現代思想の巨匠だった人たちの成果を進化させる形で、それぞれ執筆をし、研究をしているというのが、イタリア現代思想の人たちです。なかでも今一番売れているのは

たぶん、ネグリだろうと思います。

華園 小林さん、ありがとうございます。福嶋さん、それを受けて、お応えすることがあれば。

福嶋 いろいろ参考になったと思います。ひとつだけ披露をしますと、ジュンク堂書店大阪本店で行った酒井隆史さんたちのトークの時に、イタリアっていうのは、実はローマ教皇がいるんだよっていうことを言われて、ああ、それでマルクス主義とカソリックが融合する、非常に稀有な場所なのかと、すごく僕は印象に残っているんですけど。今、おっしゃった、イタリアにはヨーロッパの思想全体に目配りができている書き手たちがたくさんいる。一方で今の日本には、イタリア語の翻訳できる人がなかなか、まだ今のところ少ないっていうことで、そのことがよくわかりました。ありがとうございます。華園 今の小林さんと福嶋さんのお話を聞いて、ご意見がありますか。

山田秀樹 先ほど（第三部）報告させていただいた、東京大学出版会の山田です。小林さんに質問ですが、人文書の今までの流れを踏まえつつ、これからどう考えていくかということにもよりますが、レジュメを見ている

と、アジア及び東洋に関する思想・哲学の紹介がないように思いました。今回はいろんな理由があつてお載せにならなかったのか、あるいは人文書としてくくられる中であえて外されたか、いかがでしょうか。と申しますのは、昨日ご報告いただきましたあゆみBOOKSの鈴木さん、こちらは「身体」をテーマとした書棚をおつくりになられているということでしたが、これはある意味、東洋やアジア的な思考の流れの中に位置づけられると思うのですけれども、これで売上部数的にもかなりの成果を出されているというお話でした。人文書というと、今までどうしてもヨーロッパの思想を紹介するかたちの議論が主だったと思うんですけれども、これからの人文書というものを考えるときに、アジアや日本、東洋というものをご考えていけばいいのか、私自身疑問に思っていますので、そのあたり小林さんのお考えをお聞かせいただければと思います。

小林 基本的に山田さんのおっしゃった通りで、私の作ったレジュメの中には日本以外のアジアのキーパーソンが入っていませんし、そのほかにも西洋思想でも、分析哲学系を挙げていないです。今回はそこまでフォローし

されませんでした。では、アジアについてどう考えたらいいのか。現状の哲学思想棚の主流である欧米思想の本の並びに、スパイスとしてアジアを添えるというだけにとどまらず、アジア思想棚を立ち上げていくのが、今後の大きな課題であることは間違いないですね。中国古典とその読解が中心となる従来の東洋思想棚とは異なる棚で、アジア全域をフォローする棚。

僕の営業経験では、どうやって欧米中心の棚にアジア的要素を盛り込ませていったかというところ、カルチュラル・スタディーズにおけるアジア系の書き手に注目することから始めました。アジア出身で、アメリカやイギリスで活躍したり英語で研究を発表したりする人たちがいます。例えば、ガヤトリ・スピヴァクやホミ・バーバなど、インド出身の学者たち。レジュメにはこうしたキーパーソンのごく一部を挙げておきました。レイ・チヨウは香港出身、スチュアート・ホールはジャマイカ出身、ギルロイはアフリカ系の血を引いています。

ヨーロッパ以外の様々な文化圏の研究をどう哲学思想棚に組み込んでいくかということについては、あくまでも僕自身の仮説なんですけれども、松岡正剛さんが編集

された『情報の歴史』（N T T出版）という本がヒントになると思います。この本は古代から現代に至るまでの世界史を年代で輪切りにしている年表で、東西文明を時代ごとの並行関係で見ることが出来ます。たとえば一三世紀の場合、西欧ではスコラ哲学が全盛だった時代には日本ではいわゆる鎌倉で新しい仏教が生まれていたというところが、世界的観点から、つまり星（地球）という観点から、見直せます。人文書の分類を刷新する上で、時代で区切って地域横断的な切り口を探していくことは案外重要です。今日のグローバルバリエーションの時代に対応して、地球規模で歴史を見直し、書棚を編集するという課題です。レジュメではそこまで書ききれませんが、それが、ですから、全く山田さんのご指摘の通りで、私自身の宿題として、今なお勉強しているところです。

華園 ありがとうございます。ここで議論を、最初のきっかけのところにまた戻させていただきます。鈴木さんから昨日報告されたこと、先ほど話にのびりました、新書と文庫ということですが、ご意見がございましたら、挙手をお願いします。

白川浩介 オリオン書房の白川と申します。人文書担当

になってまだ三ヶ月ぐらいの、本当にまだ右も左も分からないひよっこなんです、よろしく願ひいたします。文庫新書のところについて、先ほど田川さんが言われたことを聞きながら、ちょっと思いついたんですが、今、人文書だけじゃなくて、業界全体がどんどん薄利多売になっていると思います。僕はその象徴がやっぱり新書じゃないかなと思っています。で、先ほど筑摩書房の磯さんもおっしゃられていたんですが、棚が圧迫されていっている。それは一つには、出版点数がどんどん増えてしまっている。で、私が人文書の担当になって色々な方に言われたのが、人文書、専門書担当の使命というのは、客単価を上げることだよと言われたんですね。まあ、ある程度規模数がある書店に勤めていて人文書を担当するのであれば、どうやって少ない、少ないと言って失礼ですが、どんどん減少していく一方のお客様に多くのお金を支払っていただけるか、ということを考えなさい、というふうに言われまして、今日はそれについて何か、ヒントになることはないかな、と思ったら、新書で入門書を作りましょうというお話で、ちょっとガツカリしてしまっただんですが、話はまた全然違うんですけど、

以前『編集とはどのような仕事なのか』（鷲尾賢也著、トランスビュー）という本を読みまして、それは講談社の現代新書の立ち上げをなさった編集者の方がお書きになられたご本だったと思います。要するに、その当時の新書というのは、専門書への入口、入門書だよ、ということ、それで非常に成功したというお話を書いていて、なるほどな、と思ったんですが、一回それでダメになった新書がまた、それをやって成功して、それがまたうまくいかなくなって、別の雑誌出身の方が作られた新書が成功してというなかで、まだ新書がそういう入門的なものに戻っていくべきなのか。で、何が言いたいかというと、単行本で値段を一〇〇〇円前後にして、それで入門書を作るといのは本当に無理なことなのか。それだったら、単行本の棚でも素直に収まる。筑摩書房といえ、『高校生のための批評入門』とか、そういう素晴らしい本があるので、ああいう形を発刊させることは、本当に難しいのかということ、なんか筑摩書房の方は確かに聞くことになっちゃいますけれども、主に文庫、新書をお持ちの版元の方は、どういう基準でこれは新書だ、これは文庫だ、というところを、判断されているの

かっていうところを、ちょっとお伺いしたいなと思いました。どなたかお答えいただける方いらっしゃいませんか。

磯知七美 お答えになるかどうか分かりませんが、文庫・新書の版元として申し上げたいと思います。書店さんが新書は薄利多売だとおっしゃるように、版元にとっても薄利多売。今、新書の初刷りは、おそらくこの版元さんも八〇〇〇部から一五〇〇〇部ぐらいが基準じゃないかと思いますが、これで利益が出るように売るといのは、非常に大変です。そのために原価を抑える工夫をします。装幀はワンメイクで資材にもあまりお金をかけないという形でやっています。それが一つの新書のスタイルでもあり、またコストを抑えるという意味でも、単行本より作りやすいという事情があると思います。今のお話で、入門書がダメになったので、雑誌の編集者が新書を作って成功したとありましたが、少しニュアンスが違ふかなと思うんです。むしろ雑誌が売りにくくなったために、雑誌の編集者が新書を作るようになったという方向が現実ではないかと思えます。ご質問にあった、新書なのか、文庫なのか、単行本なのかという判断は本

当に難しいところで、今、弊社の実情から言えば、かなり俗人的に、新書の編集部にいるので、新書を作っているという傾向が多分にあるかと思っています。ちくま新書のスタッフの中でも人文書に親和的な者が何人かおり、かつちりした人文書を作りたいと思っているようですが、一二〇〇部というハードルをクリアするために、何とか間口を広げ敷居を下げて、出していかなきゃいけないという、厳しい現実が一方にあります。もう一点、四六判で入門書が出せないかというお話は、まさにおっしゃる通りだなと。先ほどこよっと言いかけたことですが、新書の間口が広くなって、敷居が下がった分、それでは食い足りない、次のステップの入門書というのではありませんか、そういう新たな入門書の必要性がこれから高まってくる可能性があると感じております。そこで、古くて新しい選書というのが、その役割を担いつつあるのかなと思います。去年でしたか、新潮選書が四〇周年フェアをなさっていました。あるいは角川選書も四十周年ですね。こうした選書が、単行本的な役割を担いつつ、コストの面では、ワンメイクのシリーズの特徴を活かすことが可能かもしれません。先ほど、山田さんがUP選書のお話

をなさっていましたけれども、選書も五〇〇部、六〇〇部という非常にシビアな部数が基準になりますから、なかなか難しいところではありますけれども、一つのニッチとして、これから可能性はあるかなと考えております。あまりお答えになっていないかもしれませんが。版元も現実には厳しいということをご理解いただければと思います。

華園 白川さんいかがですか。

白川 あ、今の選書でちよっと最近気がついたことがあります。新潮文庫で出ておりました河合隼雄さんの『とりかへばや男と女』というタイトルでしたかね。先ごろ、新潮選書で出ておまして、これはいかなる理由かなというふうにちらりと思いつながら、もしかしたらそういう文庫では耐えきれないという理由が何かあるのかなあとも思ったことを、ちよっとあわせて、思い出したんですけれども。

華園 どうでしょう。棚の作り方ということについて、ご発言されたいという方、いらつしやいますでしょうか。田川さん、お願いします。

田川純弘 ジュンク堂書店の田川です。ちよっと横から

も茶々が入った質問ですが、なぜ先ほど新書の話をしたかという、時間的に短かさがあるんですけど、新書という新書を売ることと、売りやすい新書があるっていうことと、あとは今回のアンケートの九番のところ、IT化って言ったなら、僕はネットとかで簡単に情報が得られて、新書というか人文書の先行きが非常に不安だという発言が、複数の方であつたのと、もしかしてリンクしているんじゃないかなと。そうだとしたら、本当に人文書に先はあるのか、僕はあると思ってるんですけど、何かそういうふうなところまで考えて、解決していただけると、僕は一番ありがたいんですけど、何かご意見のある方はいませんか。

華園 鈴木さん、お願いします。

鈴木昌之 三省堂書店MD販促室の鈴木と申します。よろしく願います。ネット・IT化のことについてお話がありましたので、私の方も問題提起として発言させていただきますと思います。まず思うのは、人文書、書籍とインターネットは、あくまで別物だという意識がもっぱらになっていることです。そうではなく、あくまでインターネットの凄さというものを認めたくえで、

その凄さを前提に今後の人文書の販売を考えていかないと、「未来」ということを捉えるのはなかなか難しいのではというのが私の認識です。というのは、無料で利用できるコンテンツとしてウィキペディアなどがあります。いや間違ひもあるよ、とか指摘されるのですが、実際に使ってみて、あれほど使いやすいものないと思うのですね。たとえば本日、月曜社の小林さんにご用意いただいた、現代思想のキーパーソンをGoogleとかで検索して見て、一番上に表示されるのは、ウィキペディアの情報ほとんどだと思います。何かをバツと知りたいなと思うような時もウィキペディアの解説というのが射っていて、確かに、それがどれだけ当たっているかどうかというのはまた別問題としてあると思うのですが、そういう凄いメディアが存在しているということは認めなくてはならない。販促に関しても、インターネット抜きでは考えられない。というのは、私はビジネス書も担当しているのですが、ビジネス書の世界では、すでに、ブログとかでネットを通じて発信された書籍の情報によって、非常に大きく反響を呼んでいるという現実があるのです。人文書の方だって、当然ネット発の情報から凄

いヒットとか、書き手が出て来るというのも当然ありう
ると思います。また、面白い材料としては、インターネ
ットの世界では、一日に飛び交う言語としては日本語の
活字の書き込みが一番多いことです。それを見て
も世間で言われているような活字離れということは多分
ないのではないか。ちよつと話が脱線しましたが、いず
れにしても、今後の人文書の販売を考える上で、インタ
ーネットの影響力というものは、外すことはできないな
と思います。むしろ、それをうまく利用して、人文書を
販売できないかなと、そう考えているわけです。最近ラ
ンダムハウス講談社が『最後の授業』という書籍の刊行
に合わせて、著者の、もう亡くなったアメリカ人の大学
教授の、その最後の授業の模様をYouTubeで字幕
付きで流して、書籍を販売した。すごく面白い手法だ
なと思ってたんですね。これを参考に、例えば、人文書で
も著者の方が自著を紹介するコンテンツをネットで流す
人文会というHPの枠でそれを行えば、出版社をクロス
した形でできる。で、もつと知りたい人は本を買ってね、
みたいな感じでやる。YouTubeやネットを通して
読者から著者の顔も見えるでしょう。難解な本を紹介す

るに当たって、映像の場合は人に伝わるような言葉で話
さないといけないと思いますから、そういった意味で
は入門にもいいし、それが本の販売に結び付くのではな
いのか。ネットを無視・あるいは敵視するのではなく、
うまく利用して、今後の販売を色々考えていかなければ
ならないのではないか。棚の編集ということも当然必要で
すが、あわせてそういうところも考えていかなければい
けないと思います。

華園 ありがとうございます。この議論面白いので、
早稲田大学生協の永田さんに、ご発言いただければな
と思います。

永田 淳 早稲田大学生協の永田と申します。とても難し
い問題だと思います。自分も大分悩んでいるところで
す。なんで本でなきゃいけないのか、というところですね。
今、ご発言いただいたような役割というのは、面白い
と思いました。最近で私の知っているところだと、ナ
オミ・クラインという女性ジャーナリストが書いた『シ
ョック・ドクトリン』という本があります。まだ翻訳が
ありませんが、多分つれあいの映像作家の方が『シ
ョック・ドクトリン』の内容を映像で紹介しながら、内容も

わかり、でも本とは違うようなものをウェブで公開して、これはちょっと面白かったなと思います。

問題の方に戻ると、アンケートにも少し書かせていただきましたが、本のデジタル化とかウェブのコンテンツということを考えると、なんで本が物質でなきゃいけないのかとか、本は売り物なんだろうか、というような根本的なことに基づくてしまっています。とりあえずデジタル化されるというのはどうということだろうと考えると、まあ、デジタルというのは、無限にコピーができますね。

だからそれを売るということになる、コピーガードをかけることになる。ここで問題になっているのは、本のデジタル化が知的所有権なり私的所有権というものと対立する、ということ。それでデジタル・コンテンツも物質としての本に倣うかたちで、コピーをさせないっていうふうに考えるのだと思いますが、これはちょっと変な考え方です。知識を共有する夢が技術を進歩させたのに、自ら規制するわけですから。また、そもそも知識は個人が創りだし、それを私的に所有できると考えるのは妄想ではないでしょうか。私としては、発言が難しいですけど、無料もいいだろう、というのが本当のところ

です。なにかものを書いて、それが無料で流通する方が楽しいに決まると私は思いますが、そこはまあ、知識社会と言われるような中だと、かなり難しいということになっています。

では、物質としての本はどうか。そこに可能性を賭けるっていうのもかなり難しい。昨日、ジュンク堂の福岡さんがおっしゃった「カノンⅡ典拠」としての本や、東大出版会の橋元さんがおっしゃったクオリティ・コントロールをするために物質に定着させる、というように物質としての本の役割を語る方法があったと思うのですが、それは歴史のアーカイヴとして理解できることなんですけれども、ちょっと一歩進めてというか、歴史を創り出すことを考えたいです。三〇〇年後に人文書が無料で、読みたい人の手元に回るといような状況を楽しいものとして想像しようとする、おそらく本を読む行為における身体、つまり物質の役割をどうしても考えなければならぬのではないのでしょうか。脳に直接情報をプラグインする未来は、情報を効率的に認識できる世界かもしれません、そのとき人は何を欲するのでしょうか？読書というのは、身体を動かしながらの実践的行為です。

なぜか物質としての本を読んでいる時に集中が高まってしまふ。多分これは身体の問題と関わっているんじゃないかと思います。本を情報の箱だと考えるのをやめたいのです。知的所有権と親和的な「表象」とか「情報」はデジタル化できると思いますが、実践に関わる「表現」はどうしても身体と物質を必要とするのではないでしょう。『シヨック・ドクトリン』であれば、認識するにはデジタル化され増幅可能なウェブのコンテンツを、そこから実践に移行する場合は物質としての本を、ということでしょうか。まずは書店を実践の場とすることで、物質としての本に賭けていきたいと思っています。以上です。

華園 ありがとうございます。ご意見のある方がいらつしゃいましたら。はい、北川さん。

北川毅 三省堂書店大宮店の北川と申します。ええと、これはちよつと話が戻っちゃうんですが、さつき、うちの社の鈴木が、ネット上の活用で販売促進というような大雑把な話をしたかと思うんですが、その点で考えるところがありまして、三省堂書店は店舗でブログを作ったり、商品紹介つていうのを行っています。当社以外でも

やられているお店もあるかと思うのですが、個人的にすごい疑問に思うのは、例えばお客様がブログで読んだりとか、YouTubeで本の情報を見て面白そうだな、と思つたらどうするかというと、そのまま書誌情報をアマゾンに貼っちゃうんじゃないかなと思います。多分ここにいらつしゃるほとんどの書店さんでは、三省堂書店も含めて、ネット上で決済する手段がないところが多いのではないかと思いますが、一部のネット上で決済が可能な書店さんが、特に人文書の分野で成果をあげていらつしゃるのか。決済の手段さえあれば、成果が上がるのではないかという、関心があるのですが。お答えいただけますでしょうか。

華園 どなたか、今の北川さんの問いに、お答えいただけます方、いらつしゃいますでしょうか。

今の北川さんの問いに答えるのが難しいと思いますのは、会社の中で、例えば紀伊國屋書店さんや、ジュンク堂書店さんは、ネット販売をしています。ここにいらつしゃる皆さんが実際に仕事をするのは棚のところですから、ネット販売については他所事のように考えているところもあるのではないかと思います。お答えできる

方がいらつしゃいましたら。はい、どうぞ。

高木善祥 鳥取の今井書店の高木と申します。僕はネットカルチャーみたいなのを、基本的に前向きに捉えているんですけども。今の書き手でね、前向きに捉えているっていうのは『ウェブ進化論』の梅田望夫さんぐらいで、あとの方はフリーになって不安だっている形で、ちょっと違うかなとは、僕は個人的には思っています。最後の質問の答えにはならないかもしれないんですけど、弊社のホームページでは、店頭在庫の検索ができるようになっていきます。それで、他の大きな書店さんだと、基幹店Ⅱ一番大きな店の在庫の開示だけだと思うのですが、うちの会社の場合は、鳥取と鳥根に店舗があります。この在庫は、基本的に全部見えるようになっていきます。在庫冊数までは出ないんですけども、検索をして結果を開くと、どの店にあるかが出ます。その画面から「配送」を選んで決済を行うことも出来ますが、あくまでもお店に足を運んでもらうための手段として、ホームページがあります。色々な方が言われるのですが、やっぱり実際に取ってみないと分からない、と。そこが一番、我々にとっての強みかと思えますので、実際に来てもら

って、手に取ってもらう。そこで初めて、お客様に判断してもらおうということが、一番重要なことかなと思っています。まあ、システム上色々難しい面があつて、実際お店に在庫が無くて、お客様からお叱りを受けたという 것도、時々はあるんですけども、基本的にはネットと、実際の店舗との融合性という面ではその姿勢で今展開をしているところです。お答えになっていないかもしれませんが。

福岡 僕が答えましょうか。ジュンク堂でも店舗単位でネットから注文されたお客様の取り置きサービスはやっているんですが、注文件数が日に二ケタ行くことはめったにないですね。また、これはまあ、雑感ですけども、池袋本店の宅配作業を見ている限りは、売上としてはそれほど高くないです。うちの社長も、ジュンク堂がせっかくあるのに、その在庫を店まで足を運んでいただけない方にも利用していただきたいからやっているだけで、そこで大きな利益を上げたいということではないと、いうふうに明言しております。ですから、僕自身も一番知りたいのは一人ひとりのお客様がそれをどう利用しようとしているかで、むしろお店のホームページを開いて、

ジユンク堂の場合は池袋本店の在庫数が出るんですけれども、一番上手な方は、それを見ながら電話をかけて、ここにあるらしいから、買いに行くから置いておいてくれというふうにご利用される方が増えていると思うんです。インフラは今の高木さんのご回答と一緒に思うんですけれども。ただ、本当に不透明なのは、ブログ等でおっしゃる通り、本の紹介を兼ねて、それがどこにつながっているか。ぜひ、アマゾンさんには、そのへんの秘密主義をやめて、冊数金額を開示していただきたいというのが思うところでございます。

華園　ありがとうございます。ここで私のわがままで申し訳ないのですが、そうすると書店さんの棚にどうやってお客さん呼び寄せていくのか、という話に持っていきたいと思います。名古屋市のちくさ正文館の古田さん、お願いできますでしょうか。大ベテラン、お願いいたします。

古田一晴　ええと、何を話したらいいんですかね。最近、偶然朝日新書から『検索バカ』（藤原智美著）という本が出ましてね。僕は本当、超アナログ人間でして、自分じゃ機械、使いません。もちろん、うちの従業員は使い

ますから、検索とか色々なことは、人に頼んでやります。僕はまあ二三年前からうちの従業員にも、検索自体が悪いとは思っていないんですけど、とにかく、できるだけ本に触って覚えなさいとずっと言っています。検索が悪いんじゃないくて、まあ、この『検索バカ』という本を読むと、僕ちよつとびっくりしたんですけど、検索するというのは、要するにさばることだと書いてあるんです。さばるというか、省略することだと書いてあるんです。要するに、その間に考えたり、本屋で言えば、要するに接客ですよ。検索するっていうのは、大体人に訊かれてからしきしませんから、そこからしか問題が出てこないわけですよ。その後は機械叩けば、なんらかの形の答えは出てきますよね。その間の人となんかコミュニケーションするみたいなプロセスをどんなに省略するんですね。僕らはいつも本を見えていますし、色々な情報を見えていますから、それをうまく組み合わせるとお客さんの持っている情報と、こっちの持っている情報で大体、本の姿が浮かぶわけですよ。ところが、今の人たちがまあ、使っている、使い方の問題だと思うんですけど、とにかく早く答えがほしくて、早く済ませたいと。お客さんと

僕らは、むしろよりコミュニケーション取りたいから、その手段として使うのなら、非常に有効だと。ところがまあ、その逆をやっちゃうわけですよ。あと、ランクに頼っちゃうとか、まあむしろ僕は弊害だと思っている方なんですよ。これはちょっと古い考えなんですけど。リアル書店がむしろ生き残るっていうのは、もちろん色々なことをいっぱい使わなきゃいけないんですけど、やっぱり最終的に人の教育だと思っています。それが、現実的になかなか本屋の中で難しいって話を色々ところから聞くんですけど、でもそれ以外、今後も思いつかないのです。今の僕の感想です。多分、違うよっていう話が随分あると思うんですけど。そんなところです。華園 はい、ありがとうございます。田崎さん、いかがでしょうか。

田崎 今、色々と論議されていますが、それぞれの方のご意見や思いというものとあります。それをディスプレイションして、どういうところに答えを見つけるのかというのはなかなか難しいと思います。

ではせっかくこれだけそうそうたる書店さんが現場から来ていただいていますので、人文書の既刊書の売り方

を、ぜひ聞いてみたいと思います。人文書の場合、他のジャンルに比べると、比較的長く売れ続けている既刊書の比率が多いと思います。人文会の会員社も、いわゆるロングセラーをたくさん持っていますが、しかしそれがなかなか、売れなくなってきたり。売れているのかもしれないけど、ちょっと部数が落ちてきている。それで重版のロットがあわなくて、品切れしてしまうということが起きています。有隣堂の古田さんが、アンケートにみず書房のフェアのことを書いていただいておりますが、有隣堂ルミネ横浜店はもう一〇年以上みず書房のフェアを年に一回開催していただいています。毎年、もの凄い冊数、金額を売っていただいています。ルミネというファッションビルですし、二四〜二五歳の女性が多いターゲットなのでしょう。そういう中で人文書はあまりマッチしないというイメージがあるのですが、実際ものすごく売って頂いています。で、これ私の勝手な思いなんです。フェアでこれだけ売れるんだつたら、普段もつと売れてもいいのではないかと。これ色々な書店さんに話すと、新刊が多くて、既刊書が押し出されていくのです、とおっしゃる方もいらっしゃる

ますし、それぞれのご事情もあるでしょう。それと人文書は担当者が育つまでに比較的時間がかかるジャンルだと思うのですが、実際はなかなか継続してご担当ができないという事情もあるようです。では既刊書売るためにはフェアをやっていくしかないのか、ということではなく、棚の編集とか、普段売っていくためには、どのようなことが必要なのか、あるいはそのために、我々出版社はどういう情報を提供すればいいのかとか、あるいはどういう情報があれば、可能性が広がるのかとか。そのへんのお話をどなたかお話くださいますでしょうか。

華園 どなたかいらっしゃいますか。じゃあ大変恐縮ですけれども、アンケートの中にとってもいいことを書いていらつしやいましたので、指名させていただきたいと思っています。アバンティブックセンターの浅田さん。よろしくお願いいたします。

浅田友紀 京都のアバンティブックセンターの浅田です。アンケートを見させていただいたら、結構多くの書店さんが書かれていたんですけど、みず書房の『夜と霧』がうちのお店でもロングセラーになっています。池田香代子さん訳の新版が出た時に、霜山徳爾訳版が一度品切

れというか、絶版になる方向性でやっているというふうに聞いたんですけれども、やっぱり、霜山版がよく売れているので、その時に多めに仕入れさせていただいたんですね。で、どう違うのかということを、みず書房の方から説明を受けて、それをポップで表紙をカラーコピーして、それぞれ下にどう違うのかという言葉を書き添えて、結構大きめのポップになったんですけど、それを立てて置いていたら、そのポップを読んでもらったという方が結構多いなと思い、自分ですごく満足しました。京都は大学生の方も多いので、課題が出た時期にわーっと動くことはありますが、ずっと定番です。これを必ず切らさないように、毎月ちょこちょこ、補充しています。華園 ありがとうございます。私はこういうことをやっているよ、という事例がありましたら、ぜひ積極的にお話ください。ご自身が普通にやっていたら、いいことではないと思います。それが他の方には、「いや、そんなことは知らなかった。」と「初めて聞いた。」ということもあると思いますので。

鈴木孝信 あゆみBOOKSの鈴木です。弊社の人文書の担当もやっぱり品揃え等に迷っています。人文書担当

は、一二店舗全てで店長が担当することになっていきますが、問題は人文書に持っているイメージですね。まず一つに言うのは、学術的教養がないという縛りがあるだろうと思います。それがないから、間違ったらいけないからという問題があるのではないかと。弊社にはあるんだけれども、今日いらっしやっている皆さんの中にはないのかどうか、という疑問があります。でも、今日小林さんが説明してくださった、このゼロ年代というものが、ある意味では打開策ではないかと。要するに、ゼロ年代というのは、非常に小林さんが、先を読んでいた、原書を読めている感覚というものが非常に優れている人なんだろうと思います。そういう意味で、ここにもっと色々なものからいくらでも派生できるだろうし、そしてまたこれが、今の現象であり、先々の予見なんだろうと、全く感覚的には思うんですね。こういう身近なところから始めればいいんだろうと思うんです。ところがどうしても人文書には学術的教養というものが根本に横たわっているような印象を担当者側が持みたいですね。でも僕たちは学者じゃないわけですから、それは多少間違ってもこれはしょうがない。それは販売をしようとしてい

るわけだし、その中で自分たちなりの面白さを出したらいいんじゃないか、という話をよくしますけれども。だから、学術的教養という縛りをどこかで解かないと、人文書は面白くならないんじゃないかと思います。一方で、学術的教養をきちんと構成していく書店も当然必要で、そうじゃなくてもいいんだっていう書店も当然あっていいわけです。図書館ではないわけですから、そのところが根本どこか不便、人文書の売り方に対して、何か違うんじゃないかという違和感を、僕自身は持っています。だから、ゼロ年代というようなことが、小林さんがうまく括っているのだろうと思うんですけど、それとイタリヤの現代思想、アメリカの政治思想みたいなものが一緒になると、このへんはちよつと難しくなってくるんだろうと思うんですが、切り離してバラバラにしたところで、言わんとするところは、もしかしたら、同じなものではないかと。だから、現代のあらゆる現象っていうものが、それを品揃えしていくことが基本的に人文書に注目される要因じゃないか。ポイントなんじゃないかと思います。

華園 はい、ありがとうございます。ここで、今の話と

ちょっと関連すると思いますので、丸善の杉木さん。

「世間と戦う人のためのフェア」というフェアのことを書いていらつしゃいます。お願いできますでしょうか。

杉木茂弘 丸善津田沼店の杉木です。まず、最初にお断りしておきたいのですが、当店は実は人文書があまり売れる店ではありません。おそらく、ここにお集まりの方々の店舗の中では、売上金額は低い方だと思います。

ですから、当然フェアというのは、時事的な話題性に關するものが中心で、独自の切り口によるフェアを行うことはめったにありません。で、そういうフェアを行う場合でも、基本的には一般の方々が手に取れるようなテーマに即してフェアを行うことになるわけですね。あまりにも、専門的なテーマによるフェアを行っても、当店の顧客には広がりません。そういう縛りの中で、やはりいくつか、独自のフェアを行ったことがあります、最近行ったものが、こちらに書いたものです。

なぜこのようなフェアを行おうと思ったかといいますと、きっかけは五、六年ほど前に、池田清彦さんが、『他人と深く関わらずに生きるには』（新潮社）という本をお書きになりました。その頃は、新しい生物学の教

科書が刊行された翌年でしたので、普通に考えるならば、生物学の棚で、池田先生の他の著作と並べるといのが、一般的なやり方だと思うんですけども、私はこの本を人文書の方の棚にも置いてみようと考えたんです。なぜかと言いますと、その頃、中島義道さんがエッセイをお書きになられていまして、かなりの人気を集めていたんです。で、この本のタイトルと内容を見て、これは中島先生の本が好きな読者も興味を持って手に取るのではないかと思ったのです。で、人文書の方で、中島先生の本の隣に置いてみたら、ある程度の売り上げを上げたのです。生物学者の方の書かれた本でも、人文書のコーナーで売することは可能なんだ、というちょっとした驚きを覚えたのです。その後しばらくたって、今度は阿部謹也さんの著作を読んでいたら、阿部謹也さんが日本的な世間というもの構造について論じられていたのですけれども、その文章に何か既視感があったのです。中島先生が日本社会を批判している文章と、内容的に少し通じるものがあつた。中島先生が直感や自分の体験から書かれているようなことを、阿部謹也さんは、歴史的な文脈の中で検証しようとしているような、そういう印象を

受けたんですね。で、哲学、生物学、歴史学と、それぞれ血筋の違う方たちが、日本社会を批判したり、あるいは自分の生き方のスタンスについて書いている本が、何か似通った印象を与えるというのが、ちょっと面白いことだと思つて、こういう切り口で一度本をまとめてみようと考えていたんです。今年そういう本をまとめて並べてみましたら、やはり一定量の売上が上がったんですね。先ほどから色々な方がおっしゃっていることなんですけれども、分野を超えて、何か別の切り口で本をまとめることで、既刊本でも売れる商品に変えるということは、決してできないことではないなど、まあ売上金額的にはささやかなものですが、うちの店のレベルから言うと、こういうやり方でもやらない限り、既刊本の売り上げを伸ばすことはできないなど、そういうふうに考えて、こういうことを行つたのです。

華園 ありがとうございます。フェアも独自の「編集」ということになると思いますね。そこに積極的にトライしていくということが幅を広げお客さんを増やす、売上につながるということになる、今の話はそういうことじゃないかなと思います。

では売り上げの管理というテーマに移りますが、今はPOSシステムがほとんどのお店に装備されているわけですが、一方でスリップ分析をされているとアンケートにお答えいただいた喜久屋書店の市岡さん、どのように活用されているかを、お聞かせいただけますか。

市岡陽子 喜久屋書店の市岡です。アンケートには、スリップを結構参考に使っています、というふうに書きました。レジはPOSレジになっているのですが、どうしても今すぐ売れた商品が何か、ということを知りたいので、売れた本のスリップを午前中に一回、午後は二回ぐらい見るようにしています。それで、直感に頼るようなことが多いのですが、「あ、これは」とか、うちの人文書の棚になくて、なんか人文書っぽいスリップが入っていて、それは、私が恥ずかしながら、どこに置いている商品か、自店ながら分からなくて、こんなのが売れているというの、そういうスリップで発見したりしています。それを、人文書の棚で置きたいと思つたら、他の棚の在庫を確認して、次の注文をするようにしています。スリップは、今でも一番参考に使っている資料と思っています。

華園 はい、ありがとうございます。他の方がでし

ようか。

徳永圭子 丸善の徳永と申します。お店の大きさにもよるのですが、人文書の売り場まで来てくださるお客様が非常に限られていることが、それぞれの担当の方が抱えている問題だろうと思います。それぞれのお店でやっていることとしては、そのお店の一番メインのお客様というか、年齢層であったり、性別であったり、どういったところでお勤めの方か、どのような生活スタイルを持っていたらっしゃる方かということ把握したうえで、そういった方々に合った人文書が、きちんと選ばれて置かれているのかということが重要なのではないかと、と常日頃考えながら品揃えを心がけています。それと人文書は書評によって売れることがとても多いと、いつも考えています。書評に載ると確かに売り上げを支えてくれていますので、書評情報は皆大事にしています。ただ、その新聞を読む人が減っているのではないかと感じており、そこがちよっと不安材料です。先ほど、Webのことでは話が出ていたんですが、ブログで紹介した本がどれだけの影響が出てくるか、リアルな書店との兼ね合いとをどうしていくのかという話で、リアル書店とネット書店の圧倒

的な違いとしては、実際に手に取って、手触りを感じて選んでいただける楽しさを味わえるのが、書店の場所だろうというふうに思います。ひとつ出版社の方々におうかがいしたいのは、無料で配信できるものは、無料でもいいんじゃないかというお話が先ほどありました。確かにそういう方向はもう出てきているし、止められないところまで来ているというふうに感じています。では、実際にその本を所有したい、って思わせるもの。手触りであったり、新しい印刷の技術もどんどん出てきているので、そういった装丁であったりとか、実際に本を開いて見た時に、内容を読みやすくするということも、入門書にしていくなか、そういうことも大事なんですけど、読んだら面白いんですよ、とよく出版社の方に言われるんですけど、そういう読んだら面白い本を、本当に読みやすくというか、読みたいっていう形にしていくなかについて、皆さんがこれからどんなふうに考えていらつしやるか、おうかがいしたいです。

華園 はい、ありがとうございます。今の徳永さんの、読みやすい本、本の質感、これからの本ということについて、ご提案がありましたけれども、答えてくださる出

版社の方、どなたかいらっしゃいますか。じゃあ、すみません。未來社の西谷社長、お願いできますでしょうか。西谷能英 いやな質問を押しつけてくれましたね（笑）。売れる本を作るのが最も下手な出版社にこういう質問に答えるというのはまあ、華園さんらしいいたずらだと思えますけど。さつきからずっと話をうかがっていて、出版社の機能、あるいはもっと狭く言うとな編集者の機能というのはどういうものかという話を話したいと思います。今日のお話で、小林さんが書店の棚の編集をするという、もうひとつの編集の機能を提示しましたが、私も、書店の棚っていうのは生き物なんだ、ナマモノなんだっていうことを力説したいですね。日々新しい、ちょっと気の利いた本が入ってくると、書店の棚の編集というのは周辺の本の配置を変えることによって、今までの既刊本も違った表情を与えることができるわけです。そういう新しい情報の現場がまさに書店なんですよ。出版社の人間っていうのは、だいたい狭いところではないかものを見てませんから、他社のこういう本が売れているかっているのは、書店に行っても、棚を見るだけではわからない。最近アマゾンとか紀伊國屋書店で売れ行き情

報がわかりますから、どういう本が売れているのか、自分に関心のあるジャンルの情報は比較的簡単に入手できるようにまりましたけど、では本を作るときに、そういう本を作ろうかっていうと、それはもうできちゃった本の情報にすぎませんから、真似するわけにいかないわけです。いまのご質問にはうまく答えられませんが、自分の手元にある原稿、あるいはアイデア、企画をどうやって本の形に結びつけようかって考えると参考にできるだけなんです。著者とのコンタクトから企画が始まりますが、原稿というのは編集者にとっては素材なんです。基本的なコンセプトなり方向性が著者の原稿にはあるわけですが、編集者の機能というのは、その原稿をいかによりよいものに、できたらより売れるものにするために、著者と話し合いをしたり、編集サイドからいろいろなアイデアなり注文なりを加えていくなかで書物に出来あがっていくわけなんです。編集者は自分が作った本が評価も高く、なおかつ売れるものにしたいたいという宿命的な欲望があるんですが、そうした本が書店の現場ではいかに反映していくのかっていうのは、じつ

はよく見えない。売れるはずだけど売れない。そういう失敗を重ねていくなかで、今度はこうやってたらうまくいくんじゃないかという試行錯誤を絶えずやってはいるんですよね。だから、そういう売れる本、より見栄えのいい本、しかも専門的な見地からも評価の高い本を作りたいというのは、これは専門書であれ一般書であれ基本的には同じなんです。ただ専門書というのは、内容的な問題から言ったら、一般の読者にそんなに幅広く売れるようなものではないので、どうしても形よりも内容重視というところに行きがちなものですから、書店の現場へのお答えにはちよつとならないと思うんですけど。ただ、僕は編集者っていうのは検閲者だと思っているんですよ、すごく傲慢な言い方をしているんですけども。いまはインターネット上の情報やらブログやらが簡単に本になる、あるいはオンデマンドみたいなものがありますから、本を作ること自体は、まあ作ろうと思ったら誰でも作れちゃうという時代に入ってきています。そういうなかで、はたして出版社は存在理由があるのかないのかっていうことも考えるんです。やっぱり最終的に残るとすれば、出版社または編集者もっている社会的な意味で

の検閲機能、つまり、著者の原稿が社会的に流通するに値するものであるかどうかを、その出版社なりの判断でするわけです。著者の思いというものをどこかでコントロールさせていただくというような機能もっているんですよね。こういうことを言うとき威張っているみたいに聞こえちゃうとまずいということで普通は誰も言わないんですよ。でも、やっぱり編集者、出版社としては、最小限、自社の出している本のレベルとか社会的評価にたいして、みずからを縛っていかないとけない。出版するに値しない本を出すとその出版社に対して読者離れがどんどん起こってしまうことを非常におそれているわけです。どういう本を出すかということによって、その出版社のレベルが上がったり下がったりする。そういう経験をいろいろしているなかで、やはり最終的な読者の手元にどうやって届くかというところは、自分の思い込みが正しいかどうかというのとはわからないけれども、内容についてだけは自信をもって保証できるものを作っているのが出版社の使命、編集者の使命ではないかというのを、ちよつとすれ違ってしまったかもしれないんですけど、お答えしておきたいと思います。

華園 はい、西谷社長、ありがとうございました。第四部はこれで終わりにしたいと思います。皆様、長時間議論に加わっていただきまして、本当に感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

東京合同研修会参加者アンケート

紀伊國屋書店横浜店

宮里保代

この度は、合同研修会に参加させていただきありがとうございました。ありがとうございました。このような大規模な研修会に参加させていただくのは初めてで、とても刺激的な数日間になりました。

最も印象的であったのは、第二部のケーススタディ「人文書販売の現在と未来」です。自分と同じ人文書を担当している方々が、自分が思いもしなかったような発想のもと、売場作りに励んでいることがわかり、棚管理を見直す大変良い機会になりました。特に自分に欠けていた視点は、人文書以外の分野の商品も関連付けて、一

緒に併売するという発想です。「じんぶんや」の紹介や、「心」と「体」という二つの大きなテーマを設けて、関連書を集め棚をつくっていくという方法の紹介で、そのことを強く感じ、単純に内容で分類された棚を作るのではなく、担当者の感性や書籍に対する知識を生かした棚作りに、大変関心いたしました。また喜久屋書店の市岡さんの棚管理の紹介では、日々の業務を欠くことなく丁寧に行うことで、良い売上につなげていく姿勢が感じられ、好感をもちました。

その他の部でも、人文書がおかれている厳しい現実と、それに対する様々な工夫、提案が紹介され、今後の棚管理に役立てて生きたいと思いました。単純に書籍を並べるだけでなく、その内容にもっと関心を持ち、内容を理

解した上での棚作りができるようになりたいです。

最後に、今回このような人文書に携わっているたくさんの方々と、お話しする機会をいただきましたこと、重ねて御礼申し上げます。

ジュンク堂書店池袋本店

宇田智子

二日間にわたる大規模な研修会を開催してくださってありがとうございました。たくさんの方の刺激を受けることができました。

一番印象に残ったのは第三部です。三人中二人が新書の編集者であったり、「人文書」という名前自体が問題となったりと、人文書というものを根本的に考え直す必要があればならないと実感させられました。

一方では「新書を単行本と併売すると棚の見た目が悪い」という担当者の発言に対して「それは自分でどうにかするしかない」となだめるようなやりとりもありましたが（終了後の雑談だったかもしれない）、現場担当者としてはむしろそのような瑣末なことについてアイデ

アを出し合いたかったと思います。「他ジャンルとの併売商品をどう管理するか」というのが「人文書とは何か」と同じくらい重要な話題でもありうるのです。

ともあれ、棚を離れての研修会としてはとても実り多いものでした。五〇周年も期待しています。

三省堂書店名古屋高島屋店

西村 早苗

一番良かったのは、人文書の担当になって、これからという方向性を持ってやっていけばよいのか行き詰まっていたので、それを打破する刺激になったということです。

もっと言うなら、今まで通り本を読む方に向けてしっかりした内容の本を置いておくということ。そして新しい読者に向けてわかりやすく、なおかつ面白い本を置くということ（わかる人だけわかればよいと言った、身内だけで論争しているような、井の中の蛙的な本はいくら業界で置くべきと言われてもこれからは読者には縁遠くなるだろうと改めて思いました）。

色々な方のお話を伺って、ふと思ったのは、人はパンのみに生きるにあらず、ことばによって生きる」という聖書の一句でした。教養主義は没落したのかも知れませんが、しかし、やはり精神的な喜びを人は必要とするし、こうした先行きの不透明な時代では心の土台となるものとして人文書は求められるのではないのでしょうか。

業界内だけでなく、もう少し読者が何を本当に求めているのかという話が出て良かったのでは？

ブックファースト梅田店

小牧あい

今回、人文会創立四〇周年合同研修会に参加して「感じた事」「知識として得た事」は、今まで「井の中の蛙」になってしまっていた、私自身へ大きなプラス材料をいただいた気持ちです。

まず最初に、人文会各版元の皆様、その会でお会いした書店の皆様に感謝いたします。

私自身、人文を担当して（アルバイト時代を含めると）一〇年弱……担当になった頃はちょうど人文書の売

り上げに「陰り」が見え始めた頃です。売上が上がらないジャンルは、棚を減らされる、売場の奥に追いやられる……「人文書」もその対象の中の一ジャンルでしたから、担当自身も「人文書は売れない」という固定観念に縛られてしまっていました。「売れないのは、担当者自身の棚づくりのせい？」とまで考えたこともありましたが、一日目の竹内洋先生の特別講演のお話で、「売れない理由には人文書購入層であった大学生が本を読まなくなっている現状がある」と聞いた時は自分の中のモヤモヤが晴れたような気がしました。

今の大学生のお客様からは「レポートでこういう課題があるんだけど、どういったのを読んだらいい？」等のお問い合わせをいくどか聞いたことがあります。竹内先生の仰る通り、自分で読みたい本、知りたい本を探すことすら出来ないのです。例えば悪いかも知れませんが、私は「ご飯を食べれない子供にふりかけで味をつけてあげる親」のような感じで「学術書」への取っ掛かりを作ってあげればいいんだ！というのが自分の得た考えです。「人文分野の裾野を広げることを自らの課題とし、入門書的な新書・文庫を上手く取り入れ、今後の棚づく

りに活かすつもりです。

そして、「パネルディスカッション」や「ケーススタディ」のお話を聞き、もっともっと色々な視点から人文学の棚を見つめ直し、「自店の持ち味を活かす努力」と「一人一人のお客様に地道に一冊の本を販売していく事の大切さ」を今後の課題として、今回の感想とさせていただきます。

精文館書店

関 剛士

各出版社の人文会担当者、営業の方、さらには各地の書店員の皆さんとも情報交換できたのは何よりも収穫で、話を聞いたり、アンケートを読むにつけ、大いに刺激にもなり、日々怠けている自分が恥ずかしくなりました。大人数ということもあつて全員とお話することはできませんでしたが、今回知り合うことができた方々（版元、書店両方）とは今後も刺激しあう仲間になればと思います。

代表幹事はじめ人文会の皆様は準備に始まり当日の運

営、片づけなど相当大変だったと思います。こうした会に参加させていただき、本当にありがとうございました。『人文書のすすめ』にある必備図書の欠本調査をしたところ、店に在庫がないもののがかなり有りました。早速棚の見直しのためにも発注に使っています。残念ながら、すでに版元さんで品切れになっているものがありません。

私も基本図書選定のお手伝いをさせていただきましたが、せっかくの機会でしたので、版元さんあるいは選定作業をした書店員からでも新ジャンルや選定書目についてのコメントがあれば、もっと良かったと思います。

大学の二人の先生は学生の読書不足、知識不足を嘆いてばかりで、それに対してどうしていくのかという姿勢がお話からはほとんど感じられず、人文学をつくり、売っている人たちを前に話す内容としてはちょっと残念でした。

営業の方が少ないなど諸事情あるのでしょうか？ できましたらどの版元さんも少なくとも一年に一度はお店に来て人文書担当者に会い、実際の売り場を見るなどして情報交換などしてほしいです。個人的には都合がつけ

ば昼食、夕食もできるだけお付き合います。書店員の異動は多いです。たとえ、双方の担当者が代わっても、人文各社とのつながりは持ち続けていきたいです。

戸田書店浦添前田店

藤浪 哲也

他書店で人文書を担当されている皆さんにお会い出来たのが何よりもありがたく、且つまた刺激となりました。とりわけ第二部のケーススタディ「人文書販売の現在と未来」で披露された独自の方法論は魅力的に映りました。事前アンケートを冊子にまとめて下さったのも素晴らしいと思います。

その第二部を含む計四部のコンテンツは、それぞれの異なったアングルから人文書の現在を捉える構成で非常に興味深かったのですが、やや哲学・思想に傾斜しすぎていたのではないかと思います。私個人としては楽しんで拝聴しました。

参加後に弊社主要店の人文書担当者および店長クラスの責任者にいただいた資料をもとにした情報を送りました。

た。何とか私以外のスタッフと理念を共有出来ないかと考えたからです。人文書に惹かれて担当になった者も数名おりますので、今後は彼らと意見を交換しながら充実した店（棚）づくりに邁進したいと思います。

早稲田大学生協コーププラザ店

永田 淳

まずは貴重な機会をいただき、ありがとうございます。あれだけの人数の人文書担当者が集まるというのは、そういった事実だけでも特記されてよいことと思います。実際、全国の人文担当者のみなさんの話をうかがえたのはとても楽しかったです。

雑感の域を出ませんが、感じたことを率直に書かせていただきたいと思います。全体としてのひとつの基調は、人文書の可能性を、人文書がもともと持っている特質——領域横断性——に求めることだったように感じました。紀伊國屋書店「じんぶんや」の報告、月曜社小林氏の講演などが印象的でしたが、これはジュンク堂福岡氏がかねてから一貫して語られていることでもあると思います。

人文書とは何かを考えると自然と至るアイデアだし、人文書の魅力そのものがこのアイデアに込められていると思います。

すぐに気づくことですが、このアイデアの核心は、それぞれの人（担当者）が自律的に動くことにあります。自分の考えたことが正しいかどうかとか十分かどうかという不安をふりきって、自分を信じて棚をつくることにあります。しかし人文書担当者はどんな状態に置かれているでしょうか。自分の考えが正しいか、自分の知識は十分か、売れるのか、上司はどう思うか、などなどの憂鬱の中です。

その状況を少しでも救うために、人文会は様々な方法や知識を提案したり、媒介して下さったりしています。それは役に立ちます。でも、提案された新たな棚構成を教わることはできても、誰がその新たな棚構成をつくるのでしょうか。私は、そういった発明は人文書担当者誰しものがやるのだと思います。それは理想的な話であって……という反論がすぐにやってくるでしょう。その反論はどういう意味なのでしょう。その能力を持つ書店員は少ない、ということでしょうか。

こうしたことを前にして考えなければならぬのは、書店員の余暇だと思います。余暇は人文書を育てますが、書店員にはそんな暇はありません。暇があれば誰だつてはめをはずす——思ったように行動するでしょう。この時間は人文書の未来がつくられる時間です。そのために書店員の給料の話、勤務時間の話、業界内格差の問題、書店間の破滅的な競争の問題……が話されるべきだったのではないかと思います。毎日店舗で感じる憂鬱さについて話すことがタブーなままで人文書の未来を語るというのは悲しいことです。

人文書担当者を全国からたくさん集めるだけ集めて、何もしない——暇をつくってほしかったと、妄想だとしても私は思いました。

広報委員会から

「人文会ニュース」一〇五号をお届けします。

本号は昨年開催された人文会創立四〇周年記念東京合同研修会特別号として刊行いたしました。当日の会場の様子や雰囲気但至少でも伝わればと思います。

なお、本文中の所属・肩書は研修会当時のものです。

人文会会員社 新刊のご案内

(2008. 8～2009. 4)

哲学・思想

書名	著 編 監 修 者	本体価格	I S B N	出 版 社 名
レーニン最後の模索 社会主義と市場経済	松竹伸幸	1800	9784272430796	大 月 書 店
オックスフォード 科学の肖像	オーウェン・ギンガリッチ編集代表	2000	9784272440504	大 月 書 店
ウィリアム・ハーヴィ 血液はからだを循環する				
オックスフォード 科学の肖像	オーウェン・ギンガリッチ編集代表	2000	9784272440511	大 月 書 店
コペルニクス 地球を動かし天空の美しい秩序へ				
オックスフォード 科学の肖像	オーウェン・ギンガリッチ編集代表	2000	9784272440535	大 月 書 店
エジソン 電気の時代の幕を開ける				
福沢諭吉と中江兆民 〈近代化〉と〈民主化〉の思想	吉田傑俊著	2800	9784272439010	大 月 書 店
1995 年 未了の問題圏	中西新太郎編 雨宮処凛・中島岳志・湯浅誠・栗田隆子・杉田俊介	1900	9784272330560	大 月 書 店
大江満雄論 転形期・思想詩人の肖像	渋谷直人著	4800	9784272430765	大 月 書 店
癡者の意章 大江満雄ハンセン病論集	大江満雄著 木村哲也編	3200	9784272430772	大 月 書 店
ジョン・ロックとアメリカ先住民	三浦永光著	3800	9784275008152	御 茶 の 水 書 房
非体制順応的知識人(第1分冊)	アレックス・デミロヴィッチ著	3200	9784275008114	御 茶 の 水 書 房
非体制順応的知識人(第2分冊)	アレックス・デミロヴィッチ著	5400	9784275008121	御 茶 の 水 書 房
宗教批判と身体論	河上睦子	5800	9784275008039	御 茶 の 水 書 房
明治文化研究会と明治憲法	堅田剛	4500	9784275005977	御 茶 の 水 書 房
ボードリヤール再入門	塚原史	800	9784275005960	御 茶 の 水 書 房
歴史における「理論」と「現実」 叢書アレティア 10	仲正昌樹編	3200	9784275005854	御 茶 の 水 書 房
アダム・スミスの道徳哲学と言語論	大島幸治	8000	9784275005878	御 茶 の 水 書 房

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
現代日本の保守主義批判	伊藤述史	2800	9784275005861	御茶の水書房
An Outline of a Theory of Civilization [文明論之概略] (全欧文)	福澤諭吉著 デヴィッド・A. デイルワース 訳	3200	9784766415605	慶應大学出版会
エピステモロジーの現在	金森修編著	5600	9784766415520	慶應大学出版会
すれっ枯らしの公共心	桂木隆夫	3200	9784326154012	勁草書房
現代日本哲学への問い	勝守真	2800	9784326153992	勁草書房
バイオ・コリアと女性の身体	淵上恭子	3200	9784326101870	勁草書房
リベラリズムと正義の限界	マイケル・サンデル著 菊池理夫訳	4000	9784326101887	勁草書房
最小合理性	クリストファー・チャーニアク著 柴田正良 監訳	3300	9784326199532	勁草書房
リバタリアニズムの多面体	森村進編著	2400	9784326154005	勁草書房
言葉は身振りから進化した	マイケル・コーバリス著 大久保街亜訳	3700	9784326199433	勁草書房
合理性を圧倒する感情	ヤン・エルスター著 染谷昌義訳	3400	9784326199600	勁草書房
瀬名秀明ロボット学論集	瀬名秀明	3000	9784326101856	勁草書房
悪夢の医療史	W. ラフルーア G. ベーメ 島菌進編著	3500	9784326101849	勁草書房
科学哲学入門	中山康雄	3000	9784326153985	勁草書房
33 個めの石	森岡正博	1500	9784393332917	春秋社
根をもつこと	シモーヌ・ヴェユ著 山崎庸一郎訳	2500	9784393325377	春秋社
神を待ちのぞむ	シモーヌ・ヴェユ著 渡辺秀訳	2000	9784393325384	春秋社
致命的な思いがかり ハイエク全集第二期 第一巻	F. A. ハイエク著 渡辺幹雄訳	3800	9784393621912	春秋社
神々の秘密 日本の面影の源流を解く 連塾 方法 I	松岡正剛	1800	9784393332887	春秋社
隷属への道 ハイエク全集別巻	F. A. ハイエク著 西山千明訳	1900	9784393621820	春秋社
模写と鏡	吉本隆明	2000	9784393332863	春秋社
ゲーテ形態学論集・植物篇	ゲーテ	1500	9784480091857	筑摩書房
ゲーテ形態学論集・動物篇	ゲーテ	1300	9784480091871	筑摩書房
もりやはやし	四手井綱英	1000	9784480092168	筑摩書房

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
哲学原理	ルネ・デカルト	1200	9784480092083	筑 摩 書 房
熱学思想の史的展開 3 —熱とエントロピー	山本義隆	1400	9784480091833	筑 摩 書 房
ニーダム・コレクション	ジョゼフ・ニーダム	1400	9784480091895	筑 摩 書 房
人間の未来 —ヘーゲル哲学と現代資本主義	竹田青嗣	900	9784480064714	筑 摩 書 房
地学のツボ —地球と宇宙の不思議をさぐる	鎌田浩毅	860	9784480688040	筑 摩 書 房
今、ここからすべての場所へ	茂木健一郎	1600	9784480842879	筑 摩 書 房
相対主義の極北	入不二基義	1400	9784480091956	筑 摩 書 房
養老孟司の人間科学講義	養老孟司	840	9784480091710	筑 摩 書 房
命題コレクション 哲学	坂部恵・加藤尚武	1500	9784480091741	筑 摩 書 房
哲学問題 101 問	マーティン・コーエン著矢橋明朗訳	1300	9784480091123	筑 摩 書 房
新幾何学思想史	近藤洋逸	1300	9784480091635	筑 摩 書 房
知的創造のヒント	外山滋比古	560	9784480091772	筑 摩 書 房
茂木健一郎の脳科学講義	茂木健一郎・歌田明弘	680	9784480424747	筑 摩 書 房
生命をつなぐ進化のふしぎ	内田亮子	720	9784480064417	筑 摩 書 房
宇宙創成はじめの3分間	S. ワインバーグ著小尾信彌訳	1200	9784480091598	筑 摩 書 房
日本の数学 西洋の数学	村田全	1000	9784480091611	筑 摩 書 房
バイオフィリア	エドワード・O. ウィルソン著狩野秀之 訳	1100	9784480091642	筑 摩 書 房
カントの読み方	中島義道	700	9784480064271	筑 摩 書 房
やさしい微積分	L. S. ポントリャーギン著坂本實訳	1100	9784480091499	筑 摩 書 房
新編 現代の君主	アントニオ・グラムシ著上村忠男編訳	1400	9784480091604	筑 摩 書 房
恋するコンピュータ	黒川伊保子	740	9784480424587	筑 摩 書 房
法存立の歴史的基盤	木庭顕	28000	9784130361361	東京大学出版会
東大英単	東京大学教養学部英語部会編著	1800	9784130821407	東京大学出版会
生命とは何か 第2版 複雑系生命科学へ	金子邦彦	3600	9784130623100	東京大学出版会
ソーシャルブレインズ 自己と他者を認知する脳	開一夫編長谷川寿一編	3200	9784130133036	東京大学出版会

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
生成文法	渡辺明	2600	9784130820158	東京大学出版会
死生学 2 死と他界が照らす生	熊野純彦編, 下田正弘編	2800	9784130141222	東京大学出版会
死生学 4 死と死後をめぐるイメージと文化	小佐野重利編, 木下直之編	2800	9784130141246	東京大学出版会
死生学 5 医と法をめぐる生死の境界	高橋都編, 一ノ瀬正樹編	2800	9784130141253	東京大学出版会
描かれた技術 科学のかたち サイエンス・イコノロジーの世界	橋本毅彦	2800	9784130633505	東京大学出版会
シリーズ脳科学 3 言語と思考を生む脳	甘利俊一監修, 入来篤史編	3200	9784130643030	東京大学出版会
科学コミュニケーション論	藤垣裕子編, 廣野喜幸編	3000	9784130032070	東京大学出版会
メルロ＝ポンティ	加賀野井秀一	3000	9784560024720	白水社
白水 U ブックス 大衆の反逆	ホセ・オルテガ・イ・ガセット	1300	9784560721018	白水社
U ブックス 時間と自由	アンリ・ベルグソン	1300	9784560721001	白水社
白水 U ブックス 幸福論	アラン	1300	9784560720981	白水社
現代イタリア思想を読む	上村忠男	1800	9784582766653	平凡社
マルクスと批判者群像	良知力著	1500	9784582766622	平凡社
フッサール・コレクション	立松弘孝編	1400	9784582766592	平凡社
青年マルクス論	廣松渉著	1600	9784582766547	平凡社
ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日	カール・マルクス著	1500	9784582766493	平凡社
理性への希望—ドイツ啓蒙主義の思想と図像—	ヴェルナー・シュナイダース/村井則夫訳	2800	9784588009129	法政大学出版局
フランスの現象学	ベルンハルト・ヴァルデンフェルス/佐藤真理人監訳	8000	9784588009112	法政大学出版局
ドイツ哲学史—1831-1933—	ヘルベルト・シュネーデルバッハ/舟山俊明・朴順南他訳	5000	9784588009136	法政大学出版局
ハイデガー『哲学への寄与』研究	山本英輔	5300	9784588150555	法政大学出版局
フロイトの伝説	サミュエル・ウェーバー/前田悠希訳	4200	9784588009105	法政大学出版局
〈内なる光〉と教育—プラグマティズムの再構築—	齋藤直子	3500	9784588100147	法政大学出版局

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
十八世紀研究者の仕事—知的自伝—	セルゲイ・カルプ編/中川久定・増田真監訳	4500	9784588009068	法政大学出版局
アーレントとティリッヒ	A. クリストファーセン・C. シュルゼ編著/深井智朗他訳	2200	9784588009044	法政大学出版局
啓蒙のユートピア 第二巻	野沢協・植田祐次監修	22000	9784588120879	法政大学出版局
ディルタイ全集 第6巻 倫理学・教育学論集	ヴィルヘルム・ディルタイ/小笠原道雄・大野篤一郎・山本幾生編集・校閲	21000	9784588121067	法政大学出版局
困難な自由	エマニュエル・レヴィナス/合田正人監訳/三浦直希訳	4700	9784588009051	法政大学出版局
フェティシシュ諸神の崇拜	シャルル・ド・ブロス/杉本隆司訳	2600	9784588008894	法政大学出版局
生命の哲学—有機体と自由—	ハンス・ヨーンナス/細見和之・吉本陵訳	5800	9784588009037	法政大学出版局
真理の場所/真理の名前	エティエンヌ・バリバル/堅田研一・澤里岳史訳	2400	9784588008993	法政大学出版局
啓蒙の地下文書 I	野沢協監訳	23000	9784588150531	法政大学出版局
カントの航跡のなかで—二十世紀の哲学—	トム・ロックモア/牧野英二監訳	4800	9784588009006	法政大学出版局
シネマ I *運動イメージ	ジル・ドゥルーズ/財津理・齋藤範訳	4500	9784588008559	法政大学出版局
水と夢—物質的想像力試論—	ガストン・バシュラル/及川馥訳	4200	9784588008986	法政大学出版局
歴史的現実と西田哲学—絶対的論理主義とは何か—	板橋勇仁	6300	9784588150524	法政大学出版局
生きられる歴史的世界—ディルタイ哲学のヴィジョン—	塚本正明	3500	9784588100116	法政大学出版局
言葉の暴力—「よけいなもの」の言語学—	J.-J. ルセルクル/岸正樹訳	5200	9784588008931	法政大学出版局
丸山眞男話文集 2	丸山眞男手帖の会編	4600	9784622073826	みすず書房
丸山眞男話文集 3	丸山眞男手帖の会編	4800	9784622073833	みすず書房
丸山眞男話文集 4	丸山眞男手帖の会編	4800	9784622073840	みすず書房
イデーニ II-II	エトムント・フッサール	6000	9784622019190	みすず書房
ロラン・バルトの遺産	マルティ/コンパニョン/ロジェ	4200	9784622074335	みすず書房

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
サンパウロへのサウダージ	クロード・レヴィ=ストロース/今福龍太	4000	9784622073512	みすず書房
遠近の回想 増補新版	クロード・レヴィ=ストロース/ディディエ・エリボン	4000	9784622074328	みすず書房
神話論理 IV 裸の人 1	クロード・レヴィ=ストロース	8000	9784622081548	みすず書房
構造・神話・労働 新装版	クロード・レヴィ=ストロース	2400	9784622074304	みすず書房
音と意味についての六章	ロマン・ヤコブソン	2800	9784622074311	みすず書房
人種歴史 新装版	クロード・レヴィ=ストロース	2600	9784622074298	みすず書房
なぜアーレントが重要なのか	エリザベス・ヤング・ブルーエル	3800	9784622074144	みすず書房
古典で読み解く哲学的恋愛論	竹原弘	3000	9784623054541	ミネルヴァ書房
カール・シュミット再考	中道寿一	5000	9784623054633	ミネルヴァ書房
梅原猛 聖徳太子の夢	やすいゆたか著	2400	9784623052318	ミネルヴァ書房
支配と服従の倫理学	羽入辰郎	3000	9784623052332	ミネルヴァ書房
新しいリベラリズム	J. M. ベリー	3800	9784623044221	ミネルヴァ書房
都市の風土学	木岡伸夫編著	5000	9784623052561	ミネルヴァ書房
概説日本政治思想史	西田毅編著	3200	9784623052073	ミネルヴァ書房
カント哲学	池内健次著	8500	9784623052004	ミネルヴァ書房
哲学と大学	西山雄二編	2400	9784624011796	未 来 社
改訂新版 日本思想史	守本順一郎著岩間一雄編	6800	9784624301071	未 来 社
思想学の現在と未来	田中浩編	2400	9784624301088	未 来 社
日本思想史の課題と方法	守本順一郎	5800	9784624301064	未 来 社

心 理

ヘンでいい。「心の病」の患者学	斎藤学・栗原誠子著	1600	9784272360659	大 月 書 店
ゆっくりノートブック 4 ゆるゆるスローなべてるの家 ぬけます、おります、なまけます	向谷地生良・辻信一著	1200	9784272320349	大 月 書 店

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
10代のセルフケア⑨ 眠れない、起きられない…子ども・若者にも広がる睡眠障害	キャロリン・シンブソン著水澤都加佐監修小形恵訳	1300	9784272405497	大 月 書 店
10代のセルフケア⑧ がまんしないで、性的な不快感…セクハラと性別による差別	ビクトリア・ショー著	1400	9784272405480	大 月 書 店
世界は感情で動く	マッテオ・モッテルリーニ	1600	9784314010542	紀伊國屋書店
心理学入門一歩手前	道又爾	2200	9784326298907	勁 草 書 房
タッピング入門	ロベルタ・テムズ著浅田仁子訳	2200	9784393365045	春 秋 社
音楽家のためのアレクサンダー・テクニーク入門	ベドロ・デ・アルカントラ著小野ひとみ訳	2800	9784393934951	春 秋 社
悩みを聴く技術	ジェローム・リス著国永史子訳	1700	9784393366271	春 秋 社
音楽家の身体メンテナンス BOOK	ジャウマ・ルセット・ジュベット著中村ひろ子訳	2500	9784393935224	春 秋 社
オキシトシン ～私たちのからだがつくる安らぎの物質	シャスティン・ウヴネース・モベリ	2500	9784794967350	晶 文 社
人文・社会科学のためのテキストマイニング	松村真宏・三浦麻子	2400	9784414301717	誠 信 書 房
カウンセリング実践史（日本の心理臨床1）	氏原寛	2800	9784414413144	誠 信 書 房
自閉症という体験	ドナ・ウィリアムズ著川手鷹彦訳	2300	9784414304183	誠 信 書 房
TEM ではじめる質的研究	サトウタツヤ	3000	9784414301700	誠 信 書 房
学校安全と子どもの心の危機管理	藤森和美編著	2300	9784414400502	誠 信 書 房
インターネット心理学のフロンティア	三浦麻子・森尾博昭・川浦康至編著	2800	9784414301694	誠 信 書 房
臨床心理士をめざす大学院生のための精神科実習ガイド	津川律子・橘玲子編著	2500	9784414400496	誠 信 書 房
憂うつな青年たち	ハロルド・S. コブレウィッツ著上島国利監訳	4600	9784414428612	誠 信 書 房
キャリアアップ学級経営力	蘭	1900	9784414202199	誠 信 書 房
カウセリング心理学事典	國分康孝	4800	9784414305111	誠 信 書 房
犯罪被害者	小西聖子	4800	9784414400472	誠 信 書 房

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出版社名
臨床心理士の歩みと展望	日本臨床心理士資格認定協会 20 周年記念事業委員会	2000	9784414403664	誠 信 書 房
音楽と感情の心理学	P. N. ジュスリン・J. A. スロボダ編/大串健吾監訳	5600	9784414306217	誠 信 書 房
乳児研究と成人の精神分析	B. ビービー/F. M. ラックマン著富樫公一監訳	3800	9784414414332	誠 信 書 房
図説 精神分析を学ぶ	前田重治	2800	9784414400489	誠 信 書 房
アイ・ボディ	P. グルンワルド著片桐ユズル訳	2800	9784414414325	誠 信 書 房
対人援助のためのアートセラピー	山上榮子山根落	2800	9784414400458	誠 信 書 房
事例で学ぶ認知行動療法	伊藤絵美	4000	9784414400465	誠 信 書 房
現代箱庭療法	織田尚生・大住誠著	3000	9784414400434	誠 信 書 房
こころの時代を歩く	大塚義孝著	2400	9784414403657	誠 信 書 房
新・臨床心理士になるために [平成 20 年版]	日本臨床心理士資格認定協会監修	1500	9784414400441	誠 信 書 房
傾聴術	古宮昇著	1400	9784414403640	誠 信 書 房
「発達障害」と心理臨床	伊藤良子, 角野善宏, 大山泰宏編	3800	9784422113678	創 元 社
身体の病と心理臨床	伊藤良子, 大山泰宏, 角野善宏編	3800	9784422113685	創 元 社
傷つけない技術	エリック・メイゼン著/勝野憲昭訳	1500	9784422100821	創 元 社
日本における分析心理学 ユング心理学研究 第 1 巻特別号	日本ユング心理学会編集委員会編/J. ヒルマン, 赤坂憲雄, 鎌田東二, 川戸圓, 北山修, 河合俊雄, 伊藤良子, 武野俊弥著	2000	9784422114187	創 元 社
高野山 夢の導き 夢の山 ～米国心理療法家の密教修行記～	シュリー・蓮夢・シェパード著/名取琢自訳	2500	9784422114194	創 元 社
河合隼雄と箱庭療法	松岡和子, 茂木健一郎, 高野祥子, 河合俊雄, 川戸圓著	1800	9784422114170	創 元 社
女性の不安とうつ	渡邊昌佑/阿南多津	2000	9784422114156	創 元 社

書 名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
PTSDとトラウマの心理療法 ～心身統合アプローチの理論と実践	パベット・ロスチャイルド著/久保隆訳	3500	9784422114163	創 元 社
臨床心理士の子育て支援—その理論と実践事例	岩堂美智子監修/松島恭子編	2800	9784422114149	創 元 社
精神分析とスピリチュアリティ	N.シミントン著/成田善弘監訳/北村婦美, 北村隆人訳	3800	9784422114125	創 元 社
メンタルヘルス入門 (第3版)	藤井久和, 藤本修編/荒賀文子, 大月則子, 荒井貫史, 大久保真喜子, 夏目誠, 東牧子, 大久保圭策著	1800	9784422114132	創 元 社
胎児の脳 老人の脳	アルベルト・オリヴェリオ, アンナ・オリヴェリオ・フェッラーリス著/川本英明訳	2300	9784422114118	創 元 社
難事例と絶望感の治療ポイント	平井孝男	2400	9784422114101	創 元 社
河合隼雄のスクールカウンセリング講演録	河合隼雄著/村山正治編/滝口俊子編著	2000	9784422114095	創 元 社
精神科医がものを書くとき	中井久夫	1200	9784480092045	筑 摩 書 房
増補改訂 剣の精神誌	甲野善紀	1500	9784480092090	筑 摩 書 房
あなたの勉強法はどこがいけないのか?	西林克彦	720	9784480688064	筑 摩 書 房
めげても立ちなおる心の習慣	岡本正善	780	9784480688033	筑 摩 書 房
安全, でも安心できない	中谷内一也	700	9784480064493	筑 摩 書 房
高校生のための精神分析入門	清田友則	740	9784480064530	筑 摩 書 房
家族の心はいま 研究と臨床の対話から	柏木恵子, 平木典子	3200	9784130111249	東京大学出版会
専門職としての相談援助活動	原田杏子	5600	9784130161145	東京大学出版会
長期入院児の心理と教育的援助 院内学級のフィールドワーク	谷口明子	5800	9784130161138	東京大学出版会
虐待された子どもたちの自立 現象学からみた思春期の意識	遠藤野ゆり	6400	9784130562157	東京大学出版会

書 名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
こころと言葉 進化と認知科学のアプローチ	長谷川寿一編, C. ラマール編, 伊藤たかね編	3200	9784130830485	東京大学出版会
臨床認知心理学	小谷津孝明編, 小川俊樹編, 丹野義彦編	3600	9784130111232	東京大学出版会
心理学 第3版	鹿取廣人編, 杉本敏夫編, 鳥居修見編	2400	9784130120470	東京大学出版会
赤ちゃんの視覚と心の発達	山口真美, 金沢創	2400	9784130120487	東京大学出版会
精神病の病理と治療	ヴィルヘルム・グリーゼンガー, 小俣和一郎訳, 市野川孝訳	12000	9784130604086	東京大学出版会
心理援助のネットワークづくり 〈関係系〉の心理臨床	中釜洋子, 高田治, 齋藤憲司	2800	9784130133029	東京大学出版会
家族が知りたい統合失調症への対応 Q&A	高森信子	1500	9784535983090	日本評論社
臨床行動分析のABC	松見淳子武藤崇・米山直樹	3300	9784535983007	日本評論社
こころにおける身体 身体におけるこころ	河合俊雄	2800	9784535048348	日本評論社
非定型うつ病	貝谷久宣他編	2800	9784535982918	日本評論社
もう少し知りたい統合失調症の薬の脳	福田正人	1500	9784535804173	日本評論社
パニック障害はここまでわかった	竹内龍雄他	1600	9784535982987	日本評論社
パパの色鉛筆	山登敬之	1700	9784535562523	日本評論社
水イメージからみた心理療法	田熊友紀子	3200	9784535562608	日本評論社
認知行動療法の技法と臨床	内山喜久雄・坂野雄二	2800	9784535982789	日本評論社
境界性パーソナリティ障害	小羽俊士	3400	9784622074458	みすず書房
夢と精神病	アンリ・エー	3800	9784622074243	みすず書房
日時計の影	中井久夫	3000	9784622074373	みすず書房
臨床瑣談	中井久夫	1800	9784622074168	みすず書房
絶対役立つ教養の心理学	藤田哲也	2400	9784623053384	ミネルヴァ書房
フィールドワークの技法と実際Ⅱ	箕浦康子編著	2400	9784623053551	ミネルヴァ書房
社会心理学	遠藤由美編著	2500	9784623053391	ミネルヴァ書房
ジェノグラムの臨床	M. マクゴールドリック/R. ガーソン/ S. シェレンバーガー著	5000	9784623050833	ミネルヴァ書房

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
バーンアウトのエスノグラフィー	落合美貴子	5000	9784623054145	ミネルヴァ書房
よくわかる心理学	無藤隆ほか編	3000	9784623052509	ミネルヴァ書房
私と他者と語りの世界	浜田寿美男著	2500	9784623053254	ミネルヴァ書房
よくわかる発達心理学 第2版	無藤隆ほか編	2400	9784623053797	ミネルヴァ書房
発達116号		1200	9784623052790	ミネルヴァ書房
発達117号		1200	9784623053612	ミネルヴァ書房
発達118号		1200	9784623054763	ミネルヴァ書房
臨床心理学	伊藤良子編著	2500	9784623052844	ミネルヴァ書房
愛着臨床と子ども虐待	藤岡孝志著	5000	9784623052240	ミネルヴァ書房

宗 教

マージェリー・ケンブの書	石井美樹子訳	9500	9784766415681	慶應大学出版会
仏教の基礎知識 新版	水野弘元	1700	9784393106082	春秋社
ザ・モーゼス・コード	ジェイムスF.トゥワイマン著 ブレングラ 監訳山崎直仁訳	1600	9784393299234	春秋社
大乘起信論・楞伽經 高崎直道著作集第八卷	高崎直道	9500	9784393112885	春秋社
参禅入門	大森曹玄	1700	9784393142783	春秋社
空海 塔のコスモロジー	武澤秀一	2200	9784393135457	春秋社
正法眼蔵4 道元禅師全集④	水野弥穂子	5000	9784393150245	春秋社
神道おふくろの味	葉室頼昭	1700	9784393299241	春秋社
ココロを開くアイコトバ	島本了愛	1500	9784393365069	春秋社
新しい人間像を求めて	聖心女子大学キリスト教文化研究所編	2500	9784393212141	春秋社
ナザレ派のイエス	前島誠	2300	9784393332894	春秋社
氣功で読み解く老子	廖亦陽	2200	9784393312964	春秋社
ダルマ・ライフ	アラン・クレメンツ著三木直子訳	2500	9784393137291	春秋社

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
ナザレのイエス	教皇ベネディクト 16 世ヨゼフ・ラツィンガー著里野泰昭訳	3000	9784393332771	春 秋 社
実践「ヨーガ・スートラ」入門	番場裕之	2300	9784393710685	春 秋 社
仏教瞑想論	箕輪顕量	2200	9784393133781	春 秋 社
光を伝えた人々	青山俊董	1700	9784393153321	春 秋 社
小説ブッダ	ティク・ナット・ハン著池田久代約	2500	9784393332856	春 秋 社
未来の宗教 空と光明	ドン・キュービット著藤田一照	2800	9784393323212	春 秋 社
大乘仏教思想論Ⅰ 高崎直道著作集第二巻	高崎直道	9500	9784393112823	春 秋 社
大乘仏教思想論Ⅱ 高崎直道著作集第三巻	高崎直道	9500	9784393112830	春 秋 社
空海をめぐる人物日本密教史	正木晃	2200	9784393172810	春 秋 社
DVD ブック 実践ブッダの瞑想法	地橋秀雄	2500	9784393970423	春 秋 社
幸せを生むく魔法>	高田明和	1600	9784393106075	春 秋 社
<修験>のころ	五条順教塩沼亮潤	1600	9784393191095	春 秋 社
僧医として生きる	対本宗訓	1700	9784393935378	春 秋 社
無相大師の禪・十牛図	則竹秀南	1600	9784393142776	春 秋 社
TAOのセラピー	アダム・J. ジャクソン著長谷川淳史監訳	1500	9784393365021	春 秋 社
反密教学	津田真一	3200	9784393112731	春 秋 社
ジャータカ全集第①巻 (オンデマンド版)	中村元監修	6500	9784393116210	春 秋 社
ジャータカ全集第②巻 (オンデマンド版)	中村元監修	5000	9784393116227	春 秋 社
ジャータカ全集第③巻 (オンデマンド版)	中村元監修	5000	9784393116234	春 秋 社
ジャータカ全集第④巻 (オンデマンド版)	中村元監修	5000	9784393116241	春 秋 社
ジャータカ全集第⑤巻 (オンデマンド版)	中村元監修	5000	9784393116258	春 秋 社
ジャータカ全集第⑥巻 (オンデマンド版)	中村元監修	5000	9784393116265	春 秋 社
ジャータカ全集第⑦巻 (オンデマンド版)	中村元監修	5000	9784393116272	春 秋 社
ジャータカ全集第⑧巻 (オンデマンド版)	中村元監修	5000	9784393116289	春 秋 社
ジャータカ全集第⑨巻 (オンデマンド版)	中村元監修	5000	9784393116296	春 秋 社

書 名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
ジャータカ全集第⑩巻 (オンデマンド版)	中村元監修	5000	9784393116302	春 秋 社
台密思想の形成	水上文義	18000	9784393112724	春 秋 社
<いのち>の呼吸 興宗和尚のよろず問答	板橋興宗	1500	9784393153314	春 秋 社
良寛伝記考説	高橋庄次	9000	9784393441633	春 秋 社
ダライ・ラマ ソクチェン入門	ダライ・ラマ 14 世著宮坂有洪訳	280	9784393133767	春 秋 社
ダライ・ラマ 瞑想入門	ダライ・ラマ 14 世著鈴木樹代子訳	2500	9784393133774	春 秋 社
人生の秋に ホイヴェルス随想選集	ヘルマン・ホイヴェルス	1800	9784393216170	春 秋 社
中観と空 I 梶山雄一著作集第④巻	梶山雄一著御牧克己編	9500	9784393112649	春 秋 社
古代マヤの暦 予言・天文学・占星術 (アルケミスト双書)	ジェフ・ストレイ著/駒田曜訳	1200	9784422214719	創 元 社
ルーン文字 古代ヨーロッパの魔術文字 (アルケミスト双書)	ポール・ジョンソン著/藤田優里子訳	1200	9784422214726	創 元 社
日本人のこころの言葉 空海	村上保壽	1200	9784422800516	創 元 社
人を生かすキリスト教教育	船本弘毅著	1600	9784422143774	創 元 社
地図と絵画で読む 聖書大百科 Biblica ビブリカ	バリー・J. バイツェル監修/船本弘毅日 本語版監修/山崎正浩訳者代表	28500	9784422143743	創 元 社
禪語遊心	玄侗宗久	680	9784480424891	筑 摩 書 房
宗教学の名著 30	島菌進	820	9784480064424	筑 摩 書 房
回教概論	大川周明	1000	9784480091673	筑 摩 書 房
私の宗教入門	島田裕巳	740	9784480424648	筑 摩 書 房
キリシタン時代の偶像崇拜	浅見雅一	7200	9784130266055	東京大学出版会
宗教と現代がわかる本 2009	渡邊直樹編集	1600	9784582485417	平 凡 社
破戒と男色の仏教史	松尾剛次著	720	9784582854411	平 凡 社
増補大神宮叢書 17 度会神道大成 前篇	神宮司庁蔵版	10000	9784642003971	吉 川 弘 文 館

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
歴 史				
人文・社会科学研究とオーラル・ヒストリー	法政大学大原社会問題研究所編	3400	9784275008244	御茶の水書房
両大戦間期の組合製糸	田中雅孝	7000	9784275008206	御茶の水書房
留学生派遣から見た近代日中関係史	大里浩秋・孫安石編著	9200	9784275008138	御茶の水書房
近代中国と銀行の誕生	林幸司	5200	9784275008084	御茶の水書房
幕末期武士/士族の思想と行為	竹村英二	6800	9784275005946	御茶の水書房
朝鮮民族の近代国家形成史序説	滝沢秀樹	3200	9784275008077	御茶の水書房
日本近代化の構造的特質	北條浩	9000	9784275008046	御茶の水書房
近代中国における民俗学の系譜	子安加余子	5000	9784275005984	御茶の水書房
近代開拓村と神社	遠山由紀子	5600	9784275005885	御茶の水書房
戦後日本スタディーズ③ 80・90年代	岩崎稔, 上野千鶴子, 北田暁大, 小森陽一, 成田龍一	2400	9784314010535	紀伊國屋書店
開拓使と幕臣	門松秀樹	4800	9784766416107	慶應大学出版会
世界の中の日本の役割を考えるー岩倉使節団を出発点としてー	米欧亜回覧の会編	2800	9784766415650	慶應大学出版会
中世主義を超えて	松田隆美編著	5800	9784766415957	慶應大学出版会
近代都市バルセロナの形成	山道佳子他	4800	9784766415742	慶應大学出版会
寛容なる都 コンスタンティノーブルとイスタンブール	野中恵子	2500	9784393332870	春秋社
外人の見た幕末・明治初期 日本図絵【生活・技術篇】	池田政敏	4800	9784393424568	春秋社
外人の見た幕末・明治初期 日本図絵【文化・景觀篇】	池田政敏	4800	9784393424575	春秋社
シモン・ボリーバル	ゴゼ・ルイス・サルセド＝バスタルド水野一訳	4800	9784393327050	春秋社
がんこなハマーシュタイン ～ヒトラーに屈しなかった将軍	H. M. エンツェンスベルガー	2600	9784794967442	晶文社
大阪の教科書 ～大阪検定公式テキスト	橋爪紳也監修, 創元社編集部編	1900	9784422250540	創元社

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
世界の城と要塞	アンリ・スティルラン著/森山隆訳	4300	9784422239828	創 元 社
世界の20世紀建築	ベルトラン・ルモアンヌ著/森山隆訳	4300	9784422239859	創 元 社
ケルトの芸術と文明	ロイド・ラング、ジェニファー・ラング 著/鶴岡真弓訳	3200	9784422230238	創 元 社
ギザの大ピラミッド	ジャン＝ピエール・コルテジアーニ著/ 吉村作治監修/山田美明訳	1500	9784422212012	創 元 社
ガリレオ ―はじめて「宇宙」を見た男	ジャン＝ピエール・モーリ著/田中一郎 監修	1500	9784422212005	創 元 社
パチンコ誕生—シネマの世紀の大衆娯楽—	杉山一夫	3200	9784422210131	創 元 社
戦闘技術の歴史1 古代編	サイモン・アングリム、フィリス・ G. ジェスティス、ロブ・S. ライス、ス コット・M. ラッシュ、ジョン・セラー ティ著/松原俊文監修/天野淑子訳	4500	9784422215044	創 元 社
英国バブサイン読本 ～酒場から読み解く 歴史・文 化・旅～	井田俊隆編	2400	9784422230221	創 元 社
龍馬 最後の真実	菊地明	800	9784480425867	筑 摩 書 房
王の身体 王の肖像	黒田日出男	1400	9784480092007	筑 摩 書 房
倭国の時代	岡田英弘	880	9784480425393	筑 摩 書 房
生きている二・二六	池田俊彦	860	9784480425720	筑 摩 書 房
越境の古代史—倭と日本をめぐるアジアネットワーク	田中史生	760	9784480064684	筑 摩 書 房
天皇の学校 ―昭和の帝王学と高輪御学問所	大竹秀一	950	9784480425355	筑 摩 書 房
日本史への挑戦 ―「関東学」の創造をめざして	森浩一/網野善彦	1000	9784480091901	筑 摩 書 房
縄文人追跡	小林達雄	720	9784480424754	筑 摩 書 房
建築史的モンダイ	藤森照信	740	9784480064295	筑 摩 書 房
最後の幕臣 小栗上野介	星亮一	740	9784480424594	筑 摩 書 房
誰が太平洋戦争を始めたのか	別宮暖朗	640	9784480424655	筑 摩 書 房

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
寺社勢力の中世—無縁・有縁・移民	伊藤正敏	760	9784480064356	筑 摩 書 房
中国近代外交の胎動	岡本隆司編, 川島真編	4000	9784130210737	東京大学出版会
秋田蘭画の近代 小田野直武「不忍池図」を読む	今橋理子	6500	9784130802123	東京大学出版会
1945年の歴史認識 〈終戦〉をめぐる日中対話の試み	劉傑編, 川島真編	3200	9784130230568	東京大学出版会
朝鮮開化思想とナショナリズム 近代朝鮮の形成	月脚達彦	7200	9784130261340	東京大学出版会
日本古代国家と支配理念	有富純也	5200	9784130262200	東京大学出版会
日台関係史 1945-2008	川島真, 清水麗, 松田康博, 楊永明	2800	9784130322119	東京大学出版会
狼の民俗学 人獣交渉史の研究	狼の民俗学人獣交渉史の研究新刊	7200	9784130563055	東京大学出版会
「聖なるロシア」のイスラーム 17-18世紀タタール人の正教改宗	濱本真実	208	9784130261357	東京大学出版会
明治地方自治体制の起源 近世社会の危機と制度変容	松沢裕作	8700	9784130262194	東京大学出版会
南部アフリカ社会の百年 植民地支配・冷戦・市場経済	小倉充夫	4000	9784130561044	東京大学出版会
日韓 歴史家の誕生	木畑洋一編, 車河淳編	2400	9784130230551	東京大学出版会
中世王権と王朝儀礼	遠藤基郎	7600	9784130262187	東京大学出版会
菱川師宣と浮世絵の黎明	浅野秀剛	5800	9784130802109	東京大学出版会
近世京都の都市と社会	杉森哲也	7200	9784130201445	東京大学出版会
南京事件 70周年国際シンポジウムの記録	記録集編纂委員会	4500	9784535516694	日 本 評 論 社
汚水処理の社会史	金子光男	7300	9784535585331	日 本 評 論 社
白水 U ブックス ノルマン騎士の地中海興亡史	山辺規子	1300	9784560721025	白 水 社
文庫クセジュ カルタゴの歴史	マリア=ジュリア・アマダジ=グッソ	1050	9784560509357	白 水 社
モンマルトル風俗事典	鹿島茂	3200	9784560026434	白 水 社
神社と古代王権祭祀 (新装版)	大和岩雄	6600	9784560031957	白 水 社
神社と古代民間祭祀 (新装版)	大和岩雄	6600	9784560031964	白 水 社
ナチが愛した二重スパイ	グレゴール・マッキンタイア	2400	9784560026427	白 水 社
文庫クセジュ エトルリア人	ドミニク・ブリケル	1050	9784560509326	白 水 社
日本にあった朝鮮王国 (新装版)	大和岩雄	2400	9784560031940	白 水 社

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
ヤングハズバンド伝	金子民雄	7500	9784560030486	白水社
モスクワ攻防 1941	ロドリク・ブレースウェート	3600	9784560026359	白水社
新訂版 昭和・平成史年表	平凡社編	3800	9784582485417	平凡社
青年ヒトラー	大澤武男	760	9784582854558	平凡社
ガリア戦記	カエサル著	1500	9784582766646	平凡社
シーボルトの日本報告	栗原福也編訳	2800	9784582807844	平凡社
東洋学事始	窪寺紘一著	3000	9784582834260	平凡社
歴史と民俗 25	神奈川大学日本常民文化研究所編	3000	9784582458282	平凡社
完全版 知恵の七柱 2	T. E. ロレンス著	3000	9784582807790	平凡社
完全版 知恵の七柱 3	T. E. ロレンス著	3000	9784582807813	平凡社
完全版 知恵の七柱 4	T. E. ロレンス著	3000	9784582807837	平凡社
中国歴史地図	朴漢斉編著	3800	9784582411072	平凡社
昭和を動かしたアメリカ情報機関	有馬哲夫著	760	9784582854480	平凡社
明治の女子留学生	寺沢龍著	800	9784582854497	平凡社
洛中洛外の群像	瀬田勝哉著	1700	9784582766608	平凡社
ベンヤミン 子どものための文化史	ヴァルター・ベンヤミン著	1700	9784582766578	平凡社
朝鮮戦争の社会史	金東椿, 金美恵	4800	9784582454284	平凡社
英雄が語るトロイ戦争	ピロストラトス著	1300	9784582766523	平凡社
江戸・都市の中の異界	内藤正敏	3900	9784588270444	法政大学出版局
楽市論—初期信長の流通政策—	安野眞幸	6300	9784588250552	法政大学出版局
半開きの〈黄金の扉〉	北美幸	3200	9784588603075	法政大学出版局
王—神話と象徴—	ジャン＝ポール・ルー／浜崎設夫訳	12000	9784588009082	法政大学出版局
社会国家を生きる—20世紀ドイツにおける国家・共同性・個人—	川越修・辻英史編	3600	9784588603037	法政大学出版局
春の七草	有岡利幸	2600	9784588214615	法政大学出版局
歴史空間としての海域を歩く	早瀬晋三	2500	9784588335013	法政大学出版局

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
未来と対話する歴史	早瀬晋三	2800	9784588335020	法政大学出版局
室町文化論考—文化史のなかの公武—	川嶋將生	5500	9784588250545	法政大学出版局
秋の七草	有岡利幸	2800	9784588214516	法政大学出版局
熊（くま）	赤羽正春	3500	9784588214417	法政大学出版局
九鬼隆一の研究 隆一・波津子・周造	高橋眞司	6800	9784624112011	未 来 社
日中和平工作 回想と証言 1937-1947	今井武夫編	16000	9784622074380	み ず ず 書 房
大隈重信関係文書 5	早稲田大学大学史資料センター編	10000	9784622082057	み ず ず 書 房
史上最悪のインフルエンザ 新装版	アルフレッド・W. クロスビー	4400	9784622074526	み ず ず 書 房
東京裁判における通訳	武田珂代子	3800	9784622074229	み ず ず 書 房
糸と痕跡	カルロ・ギンズブルグ	3500	9784622074366	み ず ず 書 房
神経ガス戦争の世界史	ジョナサン・B. タッカー	6500	9784622074137	み ず ず 書 房
ヨーロッパ戦後史 下 1971-2005	トニー・ジャット	6000	9784622073420	み ず ず 書 房
東京裁判 第二次大戦後の法と正義の追求	戸谷由麻	5200	9784622074069	み ず ず 書 房
林 忠正	木々康子	3000	9784623054121	ミネルヴァ書房
山東京伝	佐藤至子	3000	9784623054596	ミネルヴァ書房
近代日本と三井物産	木山実著	5000	9784623053728	ミネルヴァ書房
帝国・国家・ナショナリズム	木村雅昭著	3500	9784623052431	ミネルヴァ書房
二つの戦後・二つの近代	望田幸男著	2800	9784623053841	ミネルヴァ書房
多言語国家スペインの社会動態を読み解く	竹中克行	7000	9784623053773	ミネルヴァ書房
空間と移動の社会史	前川和也	6000	9784623047758	ミネルヴァ書房
空也	石井義長	3000	9784623053735	ミネルヴァ書房
北米マイノリティと市民権	高村宏子	5000	9784623052479	ミネルヴァ書房
「鎖国」という言説	大島明秀	6000	9784623053124	ミネルヴァ書房
紀貫之	神田龍身	3000	9784623053438	ミネルヴァ書房
フェノロサ夫人の日本日記	村形明子編訳	5000	9784623052417	ミネルヴァ書房
雪村周継	赤澤英二	2800	9784623053179	ミネルヴァ書房

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
幕末のフランス外交官	アラン・コルナイユ著	7000	9784623051823	ミネルヴァ書房
陸 羯南	松田宏一郎著	3000	9784623052806	ミネルヴァ書房
ヨーロッパのなかのドイツ	ヴォルフ・D. グルーナー著丸畠宏太/進藤修一/野田昌吾訳	6500	9784623050031	ミネルヴァ書房
ローマ法の歴史	ウルリッヒ・マンテ著田中実/瀧澤栄治訳	2500	9784623052400	ミネルヴァ書房
北里柴三郎	福田真人	2800	9784623049813	ミネルヴァ書房
力道山	岡村正史	2500	9784623052554	ミネルヴァ書房
外交儀礼から見た幕末日露文化交流史	生田美智子	6500	9784623050802	ミネルヴァ書房
イギリス帝国期の国家財政運営	藤田哲雄著	7500	9784623051922	ミネルヴァ書房
手塚治虫	竹内オサム	2400	9784623052516	ミネルヴァ書房
フランク・ロイド・ライト	大久保美春著	2400	9784623052523	ミネルヴァ書房
西洋の歴史基本用語集〔古代・中世編〕	朝治啓三編	2200	9784623050871	ミネルヴァ書房
戦国史研究 第56号	戦国史研究会編集	667	9784642092241	吉川弘文館
古文書研究 第66号	日本古文書学会編	3800	9784642087629	吉川弘文館
皇室制度史料 儀制・誕生 三	宮内庁書陵部編纂	11500	9784642011495	吉川弘文館
正倉院文書研究 11	正倉院文書研究会編	6000	9784642089319	吉川弘文館
増補大神宮叢書 18 度会神道大成 後編	神宮司庁蔵版	10000	9784642003988	吉川弘文館
日本考古学 第26号	日本考古学協会	4000	9784642091015	吉川弘文館
松尾大社史料集 記録篇三	松尾大社史料集編修委員会編	10000	9784642011020	吉川弘文館
近世の宗教と社会 3	澤博勝・高埜利彦編	9300	9784642034319	吉川弘文館
古代日本の京職と京戸	市川理恵著	11000	9784642024730	吉川弘文館
歴史文化セレクション 空海	高木神元著	2100	9784642063487	吉川弘文館
物部・蘇我氏と古代王権	黛弘道著	1900	9784642063494	吉川弘文館
広開土王碑墨本の研究	武田幸男著	20000	9784642081481	吉川弘文館
近世の在村文化と書物出版	杉仁著	13000	9784642034371	吉川弘文館

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
ロシア人の見た幕末日本	伊藤一哉著	2800	9784642080200	吉 川 弘 文 館
満鉄を知るための十二章	天野博之著	3000	9784642080217	吉 川 弘 文 館
戦争の日本史 20 世界史の中の日露戦争	山田朗著	2500	9784642063302	吉 川 弘 文 館
事典 日本古代の道と駅	山下良著	8000	9784642014502	吉 川 弘 文 館
直木孝次郎と奈良・万葉を歩く 春夏	直木孝次郎著	1800	9784642079938	吉 川 弘 文 館
年中行事大辞典	加藤友康・高埜利彦・長沢利明・山田邦明編	26000	9784642014434	吉 川 弘 文 館
禪と地域社会	広瀬良弘編	12000	9784642028837	吉 川 弘 文 館
中世の人と自然の関係史	水野章二著	12000	9784642028844	吉 川 弘 文 館
日本史年表・地図 第15版	児玉幸多編	1300	9784642095068	吉 川 弘 文 館
世界史年表・地図 第15版	亀井高孝・三上次男・林健太郎・堀米庸三編	1400	9784642095075	吉 川 弘 文 館
中世都市の空間構造	山村亜希著	11000	9784642028820	吉 川 弘 文 館
近世陰陽道組織の研究	梅田千尋著	11000	9784642034364	吉 川 弘 文 館
日本古代王権の構造と展開	佐藤長門著	13000	9784642024716	吉 川 弘 文 館
近代日本の企業家と政治	有馬学編	10000	9784642037907	吉 川 弘 文 館
鎌倉時代造像論	塩澤寛樹著	30000	9784642079082	吉 川 弘 文 館
対外関係史辞典	田中健夫・石井正敏編	25000	9784642014496	吉 川 弘 文 館
日本古代の王権と山野河海	森田喜久男著	9500	9784642024723	吉 川 弘 文 館
シリーズ近代美術のゆくえ 日本〈工芸〉の近代	森仁史著	4200	9784642037891	吉 川 弘 文 館
災害と江戸時代	江戸遺跡研究会編	5600	9784642034340	吉 川 弘 文 館
人物で読む近代日本外交史	佐道明広・小宮一夫・服部龍二編	2800	9784642079976	吉 川 弘 文 館
人物で読む現代日本外交史	佐道明広・小宮一夫・服部龍二編	2800	9784642079983	吉 川 弘 文 館
近世の死と政治文化	中川学著	3000	9784642034357	吉 川 弘 文 館
写真集 近代皇族の記憶	学習院大学史料館編	12000	9784642037884	吉 川 弘 文 館
戦国期の貨幣と経済	川戸貴史著	11000	9784642028806	吉 川 弘 文 館

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
中世後期細川氏の権力構造	古野貢著	9800	9784642028813	吉 川 弘 文 館
中近世の村落と水辺の環境史	佐野静代著	13000	9784642028790	吉 川 弘 文 館
遣唐使と古代日本の対外政策	森公章著	11500	9784642024709	吉 川 弘 文 館
誰でも読める日本現代史年表	吉川弘文館編集部編	4200	9784642014465	吉 川 弘 文 館
歴史の残像	瀬野精一郎著	3000	9784642079969	吉 川 弘 文 館
日中美術考古学研究	山本忠尚著	18000	9784642081474	吉 川 弘 文 館
水墨画・墨蹟の魅力	正木美術館編	3800	9784642079075	吉 川 弘 文 館
近世朝廷社会と地下官人	西村慎太郎著	9500	9784642034333	吉 川 弘 文 館
特別な場所の特別な時間	正木美術館編	1714	9784642079952	吉 川 弘 文 館
よくわかる古文書教室	佐藤孝之・実松幸男・宮原一郎著	2400	9784642079945	吉 川 弘 文 館
明治初期の福祉と教育	戸田金一著	9500	9784642037877	吉 川 弘 文 館
直木孝次郎と奈良・万葉を歩く 秋冬	直木孝次郎著	1700	9784642079921	吉 川 弘 文 館
吾妻鏡必携	関幸彦・野口実編	3600	9784642079914	吉 川 弘 文 館
室町絵巻の魔力	高岸輝著	3800	9784642079068	吉 川 弘 文 館
鎌倉幕府軍制と御家人制	高橋典幸著	9500	9784642028783	吉 川 弘 文 館
歴史と古典 万葉集を読む	古橋信孝編	2800	9784642071536	吉 川 弘 文 館
歴史と古典 将門記を読む	川尻秋生編	2800	9784642071598	吉 川 弘 文 館
歴史と古典 信長公記を読む	堀新編	2800	9784642071581	吉 川 弘 文 館
歴史と古典 平家物語を読む	河合康編	2800	9784642071574	吉 川 弘 文 館
歴史と古典 今昔物語集を読む	小峯和明編	2800	9784642071567	吉 川 弘 文 館
歴史と古典 北野天神縁起を読む	竹居明男編	2800	9784642071543	吉 川 弘 文 館
歴史と古典 太平記を読む	市沢哲編	2800	9784642071550	吉 川 弘 文 館
人物叢書 255 只野真葛	関民子著	2000	9784642052481	吉 川 弘 文 館
人物叢書 256 平城天皇	春名宏昭著	2000	9784642052498	吉 川 弘 文 館
人物叢書 257 世阿弥	今泉淑夫著	2100	9784642052504	吉 川 弘 文 館
人物叢書 258 河野広中	長井純市著	2000	9784642052511	吉 川 弘 文 館

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
歴史文化ライブラリー260 古事記の歴史意識	矢嶋泉著	1800	9784642056601	吉 川 弘 文 館
歴史文化ライブラリー261 文明開化 失われた風俗	百瀬響著	1700	9784642056618	吉 川 弘 文 館
歴史文化ライブラリー262 それでも江戸は鎖国だったのか	片桐一男著	1700	9784642056625	吉 川 弘 文 館
歴史文化ライブラリー263 明治の皇室建築	小沢朝江著	1700	9784642056632	吉 川 弘 文 館
歴史文化ライブラリー264 中世の巨大地震	矢田俊文著	1700	9784642056649	吉 川 弘 文 館
歴史文化ライブラリー265 中世の借金事情	井原今朝男著	1700	9784642056656	吉 川 弘 文 館
歴史文化ライブラリー266 持統女帝と皇位継承	倉本一宏著	1700	9784642056663	吉 川 弘 文 館
歴史文化ライブラリー267 敵国人抑留	小宮まゆみ著	1800	9784642056670	吉 川 弘 文 館
歴史文化ライブラリー268 邪馬台国 魏使が歩いた道	丸山雍成著	1800	9784642056687	吉 川 弘 文 館
歴史文化ライブラリー269 戦国を生きた公家の妻たち	後藤みち子著	1700	9784642056694	吉 川 弘 文 館
歴史文化ライブラリー270 風水と家相の歴史	宮内貫久著	1700	9784642056700	吉 川 弘 文 館
歴史文化ライブラリー271 〈いのち〉をめぐる近代史	岩田重則著	1700	9784642056717	吉 川 弘 文 館
人と動物の日本史 1 動物の考古学	西本豊弘編	2800	9784642062756	吉 川 弘 文 館
人と動物の日本史 2 歴史の中の動物たち	中澤克昭編	2800	9784642062763	吉 川 弘 文 館
人と動物の日本史 3 動物と現代社会	菅豊編	2800	9784642062770	吉 川 弘 文 館
人と動物の日本史 4 信仰の中の動物たち	中村生雄・三浦佑之編	2800	9784642062787	吉 川 弘 文 館
直木孝次郎 古代を語る 1 古代の日本	直木孝次郎著	2600	9784642078825	吉 川 弘 文 館
直木孝次郎 古代を語る 2 邪馬台国と卑弥呼	直木孝次郎著	2600	9784642078832	吉 川 弘 文 館
直木孝次郎 古代を語る 3 神話と古事記・日本書紀	直木孝次郎著	2600	9784642078849	吉 川 弘 文 館
直木孝次郎 古代を語る 4 伊勢神宮と古代の神々	直木孝次郎著	2600	9784642078856	吉 川 弘 文 館
直木孝次郎 古代を語る 5 大和王権と河内王権	直木孝次郎著	2600	9784642078863	吉 川 弘 文 館
直木孝次郎 古代を語る 6 古代國家の形成	直木孝次郎著	2600	9784642078870	吉 川 弘 文 館
直木孝次郎 古代を語る 7 古代の動乱	直木孝次郎著	2600	9784642078887	吉 川 弘 文 館
現代語訳 吾妻鏡 4	五味文彦・本郷和人編	2000	9784642027113	吉 川 弘 文 館
現代語訳 吾妻鏡 5	五味文彦・本郷和人編	2600	9784642027120	吉 川 弘 文 館

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
戦争の日本史 3 蝦夷と東北戦争	鈴木拓也著	2500	9784642063135	吉 川 弘 文 館
戦争の日本史 10 東国の戦国合戦	市村高男著	2500	9784642063203	吉 川 弘 文 館
鎌倉遺文研究 第 22 号	鎌倉遺文研究会編	2000	9784642092678	吉 川 弘 文 館
鎌倉遺文研究 第 23 号	鎌倉遺文研究会編	2000	9784642092685	吉 川 弘 文 館
社 会				
しのびよる破局 生体の悲鳴が聞こえるか	辺見庸	1300	9784272330584	大 月 書 店
デンマークの高齢者が世界一幸せなわけ	澤渡夏代ブランド	1700	9784272360642	大 月 書 店
オックスフォード科学の肖像 マーガレット・ミード	オーウェン・ギンガリッチ編集代表	1800	9784272440528	大 月 書 店
はるかな異文化への航海				
クレスコファイル① 環境教育 善意の落とし穴	田中優著	1000	9784272408016	大 月 書 店
クレスコファイル② アメリカは変わるか? 立ち上がる市民たち!	堤未果	1000	9784272408023	大 月 書 店
ゆっくりノートブック② テクテクノロジー革命 非電化とスロービジネスが未来をひらく	藤村靖之・辻信一著	1200	9784272320325	大 月 書 店
ゆっくりノートブック③ エコとピースの交差点 ラミス先生のわくわく平和学	C. ダグラス・ラミス/辻信一著	1200	9784272320332	大 月 書 店
オルタナティブ・メディア 変革のための市民メディア入門	ミッチ・ウォルツ著	2800	9784272330577	大 月 書 店
豊かに生き果たす 重症心身障害児・者の生と「選択的医療」	山田美智子著	1500	9784272360635	大 月 書 店
格差とイデオロギー	碓井敏正著	2400	9784272430789	大 月 書 店
こんなニッポンに誰がした 森永卓郎の政治経済学講座	森永卓郎著	1400	9784272140565	大 月 書 店
地域づくりと協同組合運動 食と農を協同でつなぐ	田中秀樹著	7500	9784272140572	大 月 書 店

書 名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
高いわけ、安いわけ 食品表示で読み解く価格差	NACS 東日本支部食部会編著	1500	9784272400874	大 月 書 店
買物難民 もうひとつの高齢者問題	杉田聡著	1600	9784272360628	大 月 書 店
人間らしく生きるための社会保障運動	中央社会保障推進協議会編	6000	9784272360611	大 月 書 店
温泉観光の実証的研究	布山裕一著	5000	9784275008282	御 茶 の 水 書 房
サッカーからみる日韓のナショナルリティとローカリティ	金明美著 (KimMyungmi)	7800	9784275008213	御 茶 の 水 書 房
表象としての日本	神奈川大学人文学研究所編	5600	9784275008183	御 茶 の 水 書 房
中国の森林再生	関良基	2200	9784275008145	御 茶 の 水 書 房
台頭中国の対外関係	中居良文編著	2200	9784275008169	御 茶 の 水 書 房
凌辱されるいのち ―沖繩・尊厳の回復へ―	安里英子	2400	9784275008022	御 茶 の 水 書 房
『先端医療』の落とし穴	仲正昌樹・篠原聖二・佐藤功行・原純一・宮脇正和	1800	9784275005922	御 茶 の 水 書 房
性同一性障害	石田仁編著	2800	9784275008060	御 茶 の 水 書 房
援助者の思想	リンダ・ジンガロ著	3200	9784275005939	御 茶 の 水 書 房
アフリカと政治 紛争と貧困とジェンダー	戸田真紀子	2400	9784275005892	御 茶 の 水 書 房
家族・都市・村落生活の近現代	平野敏政編	2800	9784766416015	慶應大学出版会
ポスト育児期の女性と働き方	西村純子	3800	9784766416053	慶應大学出版会
占領下日本の学校図書館改革	中村百合子	5200	9784766416060	慶應大学出版会
高度産業社会と構造的疎外	三浦雄二	6800	9784766415995	慶應大学出版会
アジア系専門職移民の現在	石井由香他	3200	9784766416039	慶應大学出版会
消費者間の相互作用についての基礎研究	濱岡豊	3500	9784766415971	慶應大学出版会
Khmer People in Southern Vietnam (全欧文)	大橋久利他	9500	9784766415643	慶應大学出版会
窓あるいは鏡	水島久光・西兼志	3000	9784766415667	慶應大学出版会
ニュースはどのように理解されるか	W. ラッセル・ニューマン	2800	9784766415582	慶應大学出版会
日常生活と旅の社会学	山岸健・山岸美穂	4800	9784766415537	慶應大学出版会
引用する極意 引用される極意	林紘一郎・名和小太郎著	2700	9784326000333	勁 草 書 房
稼ぐ妻・育てる夫	治部れんげ	2800	9784326602209	勁 草 書 房

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出版社名
エージェントベースの社会システム科学宣言	出口弘・木嶋恭一編著	3000	9784326602216	勁 草 書 房
ナラティヴ・アプローチ	野口裕二編	2800	9784326653409	勁 草 書 房
ネットワーク論に何ができるか	野沢慎司	2600	9784326602193	勁 草 書 房
グローバリゼーションと音楽文化	木本玲一	2400	9784326698622	勁 草 書 房
日本女性はどこにいるのか	北村文	2600	9784326653393	勁 草 書 房
階層意識のダイナミクス	数土直紀	3500	9784326602179	勁 草 書 房
コスメの時代	米澤泉	2100	9784326653386	勁 草 書 房
拡散する音楽文化をどうとらえるか	東谷護編著	2800	9784326698615	勁 草 書 房
南部メキシコの内発的発展と NGO	北野収	3800	9784326602148	勁 草 書 房
意味とシステム	佐藤俊樹	3400	9784326653379	勁 草 書 房
分散する身体	西阪仰	4000	9784326602025	勁 草 書 房
キャリアラダーとは何か	ジョン・フィッツジェラルド著筒井美紀・阿部真大・居郷至伸訳	3700	9784326602155	勁 草 書 房
「がん」と仲良く暮らす	ひろさちや/佐藤昂	1600	9784393366288	春 秋 社
<貧乏道>を往く	川上卓也	1600	9784393332818	春 秋 社
教育をめぐる虚構と真実	神保哲生官台真司他	1800	9784393142776	春 秋 社
めざめ いのち紡ぐ日々	真行寺君枝	1600	9784393439043	春 秋 社
コドモダマシ ほろ苦教育劇場	パオロ・マッツアリーノ	1400	9784393373255	春 秋 社
19歳の君へ	日野原重明編著	1700	9784393364994	春 秋 社
雑誌よ、甦れ ～「情報津波」時代のジャーナリズム	高橋文夫	1600	9784794967404	晶 文 社
介護福祉士実技試験ガイド	岡田慎一郎監修	2000	9784794976697	晶 文 社
東京モンスターランド ～実験アングラ・サブカルの日々	榎本了亮	2200	9784794967336	晶 文 社
生	福山清蔵/尾崎新	2400	9784414601459	誠 信 書 房
生のリアリティと福祉教育	福山清蔵/尾崎新	2400	9784414601459	誠 信 書 房
社会保障論概説	一圓光彌	2300	9784414601442	誠 信 書 房

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
子ども家庭福祉論	柏女霊峰	2300	9784414601435	誠 信 書 房
地域を活かすつながりのデザイン ～大阪・上町台地の現場から	上町台地コミュニティ・デザイン研究会編	2100	9784422250557	創 元 社
今すぐ役立つ介護シリーズ 10 改訂新版 老後の財産管理一制度の上手な利用法	(社) 成年後見センター・リーガルサポート監修	1400	9784422320809	創 元 社
改訂新版 ギリシア神話ろまねく	創元社編集部編	1400	9784422022093	創 元 社
夢中になれる室内ゲーム&遊び 42	財団法人日本レクリエーション協会監修 /東正樹, 服部明子, 村山哲也著	1800	9784422320700	創 元 社
新版 文科系必修研究生活術	東郷雄二	950	9784480092052	筑 摩 書 房
続・反社会学講座	バオロ・マッツァリーノ	780	9784480425874	筑 摩 書 房
雇用はなぜ壊れるのか	大内伸哉	740	9784480064837	筑 摩 書 房
「生きる」ために反撃するぞ!	雨宮処凛	1200	9784480863958	筑 摩 書 房
汚穢と禁忌	メアリ・ダグラス	1500	9784480091864	筑 摩 書 房
経済政策を売り歩く人々 ―エコノミストのセンスとナンセンス	ポール・クルーグマン	1400	9784480092076	筑 摩 書 房
自民党戦国史 上	伊藤昌哉	1000	9784480425812	筑 摩 書 房
自民党戦国史 下	伊藤昌哉	1000	9784480425829	筑 摩 書 房
環境問題の基本のキホン ―物質とエネルギー	志村史夫	780	9784480688095	筑 摩 書 房
世界の奇妙な博物館	ミシェル・ラヴリック	1200	9784480091932	筑 摩 書 房
福の神と貧乏神	小松和彦	640	9784480424907	筑 摩 書 房
創刊の社会史	難波功士	760	9784480064554	筑 摩 書 房
日本人はなぜ「さようなら」と別れるのか	竹内整一	720	9784480064677	筑 摩 書 房
警察(サツ)回り	本田靖春	840	9784480424785	筑 摩 書 房
誰も書かなかった日本医師会	水野肇	800	9784480424952	筑 摩 書 房
山口組画異論 ―最強組織はなぜ成立したのか	猪野健治	780	9784480064639	筑 摩 書 房
グローバル・シティ	サスキア・サッセン	5500	9784480867186	筑 摩 書 房

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
日本の賃金	竹内裕	700	9784480064578	筑 摩 書 房
目と耳と足を鍛える技術	佐野真一	760	9784480687968	筑 摩 書 房
サヨナラ、学校化社会	上野千鶴子	680	9784480424600	筑 摩 書 房
労働再規制	五十嵐仁	740	9784480064509	筑 摩 書 房
サブカル・ニッポンの新自由主義	鈴木謙介	740	9784480064547	筑 摩 書 房
株とギャンブルはどう違うのか	三土修平	720	9784480064486	筑 摩 書 房
手に職。	森まゆみ	780	9784480687944	筑 摩 書 房
暴力と人間存在	谷徹・今村仁司・マーティン・ジェイほか	3200	9784480863850	筑 摩 書 房
ドキュメント死刑囚	篠田博之	740	9784480064431	筑 摩 書 房
BRICs の底力	小林英夫	700	9784480064448	筑 摩 書 房
男の子のための軍隊学習のススメ	高田里恵子	680	9784480687890	筑 摩 書 房
食と生命と文化	原田信男	680	9784480687937	筑 摩 書 房
希望学 1 希望を語る 社会科学の新たな地平へ	東大社研編玄田有史編宇野重規編	3500	9784130341912	東京大学出版会
社会関係の理論	田中義久	6500	9784130501729	東京大学出版会
西洋美術書誌考	西野嘉章	8800	9784130802116	東京大学出版会
福祉と正義	アマルティアセン/後藤玲子	2800	9784130101103	東京大学出版会
後発福祉国家論 比較のなかの韓国と東アジア	金成垣	4800	9784130560665	東京大学出版会
中国の公的年金制度改革 体制移行期の制度的・実証的分析	何立新	6800	9784130460989	東京大学出版会
モビリティと場所 21 世紀都市空間の転回	吉原直樹	5400	9784130501736	東京大学出版会
ハシムラ東郷 イエローフェイスのアメリカ異人伝	宇沢美子	2800	9784130830508	東京大学出版会
〈生〉の社会学	藤村正之	2800	9784130501682	東京大学出版会
阪神大震災・グリコ森永 vs ジャーナリスト	関西地区マスコミ倫理懇談会・50 周年記念誌企画	2500	9784535516700	日 本 評 論 社
一人でもだいじょうぶ親の介護から看取り	おちとよこ	1500	9784535562769	日 本 評 論 社
フードセキュリティ	山下一仁	2300	9784535555945	日 本 評 論 社

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
だいじょうぶ	鎌田實・水谷修	1200	9784535585690	日 本 評 論 社
首都破綻	後藤雄一	1600	9784535585669	日 本 評 論 社
水俣学講義 第4集	原田正純他編	3000	9784535585539	日 本 評 論 社
ヨーロッパの目 日本の目	安西洋之	1900	9784535585577	日 本 評 論 社
メチル水銀を水俣湾に流す	入口紀男	1900	9784535585546	日 本 評 論 社
危ういジャーナリズム	杉下恒夫	2000	9784535585188	日 本 評 論 社
やっぱり、家で死にたいんだ	網野皓之	1500	9784535585485	日 本 評 論 社
ヨーロッパ環境対策最前線	片野優	1900	9784560040805	白 水 社
アフガニスタン母子診療所	梶原容子	1600	9784560031926	白 水 社
ナショナリズムとトランスナショナリズム	佐藤成基	4900	9784588602528	法政大学出版局
ほつれゆく文化—グローバリゼーション、ポストモダン ズム、アイデンティティ—	マイク・フェザーストン/西山哲郎・時 安邦治訳	3900	9784588009075	法政大学出版局
化粧と人間—規格化された身体からの脱出—	石田かおり	2400	9784588682100	法政大学出版局
アメリカの省察—トクヴィル・ウェーバー・アドルノー	クラウス・オッフエ/野口雅弘訳	2000	9784588603068	法政大学出版局
連帯経済の可能性—ラテンアメリカにおける草の根の経 験—	A. O. ハーシュマン/矢野修一・宮田剛 志・武井泉訳	2200	9784588603051	法政大学出版局
パスポートの発明—監視・シティズンシップ・国家—	ジョン・C. トビー/藤川隆男監訳	3200	9784588603044	法政大学出版局
アメリカの戦争と世界秩序	菅英輝	3800	9784588603013	法政大学出版局
ミッテラン社会党の転換—社会主義から欧州統合—	吉田徹	4000	9784588603020	法政大学出版局
映像編集の理論と実践	金井明人・丹羽美之編	3800	9784588602511	法政大学出版局
共通価値—文明の衝突を超えて—	シセラ・ボク/小野原雅夫監訳・宮川弘 美訳	2500	9784588008979	法政大学出版局
カインのポリテックールネ・ジラルとの対話—	ルネ・ジラル・ドメーニカ・マッツ他 /内藤雅文訳	5000	9784588008887	法政大学出版局
日本のコード	小林修一	3200	9784622074465	み す ず 書 房
社会政策第2号	社会政策学会編	2500	9784623054480	ミネルヴァ書房

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
ローカル・ガバナンス	山本隆	3800	9784623049066	ミネルヴァ書房
シングルマザーの暮らしと福祉政策	杉本貴代栄/森田明美編著	3500	9784623052769	ミネルヴァ書房
社会保障・社会福祉の原理・法・政策	堀勝洋著	4000	9784623053070	ミネルヴァ書房
社会福祉概論（第2版）	基礎からの社会福祉編集委員会編	2500	9784623053162	ミネルヴァ書房
よくわかる環境社会学	鳥越皓之/帯谷博明編著	2400	9784623053247	ミネルヴァ書房
マンガ学入門	夏目房之介/竹内オサム編著	2000	9784623053308	ミネルヴァ書房
社会福祉用語辞典第7版	山縣文治/柏女雪峰編	2200	9784623053759	ミネルヴァ書房
保健医療福祉政策の変容	矢野聡	3500	9784623053834	ミネルヴァ書房
社会福祉コンパクト六法 2009	山縣文治監修	2000	9784623054374	ミネルヴァ書房
社会福祉基本用語集七訂版	シリーズ・21世紀の社会福祉編集委員会編	1600	9784623054435	ミネルヴァ書房
これからの高齢者福祉（改訂版）	福田志津枝/古橋エツ子編著	2500	9784623054589	ミネルヴァ書房
こころとからだのしくみ	住居広士編	2800	9784623053001	ミネルヴァ書房
世界商品と子供の奴隷	下山晃著	2800	9784623053636	ミネルヴァ書房
よくわかるメディア・スタディーズ	伊藤守編著	2500	9784623052066	ミネルヴァ書房
ボランティア論	田村正勝編著	2800	9784623053339	ミネルヴァ書房
グループホームにおける認知症高齢者ケアと質の探究	永田千鶴	4000	9784623053605	ミネルヴァ書房
福祉のための法学〔第3版〕	野崎和義著	3500	9784623050659	ミネルヴァ書房
認知症の理解	本間昭編	2600	9784623052981	ミネルヴァ書房
よくわかる社会福祉 第7版	山縣文治・岡田忠克	2400	9784623053803	ミネルヴァ書房
ジェンダーと福祉国家	メリー・デイリー/キャサリン・レイク著	3500	9784623052394	ミネルヴァ書房
社会福祉小六法 2009	ミネルヴァ書房編集部編	1600	9784623053087	ミネルヴァ書房
公的扶助の基礎理論	池田和彦・砂脇忠著	2500	9784623053322	ミネルヴァ書房
権利擁護で暮らしを支える	PAS ネット編	2200	9784623052752	ミネルヴァ書房
ソーシャルワーク入門	空閑浩人編著	2600	9784623053148	ミネルヴァ書房

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
グローバル化のなかの福祉社会	下平好博/三重野卓編著	3800	9784623053186	ミネルヴァ書房
ミネルヴァ社会福祉六法 2009	野崎和義監修ミネルヴァ書房編集部編	2500	9784623053490	ミネルヴァ書房
子どもとむかいあうための相談援助演習	会田元明著	2600	9784623053537	ミネルヴァ書房
韓国における高齢者研究のフロンティア	小椋正立監修	7000	9784623052851	ミネルヴァ書房
熱狂するシステム	中井豊	3000	9784623046393	ミネルヴァ書房
欲望するシステム	黒石晋	3000	9784623052592	ミネルヴァ書房
うちの子 よその子 みんなの子	貝塚子育てネットワークの会編著	1800	9784623053575	ミネルヴァ書房
カルトとスピリチュアリティ	櫻井義秀編著	3500	9784623052493	ミネルヴァ書房
高齢者は社会的弱者なのか	袖井孝子著	2000	9784623053414	ミネルヴァ書房
精神障害とともに歩く	やおき福祉会編	2200	9784623051250	ミネルヴァ書房
社会政策で読み解く現代中国	王文亮著	2800	9784623052615	ミネルヴァ書房
「ひきこもり」への社会学的アプローチ	荻野達也ほか編著	3000	9784623052370	ミネルヴァ書房
イギリスのコミュニティケアと介護者	三富紀敬	6500	9784623052196	ミネルヴァ書房
社会変動と社会学	金子勇/長谷川公一編著	3500	9784623053582	ミネルヴァ書房
高齢化社会をどうとらえるか	ウイリアム、C. コッケルハム 著 中野進 監修家森幸男・西村周三・服部裕之訳	3000	9784623052868	ミネルヴァ書房
職業を生きる精神	杉村芳美著	3000	9784623052448	ミネルヴァ書房
社会政策創刊号	社会政策学会編	2500	9784623052745	ミネルヴァ書房
地域政策入門	藤井正/光多長温/小野達也/家中茂編著	3000	9784623051571	ミネルヴァ書房
児童虐待はいま	津崎哲郎/橋本和明編著	2400	9784623051984	ミネルヴァ書房
高校福祉科卒業生のライフコース	田村真広/保正友子編著	3500	9784623052387	ミネルヴァ書房
3R 検定公式テキスト	3R 検定実行員会編	2381	9784623052202	ミネルヴァ書房
非営利放送とは何か	松浦さとし/小山帥人	2800	9784623052325	ミネルヴァ書房
よくわかる公的扶助	杉村宏/岡部卓/布川日佐史編	2200	9784623050390	ミネルヴァ書房
人類学で世界をみる	春日直樹編	3500	9784623051137	ミネルヴァ書房
崖っぶちの木地屋 村地忠太郎のしごと	松本直子	1700	9784624720216	未 来 社

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
私の日本地図 15 巻 岐・対馬紀行	宮本常一著香月洋一郎編	2200	9784624925000	未 來 社
宮本常一著作集第 50 巻 渋沢敬三	宮本常一著田村善次郎編	4800	9784624924508	未 來 社
モダン・コンピューティングの歴史	ポール・E.セルージ	5800	9784624000233	未 來 社
私の日本地図 第 10 巻 武蔵野・青梅	宮本常一著香月洋一郎編	2200	9784624924959	未 來 社
日本の民俗 1 海と里	安室知・小島孝夫・野地恒有著	3000	9784642078689	吉 川 弘 文 館
日本の民俗 2 山と川	湯川洋司・福澤昭司・菅豊著	3000	9784642078696	吉 川 弘 文 館
日本の民俗 4 食と農	安室知・古家晴美・石垣悟著	3000	9784642078719	吉 川 弘 文 館
日本の民俗 5 家の民俗文化誌	古家信平・多田井幸規・徳丸亞木著	3000	9784642078726	吉 川 弘 文 館
日本の民俗 7 男と女の民俗誌	八木透・山崎祐子・服部誠著	3000	9784642078740	吉 川 弘 文 館
日本の民俗 8 南島の暮らし	飯島吉晴・宮前耕史・関沢まゆみ著	3000	9784642078757	吉 川 弘 文 館
日本の民俗 11 物づくりと技	三田村佳子・宮本八恵子・宇田哲雄著	3000	9784642078788	吉 川 弘 文 館
日本の民俗 12 南島の暮らし	古家信平・小熊誠・萩原左人著	3000	9784642078795	吉 川 弘 文 館
お葬式	新谷尚紀著	1500	9784642079990	吉 川 弘 文 館

教 育 学

ドイツにおける男子援助活動の研究 その歴史・理論と課題	池谷壽夫	6000	9784272412013	大 月 書 店
学力と新自由主義	佐貫浩	2500	9784272412006	大 月 書 店
学校のトラブル解決シリーズ① けんか その手をだす前に	エレイン・スレベンス著	2000	9784272406418	大 月 書 店
学校のトラブル解決シリーズ② うわさ・かげぐち 広がる前に/広げる前に	キャサリン・ロンディナ作	2000	9784272406425	大 月 書 店
学校のトラブル解決シリーズ③ いじめ 手おくれになる前に	エレイン・スレベンス作	2000	9784272406432	大 月 書 店
学校のトラブル解決シリーズ④ からかい 知らずに傷つける前に	スティーブ・ピット作	2000	9784272406449	大 月 書 店

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
なるほどデータブック① コンビニのしかけ	藤田千枝編	1800	9784272406517	大 月 書 店
現代教育計画論への道程 城戸構想から「新しい教育学」へ	鈴木敏正著	3800	9784272411986	大 月 書 店
明日の授業に使える小学校家庭科	澤田悦子著	2200	9784272411979	大 月 書 店
重度・重複障害児の対人相互交渉における共同注意	徳永豊	3600	9784766415759	慶應大学出版会
これからの健康管理と医療的ケア	日本肢体不自由教育研究会監修	2200	9784766414110	慶應大学出版会
写真集 慶應義塾 150 年 (2 分冊)	慶應義塾創立 150 年写真集編纂委員会編	3500	9784766415636	慶應大学出版会
教育が日本をひらく	安西祐一郎	2000	9784766414950	慶應大学出版会
コミュニケーションの支援と授業づくり	日本肢体不自由教育研究会監修	2200	9784766414103	慶應大学出版会
知識の経営と図書館	柳与志夫	2400	9784326098347	勁 草 書 房
ママのためのシュタイナー教育入門	ドーリス・シューラー著鳥山雅代訳	1700	9784393332856	春 秋 社
シュタイナーのこどもの育て方 おとながこどもにできること	ローター・シュタイマン著鳥山雅代訳	1600	9784393373248	春 秋 社
生徒指導と教育相談	角田豊編著/片山紀子, 内田利広著	2300	9784422120584	創 元 社
0 歳から育てる脳と心	森田勝之	1500	9784422120386	創 元 社
バビロンの大富豪の教え	ジョージ・クレイソン	1500	9784480863935	筑 摩 書 房
独学の精神	前田英樹	700	9784480064691	筑 摩 書 房
世界でいちばん受けたい授業 ―[よのなか] 科実践記録	藤原和博	950	9784480425362	筑 摩 書 房
進学格差 ―深刻化する教育費負担	小林雅之	680	9784480064615	筑 摩 書 房
教育再生の迷走	荻谷剛彦	1600	9784480863904	筑 摩 書 房
公務員教師にダメ出しを！	戸田忠雄	740	9784480064516	筑 摩 書 房
誰が学校を変えるのか	藤原和博	600	9784480424730	筑 摩 書 房
公立学校の底力	志水宏吉	780	9784480064479	筑 摩 書 房
完璧思考が子供をダメにする	原田正文	740	9784480064455	筑 摩 書 房
大学進学への機会 均等化政策の検証	小林雅之	6000	9784130513159	東京大学出版会

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
キーワード 現代の教育学	田中智志編, 今井康雄編	2800	9784130520775	東京大学出版会
生きるための学校	宇都宮誠編	1700	9784535562714	日 本 評 論 社
子どもの総合学力を育てる	田中博之	2200	9784623053766	ミネルヴァ書房
教師 魂の職人であれ	森田薫/原清治著	1800	9784623052820	ミネルヴァ書房
新・教育学(第2版)	南新秀一/佐々木英一/吉岡真佐樹編著	2600	9784623053278	ミネルヴァ書房
新しい時代の教育制度と経営	岡本徹/佐々木司編著	2400	9784623053704	ミネルヴァ書房
教職論(第2版)	教職問題研究会編	2400	9784623053056	ミネルヴァ書房
発達障害のある子への支援 幼稚園・保育園	内山登紀夫監修	2500	9784623053650	ミネルヴァ書房
発達障害のある子への支援 小学校	内山登紀夫監修	2500	9784623053667	ミネルヴァ書房
発達障害のある子への支援 中学校以降	内山登紀夫監修	2500	9784623053674	ミネルヴァ書房
知ってる? 発達障害 ワークブックで考えよう	細川佳代子プロデュース	2500	9784623053681	ミネルヴァ書房
ともちゃんは銀メダル	お話・細川佳代子絵・東郷聖美	1800	9784623053698	ミネルヴァ書房
教職リニューアル	教員免許状更新講習事業コンソーシアム編	2500	9784623053483	ミネルヴァ書房
人間形成にとって共同体とは何か	岡田敬司著	2800	9784623053476	ミネルヴァ書房
子どもにやさしい学校	乾美紀・中村安秀編著	2500	9784623053360	ミネルヴァ書房
新しいボランティア学習の創造	長沼豊	6500	9784623052578	ミネルヴァ書房
思春期のゆらぎと不登校支援	春日井敏之著	2800	9784623053032	ミネルヴァ書房
自治体の自立と社会教育	島田修一/辻浩編	2500	9784623051991	ミネルヴァ書房
現代の批評・評論				
沖縄ラブソディ	宮城康博	1600	9784275005779	御茶の水書房
理論と逸脱	綾目広治	3200	9784275005816	御茶の水書房
映画の建築/建築的映画	五十嵐太郎	2200	9784393957059	春 秋 社
フランス歌曲の珠玉 深い理解と演奏のために	フランソワ・ル・ル他著美山節子他訳	3500	9784393930212	春 秋 社
指先から感じるドビュッシー	青柳いずみこ	2000	9784393937754	春 秋 社

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
コンサートが退屈な私って変？	クリスティアーネ・テヴィンケル著小山田豊訳	2300	9784393935354	春 秋 社
女性を宇宙は最初につくった	佐治晴夫	1800	9784393360514	春 秋 社
星はまたたき物語は始まる 科学と文学の出会い	小山慶太	1800	9784393332900	春 秋 社
正統とは何か	G. K. チャスタトン著安西徹雄訳	2500	9784393416105	春 秋 社
音さがしの本・サウンド・エデュケーション	R. マリー・シェーファー著今田匡彦訳	1800	9784393935392	春 秋 社
ヒューマン・アクション	ルートヴィヒ・フォン・ミーゼス著村田稔雄訳	12000	9784393621837	春 秋 社
指揮者のおしえ	フリッツ・ブッシュ著福田達夫訳	2000	9784393937778	春 秋 社
未聴の宇宙、作曲の冒険	湯浅譲二西村朗	2500	9784393935361	春 秋 社
ピアニストになりたい！ 19世紀もうひとつの音楽史	岡田暁生	2000	9784393931837	春 秋 社
メシアン 創造のクレド 信仰・希望・愛	アルムート・レスラー著吉田幸弘訳	2800	9784393931820	春 秋 社
指揮者という仕事	シャルル・ミンシュ著福だ達夫訳	2000	9784393935385	春 秋 社
ニッポン	ブルーノ・タウト著篠田英雄訳	2000	9784393424544	春 秋 社
日本の家屋と生活	ブルーノ・タウト著篠田英雄訳	2600	9784393424551	春 秋 社
科学の落し穴 ～ウソではないがホントでもない	池内了	1800	9784794967435	晶 文 社
現代映画、その歩むところに心せよ	川本三郎	3200	9784794967381	晶 文 社
ロバート・バーンズ ～スコットランドの国民詩人	木村正俊、照山顕人	6000	9784794967374	晶 文 社
フリーダ・カーロ―痛みこそ、わが真実	クリスティーナ・ビュリュス著/堀尾真紀子監修/遠藤ゆかり訳	1600	9784422212029	創 元 社
『グレート・ギャツビー』の読み方	野間正二	2400	9784422900315	創 元 社
頭のいい人の教える技術	樋口裕一	1400	9784480878014	筑 摩 書 房
春画のからくり	田中優子	640	9784480425898	筑 摩 書 房
世間さまが許さない！	岡本薫	740	9784480064776	筑 摩 書 房
現代美術のキーワード 100	暮沢剛巳	780	9784480064820	筑 摩 書 房
資本主義の暴走をいかに抑えるか	柴田徳太郎	780	9784480064844	筑 摩 書 房

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
多読術	松岡正剛	800	9784480688071	筑 摩 書 房
京都美術鑑賞入門	布施英利	780	9784480688088	筑 摩 書 房
唯の生	立岩真也	3200	9784480867209	筑 摩 書 房
ちくま評論入門	岩間輝生他	952	9784480917218	筑 摩 書 房
社会をつくる自由 一反コミュニティのデモクラシー	竹井隆人	700	9784480064752	筑 摩 書 房
世界同時不況	岩田規久男	700	9784480064783	筑 摩 書 房
学歴分断社会	吉川徹	740	9784480064790	筑 摩 書 房
アメリカはなぜ変わるのか	杉田弘毅	780	9784480064806	筑 摩 書 房
〈象徴形式〉としての遠近法	エルヴィン・パノフスキー	1000	9784480091680	筑 摩 書 房
贈与論	マルセル・モース	1200	9784480091994	筑 摩 書 房
東京の地霊	鈴木博之	1100	9784480092014	筑 摩 書 房
自分の仕事をつくる	西村佳哲	760	9784480425577	筑 摩 書 房
名曲三〇〇選 吉田秀和コレクション	吉田秀和	1000	9784480425751	筑 摩 書 房
現代語訳 学問のすすめ	福澤諭吉著、齋藤孝翻訳	760	9784480064707	筑 摩 書 房
独学という道もある	柳川範之	700	9784480688057	筑 摩 書 房
増補 虚構の時代の果て	大澤真幸	1200	9784480091970	筑 摩 書 房
まじめの崩壊	和田秀樹	700	9784480064646	筑 摩 書 房
クジラは誰のものか	秋道智彌	740	9784480064660	筑 摩 書 房
眼の隠喩 ―視線の現象学	多木浩二	1400	9784480091888	筑 摩 書 房
あなたの苦手な彼女について	橋本治	820	9784480064592	筑 摩 書 房
サブリミナル・インパクト ―情動と潜在認知の現代	下條信輔	900	9784480064608	筑 摩 書 房
日本語が亡びるとき	水村美苗	1800	9784480814968	筑 摩 書 房
超・美術鑑賞術/お金をめぐる芸術の話	森村泰昌	1000	9784480091697	筑 摩 書 房
コールハースは語る	レム・コールハースハンス・ウルリッヒ・オブリスト	1700	9784480836441	筑 摩 書 房
防衛黒書	林信吾	820	9784480424792	筑 摩 書 房

書名	著 編 監 修 者	本体価格	ISBN	出 版 社 名
自民党政治の終わり	野中尚人	760	9784480064462	筑 摩 書 房
教科書の文学を読みなおす	島内景二	720	9784480687951	筑 摩 書 房
良い死	立岩真也	2800	9784480867193	筑 摩 書 房
モーツァルトをきく	吉田秀和	1200	9784480423948	筑 摩 書 房
戦後SF マンガ史	米沢嘉博	880	9784480424198	筑 摩 書 房
エコノミック恋愛術	山崎元	680	9784480064363	筑 摩 書 房
都市美運動 シヴィックアートの都市計画史	中島直人	8400	9784130668507	東京大学出版会
政治の美学 権力と表象	田中純	5000	9784130101097	東京大学出版会
映画論講義	蓮實重彦	2600	9784130830492	東京大学出版会
ミュージアムの思想	松宮秀治	2800	9784560027196	白 水 社
文庫クセジュ 翻訳	ミカウル・ウスティノフ	1050	9784560509302	白 水 社
三つのエコロジー	フェリックス・ガタリ著	1000	9784582766516	平 凡 社
ヘルダーリン研究—文学的認識についての論考を付す—	ベーター・ソンディ/ヘルダーリン研究 会約	2800	9784588009013	法政大学出版局
散歩の文化学 1—ホモ・アンブランスの誕生—	前野佳彦	3500	9784588100123	法政大学出版局
散歩の文化学 2—東洋的都市経験の深層—	前野佳彦	3300	9784588100130	法政大学出版局
マラー書簡集	ヘルタ・ブラウコプフ編/須永恒雄訳	8300	9784588420108	法政大学出版局
ブラック・ノイズ	トリーシャ・ローズ	3800	9784622074182	み ず 書 房
アラブ、折りとしての文学	岡真理	2800	9784622074236	み ず 書 房
篠木佐夫のあかりの仕事	JPL 編集部編	2800	9784624700928	未 来 社
とんぼの目玉 言の葉紀行	長谷川摂子	1700	9784624601096	未 来 社
俳優の仕事 俳優教育システム 第2部	スタニスラフスキー	5800	9784624700911	未 来 社
沖縄/暴力論	西谷修編, 仲里効編	2400	9784624112004	未 来 社

戦後日本 スタディーズ

岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大、
小森陽一、成田龍一／編著

これからを生き抜くため、今、「戦後」を問い直す。各巻詳細な年表付。

——好評発売中——

③ 80・90 年代

ニューアカ／ネオリベ／フェミニズム／おたく／バブル…… ◆2520円

② 60・70 年代

五五年体制／安保／文革／水俣／アングラ／連合赤軍…… ◆2520円

——2009年5月刊行予定——

① 40・50 年代 ◆予価 2520円

紀伊國屋書店

出版部：東京都目黒区下目黒3-7-10
(営業) TEL: 03 (6910) 0519 表示価格は税込
<http://www.kinokuniya.co.jp/>

●大反響のNHK・ETV特集を再構成、大幅補充

しのびよる 破局

緊急出版

生体の悲鳴が聞こえるか

辺見 庸著 46判・1365円

金融恐慌、地球温暖化、新型インフルエンザ、人間の内面の崩壊……。異質の破局が同時進行する未だかつてない時代に私たちはどう生きるべきか。根源から模索する。

オックスフォード 科学の肖像 第12回配本

●人類学を広め、時代のアイコンとなった生涯

マーガレット・ミード

はるかな異文化への航海

J・マーク著 西田美緒子訳 46判・1890円

大月書店 東京都文京区本郷2-11-9
電話03(3813)4651(代表)
<http://www.otsukishoten.co.jp/> (税込)

慶應義塾大学出版会

<http://www.keio-up.co.jp/>

エピステモロジーの現在

金森修編著 フランス現代哲学の総合的な理解に不可欠なエピステモロジーの現代的意義を提示する大著。 ●5880円

窓あるいは鏡

ネオTV的日常生活批判

附 ウンベルト・エーコ「失われた透明性」
水島久光・西兼志著 私たちの日常生活とテレビとの関係を分析。 ●3150円

近代都市バルセロナの形成

都市空間・芸術家・パトロン

山道佳子・八嶋由香利・鳥居徳敏・木下亮著 近代都市へと変わりゆくバルセロナを多彩な視点から読み解く。 ●5040円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 【価格税込】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

アレックス・デミロヴィッチ著／仲正昌樹責任編集

非体制順応的知識人

全四冊

—批判理論のフランクフルト学派への発展—

《第一分冊》

◎初期フランクフルト学派に反省的回帰する姿勢

戦後ドイツの「社会学」とフランクフルト学派

仲正昌樹監訳・太田堂真・高安啓介・福野明子・竹崎義和・松井賢太郎・安井正寛訳
菊判・356頁●5,670円(税込)

《第二分冊》

◎フランクフルト学派と学生運動の複雑かつ緊密関係性

戦後ドイツの学生運動とフランクフルト学派

出口剛司訳

菊判・218頁●3,360円(税込)

御茶の水書房

東京都文京区本郷5-30-20 ☎03(5684)0751
<http://www.ochanomizushobo.co.jp/>

高橋文夫 著

雑誌よ、甦れ

「情報津波」時代のジャーナリズム

四六判並製 268 頁

定価 1680 円(税込)

「月刊現代」「PLAYBOY 日本版」「読売ウィークリー」「論座」——かつての花形雑誌・人気誌が、続々休廃刊に追い込まれている。雑誌の売上はこれの 10 年間で、下り坂を駆け落ちるように前年を下回りっぱなしだ。雑誌がダメになれば、本もダメになる。活字文化そのものがおかしくなる。それを避けるためにも、まず、雑誌を甦らせたい……。

晶文社

東京都千代田区外神田 2-1-12
TEL 03-3255-4501 (価格とは税込)
<http://www.shobunsha.co.jp/>

瀬名秀明

瀬名秀明 ロボット学論集

SF 作家・瀬名秀明が考える
ヒトとロボットと物語の未来

ロボット学の決定版!

ミステリー作家の
法月綸太郎氏、ア
ニメ脚本家の櫻井
圭記氏、デザイナー
の鈴木一誌氏と
の対論も収録。

定価 3150 円



* 価格税込

勁草書房

TEL 03-3814-6861

FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道 2-1-1

<http://www.keisoshobo.co.jp>

傾聴術

ひとりで磨ける“聴く”技術

古宮 昇著 傾聴の基礎にある来談者中心療法の本質を、九つの実際の場面設定の練習問題で分かり易く解説。1470 円

インターネット心理学 のフロンティア

三浦麻子・森尾博昭・川浦康至編著
幅広い研究に基づいた現代日本のネット心理学研究最前線が分かる一冊。2940 円

カウンセリング 心理学事典

國分康孝監修 原点から特定分野まで全 13 分野に分けて課題を解説。カウンセラーを目指す人にも必携の書。5040 円

誠信書房

東京都文京区大塚 3-20-6
TEL 03-3946-5666 (税込)

タップピング入門

● R・テムズ／浅田仁子訳 ここからの痛みに「ツボ」が効く。トントンと叩くだけの新しい療法を実践的に紹介。2310 円

33 個めの石

現代の傷ついたための哲学

● 森岡正博 33 個めの石、それは傷ついた者を力づける希望の象徴である。現代の痛みと希望を巡る渾身のエッセイ。1575 円

春秋社

東京都千代田区外神田 2-18-6
TEL 03-3255-9611 (価格とは税込)

<http://www.shunjusha.co.jp/>

東大英単

東京大学教養学部英語部会編著
充実した例文・解説で、基本語の
運用能力を高める。日本人学習者
必携の単語帳。
1890円

東大式英語力の磨き方
へたつた280語で単語力強化

東京大学出版会

〒113-8654 文京区本郷7-3-1
TEL03-3811-8814 <http://www.utp.or.jp/>
[価格税込]

地図と絵画で読む Biblica 聖書大百科

B.J./バイツェル 監修／船本弘毅 日本語版監修
カラー図版600点以上、地図124点を収録。
神学、考古学の最新の知見に基づき聖書の世
界を詳細に解説。 B4版上製 576頁

刊行記念特別価格 **29,925** 円(税込)
(09年4月まで、以降、定価33,600円)

空から見る驚異の歴史シリーズ

宮殿、聖堂、遺跡など世界の名建築を空撮、
B3大の折図を閉じ込んだ斬新な製本で紹介。

最新刊

世界の城と要塞

H.スティルラン著／森山隆訳 4,515円

世界の20世紀建築

B.ルモアヌ著／森山隆訳 4,515円

創元社

大阪市中央区淡路町4-3-6
Tel.06-6231-9010
<http://www.sogensha.co.jp/> <価格は税込>

だいじょうぶ



水谷 修 —— 鎌田 實

(花園大学客員教授)

(諏訪中央病院名誉院長)

家庭内殺人、薬物依存、自殺…。大
人たちはなぜ子どもを追いつめてし
まったのか。子どものために献身し
ている鎌田・水谷氏の魂の往復書簡。

■絶賛発売中！ 四六判 1260円税込
ISBN978-4-535-58569-0



日本評論社

<http://www.nippon.co.jp>

☎03-3987-8621

FAX03-3987-8590

豊島区南大塚3-12-4

水村美苗の本

日本語で読むということ

話題書執筆の契機とは？ 読書や自分の本
に纏わるエッセイを集成。 **最新刊** 1680円

日本語で書くということ

書くことへの希望や日本近代文学について
のエッセイ&評論。 **最新刊** 1680円

日本語が亡びるとき

●英語の世紀の中で

日本語と英語をめぐる認識を深く揺り動かす、
各紙誌絶賛、書き下ろし問題作！ 1890円

私小説 from left to right

異国に生きる孤独とは……。本邦初の横書
きバイリンガル小説。 ●ちくま文庫 819円

筑摩書房

サービスセンター <http://www.chikumashobo.co.jp/> 048-651-0053

*税込

法政大学出版局

<http://www.h-up.com/>

野沢 協・植田祐次 監修

啓蒙の ユートピア

全三巻 完結

A5判・上製・貼函入／各巻2万3100円
フランス啓蒙期の想像力を示す「社会構
想あるユートピア」作品18篇を完訳収録

- 第一巻 フォワニ「南大陸ついに知られる」、フォントネル「哲人共和国、またはアジャオ人物語」など6作品
- 第二巻 マリヴォー「奴隷島」、モレリ「浮島の難破」「自然の法典」、マブリ「フォシオン対談」など7作品
- 第三巻 メルシエ「紀元2440年」、ドン・デシャン「道徳考」、サン＝ビエール「アルカディア」など5作品

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-2-7
☎ 03 (5214) 5540 / 表示価格は税込です

ナチが愛した二重スパイ

◎英国諜報員「ジグザグ」の戦争◎

ベン・マッキンタイア 著／高儀 進 訳

初公開された秘密文書を中心に、伝説の
スパイの驚くべき冒険を描いた、手に汗
握るノンフィクション！ ●2520円

日本にあった朝鮮王国

◎謎の「秦王国」と古代信仰◎ (新装版)

大和岩雄 著

古代豊前地方を舞台とした秦系系渡来人の
実態を解明し、八幡信仰・修験道等の
源流と展開を明らかにする。●2520円

モンマルトル風俗事典

鹿島 茂 著

19世紀、モンマルトルに花開いたカフェ、
キャバレーの数々……そこに渦巻く人間
模様を生き生きた再現。 ●3360円

白水社 東京都千代田区神田小川町 3-24
tel.03-3291-7811 / fax.03-3291-8448
<http://www.hakusuisha.co.jp/> *価格は税込

問う力

始まりのコミュニケーション

ブラック・ノイズ

長田弘 連続対談 国谷裕子、キム・ソナ、岡田武史、ピータ
ー・バラカンなど今をときめく11人との長時間対談 二巻目
トリ・シャ・ローズ 対立と格差の只中で公共領域を創造す
るラップ・ミュージックを緻密に分析。新田啓子 訳 二巻目

ドラゴンが踊れない

ラヴレイス 奴隷制の記憶を伝えるカーニヴァル 抵抗の
ダンスがいま始まる！ 伝説的音楽小説。中村和恵訳 三巻目

ロスコ 芸術家のリアリティ

ロスコ 純粋な抽象へ向かう途上、ロスコ芸術の転回点とな
った時期の貴重なテキスト20篇を編む。中林和雄 訳 五巻目

美術論集

みすず書房 (税込)

東京本郷5-32-21 <http://www.msz.co.jp>

第60回 読売文学賞(評論・伝記部門)受賞!

フロイトの イタリア

旅・芸術・精神分析

岡田温司 著

フロイトのイタリア体験を膨大な書簡等から再構成。イタリアの鏡をとおして、いわば、「フロイトその人を精神分析する」ことで、精神分析と芸術との内在的関係、さらには、精神分析に刻印された長靴の半島の楔を刺激的に明かす意欲作。 ●3990円

宗教と現代がわかる本 2009

渡邊直樹 責任編集

2008年に起きた宗教に関わるニュースの
背景や問題がわかる。特集=天皇と宮中
祭祀 / 対談=大谷光真・上田紀行。

●1680円

平凡社

〒112-0001 東京都文京区白山2-29-4 [価格税込]
TEL 03-3818-0874 <http://www.heibonsha.co.jp/>

日本人の暮らしに生きる年中行事のすべて。

加藤友康・高埜利彦
長沢利明・山田邦明 編

古代から現代までくり返されてきた年中行事。宮中・公家・武家・寺社や民衆から生まれた多彩な三〇〇〇の行事を平易に解説。日本文化を読み解く「年中行事」百科の決定版。

「内容案内」送呈



四六倍判／特價27300円
(期限10年1月31日)
定価29400円

年中行事大辞典

吉川弘文館

価格税込

東京都文京区本郷7-2／電話03-3813-9151

ミネルヴァ評論叢書〈文学の在り処〉

別巻③

名作は隠れている

千石英世／千葉一幹編著 宮沢賢治、坂口安吾、カフカ、メルヴィル……、大作家の隠れた問題作、傑作に迫る、ユニークな文学案内。240頁/2625円

◆ミネルヴァ評論叢書〈文学の在り処〉別巻 各2625円

①名作はこのように始まるⅠ
千葉一幹／芳川泰久編著

②名作はこのように始まるⅡ
中村邦生／千石英世編著

◆ミネルヴァ評論叢書〈文学の在り処〉 各3150円

①クリニック・クリティック 千葉一幹著

②〈虚言〉の領域 中村邦生著

③異性文学論 千石英世著

④横断する文学 芳川泰久著

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 価格税込み／宅配可

人文書の すすめ IV

人文書の読み方 編集 岡本

創立四十周年記念出版

「人文書のすすめIV」

ISBN978-4-915735-05-9 (非売品)

発行 人文会(春秋社内)

http://www.jinbunkai.com

崖っぶちの木地屋

村地忠太郎のしごと

松本直子著 長野県木曾郡木曾福島。小さな谷間の町での暮らしを背景に、92歳の現役木地屋と、師の顔をかなえたいと風のように奔走する「旅の人」の、二人三脚でかつての木曾漆器を探索する旅が、いま、始まる。

◇1785円

【宮本常一著作集別集】私の日本地図第15巻

壺岐・対馬紀行(第3 回配本)

宮本常一著 香月洋一郎編 ◇2310円

日本思想史 [改訂新版]

守本順一郎著 岩間一雄編

神話の世界から徳川幕府まで、史的唯物論の視点から、繰り返されるイデオロギーの生成と解体。

◇7140円

【UTCP叢書3】哲学と大学

西山雄二編 大学存立の危機が叫ばれる今日の課題をまえに、気鋭の論者が人文科学の未来を探る。

◇2520円

未来社

※表示価格は税込
〒112-0002 東京都文京区小石川3-7-2
tel.03-3814-5521 www.miraisha.co.jp/

祝 創立 40 周年記念東京合同研修会特集号

発明は いかに始まるか

リーンハート 印刷術が教育を、蒸気機関がスピードを発明した。創造の営みと時代精神とが織りなすドラマは、いかに始まり世界を変えたか。中島訳 4725円

心理学者、 心理学を語る

コーエン ノーベル賞受賞者を含む13人の心理学者の生の声を引き出し、内面に迫った不朽の記録。子安増生監訳 5040円

オオカミ少女は いなかった

鈴木光太郎 オオカミ少女、サブリミナル効果など、事実として語られ続ける心理学の神話。その舞台裏に迫る。2730円

新曜社 東京神田神保町2-10
電話03-3264-4973 〈税込〉
<http://www.shin-yo-sha.co.jp/>

イタリヤ現代思想

フォーコー、ドゥルーズ、デリダ以後のヨーロッパにおける人文知刷新の最新地図！

ジョルジョ・アガンベン (1942-)

アウシュヴィッツの残りのもの [5刷] 2,520円
バートルビー [2刷] 2,520円
瀧神 1,890円

パオロ・ヴィルノ (1952-)

マルチチュードの文法 [2刷] 2,625円

トニ・ネグリ (1933-)

芸術とマルチチュード 1,995円

続刊

マッシモ・カッチャーリ (1944-)

多島海

月曜社

182-0006 東京都調布市西つつじヶ丘 4-47-3
電話 03-3935-0515 <http://getsuyosha.jp> [価格は税込]

現代思想

revue de la pensée d'aujourd'hui

話題の増刊号



ヘーゲル
マックス・ウェーバー
フィデル・カストロ
チェ・ゲバラ

現代思想のキーワード

吉本隆明
メルロ＝ポンティ
ダーウィン



青土社

東京・神田・神保町

phone 03-3294-7829
facsimile 03-3294-8035
<http://www.seidosha.co.jp/>

二〇世紀アヴァンギャルドと文明の転換
ヨーロッパ文明の普遍という神話を問い直す
大平具彦 六八二五円
グローバリゼーションと植民地主義
「国民国家と多文化社会」シリーズの最新刊
西川長夫 高橋秀寿編 二九四〇円
テクスト学と人文学
知的活動の道具を問い直す
齊藤晃編 三三六〇円

(価格は税込)

人文書院 <http://jimibunshoin.co.jp>

〒612-8447 京都市伏見区竹田西内畑町 9
TEL075-603-1344 FAX 075-603-1814

祝 創立 40 周年記念東京合同研修会特集号

生存権

——いまを生きるあなたに

立岩真也・尾藤廣喜・岡本 厚著 B6判・一冊五円
弱者に冷酷な日本社会の病理に光を当て、今この社会で希望を持って生きていくためには何が必要なのか、第一線で活躍する社会学者、弁護士、編集者がそれぞれ検討する。

【最新刊】

⑧ 生活空間

——集落と遺跡群

⑦土器を読み取る／⑨死と弔い／⑩人と社会／⑪心と信仰

三三六円

縄文時代の考古学全十二巻 B5判・谷口他編

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-4-8
TEL 03-3239-1467 (価格税込) <http://homepage3.nifty.com/douseisha>

同成社

般若心経

—テキスト・思想・文化—

サンスクリット原典から『般若心経』のオリジナルな思想にせまる。

渡辺章悟 3150円

ブッダのことは

パーリ仏典入門

〈法〉経典と〈律〉戒律からなるブッダのことはの全体像を、一冊で展望。

片山一良 3250円

仏教思想へのいざない

〈釈尊からアビダルマ・般若・唯識まで〉
「無我」「縁起」「空」とは・・・
難解な仏教哲学を平易に解き明かす。

横山紘一 2205円

大法輪閣

東京都渋谷区東2-5-36
tel 03-5466-1401 (価格税込)

トランスビュー

<http://www.transview.co.jp>

* 価格税込

魂とは何か

さて死んだのは誰なのか

池田晶子 普通の(私)が、なぜ個人の生を生きているのか。思索の果てに立ち現れる存在の不思議を、哲学が辿りついた感じる文体で語り出す。 1575円

父が子に語る日本史

小島 毅 ねえ父さん、歴史って何の役に立つの？ 偏狭な一國史観を打ち破り、歴史の多様な見方と本当の面白さを優しくわかりやすく語る。 1575円

花はどこへいった

枯葉剤を浴びたグレッグの生と死

坂田雅子 カメラを手にとったベトナムで見た被害者たちの衝撃と愛。話題のドキュメンタリー映画を完成させるまで。 1890円

この一身は努めたり

上田三四二の生と文学

小高 賢 数々の賞に包まれた生の核心に秘められた謎に迫り、その文学的営為の全貌を描く本格的評伝。 2940円

東京堂出版

東京の消えた地名辞典

竹内 誠編

東京23区内の消えた地名約一〇〇〇について、その由来、形成過程、地形、変遷などを解説した。記憶に残る懐かしい地名がよみがえる。定価二七三〇円

浮世絵大事典

重版出来

膨大な浮世絵の情報を幅広く、最新成果を盛り込み一六三三項目にも及ぶ事項を収録した初の大事典。浮世絵の鑑賞に、研究に最適。定価二九四〇〇円

RODI版 ぐずし字解読用例辞典

山田要治編

ぐずし字解読・用例の両辞典の検索方法を同時に使える画期的な辞書ソフト。即座に候補のぐずし字を一覧で表示。ウインドウズ対応。価格二九四〇〇円

柴山守編

柴山守編

(価格税込)

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-17 TEL 03-3233-3741

人文会会員名簿

人文会ホームページ <http://www.jinbunkai.com/>

2009年5月現在

社 名	〒	住 所	TEL	FAX
大月書店	113-0033	文京区本郷 2-11-9 http://www.otsukishoten.co.jp/	3813-4651	3813-4656
御茶の水書房	113-0033	文京区本郷 5-30-20 http://www.ochanomizushobo.co.jp	5684-0751	5684-0753
紀伊國屋書店	153-8504	目黒区下目黒 3-7-10 http://www.kinokuniya.co.jp	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	108-8346	港区三田 2-19-30 http://www.keio-up.co.jp/	3451-6926	3451-3124
勁草書房	112-0005	文京区水道 2-1-1 http://www.keioshobo.co.jp	3814-6861	3814-6854
春秋社	101-0021	千代田区外神田 2-18-6 http://www.shunjusha.co.jp	3255-9611	3253-1384
晶文社	101-0021	千代田区外神田 2-1-12 http://www.shobunsha.co.jp	3255-4501	3255-4506
誠信書房	112-0012	文京区大塚 3-20-6 http://www.seishinshobo.co.jp	3946-5666	3945-8880
創元社	162-0825	新宿区神楽坂 4-3 煉瓦塔ビル http://www.sogensha.co.jp	3269-1051	5229-7139
筑摩書房	111-8755	台東区蔵前 2-5-3 http://www.chikumashobo.co.jp	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	113-8654	文京区本郷 7-3-1 http://www.utp.or.jp/	3811-8814	3812-6958
日本評論社	170-8474	豊島区南大塚 3-12-4 http://www.nippyo.co.jp	3987-8621	3987-8590
白水社	101-0052	千代田区神田小川町 3-24 http://www.hakusuisha.co.jp	3291-7811	3291-8448
平凡社	112-0001	文京区白山 2-29-4 (泉白山ビル) http://www.heibonsha.co.jp/	3818-0874	3818-0674
法政大学出版局	102-0073	千代田区九段北 3-2-7 http://www.h-up.com/	5214-5540	5214-5542
みすず書房	113-0033	文京区本郷 5-32-21 http://www.mszo.co.jp	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	101-0054	千代田区神田錦町 3-6 石澤ビル 3F http://www.minervashobo.co.jp/	3296-1615	3296-1620
未来社	112-0002	文京区小石川 3-7-2 http://www.miraisha.co.jp	3814-5521	3814-8600
吉川弘文館	113-0033	文京区本郷 7-2-8 http://www.yoshikawa-k.co.jp	3813-9151	3812-3544

(休会 草思社)